

縄文時代中期末葉から後期前葉における土器群と遺構の関係について —福島県域における屋外土器埋設遺構の分析とその位置づけ—

太田 圭

要旨

福島県域における屋外土器埋設遺構の集成および分析を通じて、縄文時代中期末葉から後期前葉における遺構の情報の拡散・受容の様相や空間利用の変化を検討した。その前提として、東日本太平洋側地域における中期末葉から後期前葉における土器群の整理を行った。この整理の過程で阿武隈川流域に中期末葉から後期初頭に在地的な土器群が複数の系統の土器群の関与のもとに成立したことを認め「牛蛭式」を仮設定し、後続する網取式の成立過程を見通した。屋外土器埋設遺構を分析するなかで「牛蛭式」と「屋外横位土器埋設遺構」という特定の土器群と特定の属性を有する土器埋設遺構の間に強い結びつきがあることを見出した。また、「横位土器埋設遺構」に着目して東関東から東北中部太平洋側地域における屋外土器埋設遺構と屋内土器埋設遺構の検討を行った。その結果、屋内土器埋設遺構と屋外土器埋設遺構に関する情報の拡散・受容の差異について一定の見通しを持つことができた。

1. はじめに

1-1. 研究の目的

筆者は縄文時代中期後葉から後期前葉の東日本における地域間関係の時間的変化を遺物や遺構の分析をもとに具体化することを目的に研究を進めるなかで、住居外に構築される屋外土器埋設遺構（太田 2017；山田 2015）の分析を行ってきた。これまでの分析で、那須を中心に横位埋設の屋外土器埋設遺構が集中することを指摘し、中通りの土器埋設遺構と共通性を持つ可能性を指摘し、特定の土器群がこれらの地域で横位土器埋設遺構の埋設土器に採用される可能性を指摘した（太田 2019a・b）。しかし、福島県域における集成データや分析結果の提示を行っていなかったため、本稿では屋外土器埋設遺構が盛行する中期後葉から後期前葉の福島県域における屋外土器埋設遺構について検討する。また、遺構の時間的変化を確認するための時間軸を共有するために福島県域とその周辺地域における中期後葉から後期前葉の土器変遷案を提示する。その過程で土器埋設遺構との関連がうかがえる「牛蛭式」（福島 1987, 2012）と呼ばれてきた土器群を整理する。これらの整理に基づく時間軸をもとに、福島県域の屋外土器埋設遺構を集成・分析する。なお、屋外土器埋設遺構は東日本において、中期後葉から後期前葉の時期以外にも、早期後半から前期の東北地方、後期後半から晩期の沿岸部地域を中心に盛行すると筆者は捉えている。本稿では、内容が煩雑化するのを避けるため、中期後葉から後期前葉の屋外土器埋設遺構を中心に、必要に応じて屋内土器埋設遺構も検討する。

1-2. 東日本における屋外土器埋設遺構の研究史

中部高地・西南関東を中心とした 2018 年までの研究史は以前筆者がまとめている（太田 2017, 2019a）。2019 年以降に著された土器埋設遺構に関する論考は、岐阜県における屋内埋設土器と埋設属性の分析（岩永 2019a）、山梨県における屋内土器埋設遺構の集成と分析（岩永 2019b, 2020）、長野県千曲市屋代遺跡群の資料を用いて屋内土器埋設遺構と屋内埋設土器の胎土分析とを組み合わせた分析（水沢 2022）、野坂知広による神奈川県域を中心とした屋外土器埋設遺構の概観（野坂 2022）などが確認できる。発掘調査報告書で報告された例には紙幅の都合上触れられないが、長野県上伊那郡辰野町沢尻東原遺跡では、中期中葉の一定期間、住居域に伴って屋外土器埋設遺構が構築されることが報告されており（廣田 2021）、中期中葉の中部高地における屋外土器埋設遺構を検討する重要な資料として注目され、正式報告が待たれる。

筆者は、北関東における中期後葉から後期前葉における社会変容プロセスを検討するなかで、屋外横位土器埋設遺構が中期末葉から後期初頭に那須（那珂川上流域）～中通りに集中的に展開することを指摘した（太田 2019b）。そして屋外横位土器埋設遺構において、①那須・中通りともに埋設土器に用いられる土器に共通性がみられること（「舌状突起を有する土器群」）、②中通りでは「舌状突起を有する土器群」に底部穿孔・胴部穿孔が施されることが多いこと、③中通りでは屋内横位土器埋設遺構や同時期に複数の屋内土器埋設遺構が構築される例が屋外横位土器埋設遺構とほぼ同時期に発達するが、那須では屋内土器埋設遺構

自体が発達せず、屋内横位土器埋設遺構や同時期に複数の屋内土器埋設遺構が構築される例は八溝山地の西側で確認されること、④屋内土器埋設遺構と屋外土器埋設遺構が互いに影響を及ぼしており、屋内土器埋設遺構は他地域（中部高地・西南関東）から波及した可能性が高いが、屋外土器埋設遺構は各地域でそれぞれ展開したものであること、の4点を指摘した（太田2019a・b）。拙稿では、福島県域の資料について精確な集成および検討を加えることができなかったため、集成を行ったうえで再検討する。また、屋外土器埋設遺構を検討する目的として「空間利用の変化」がある。筆者は、屋外土器埋設遺構の遺跡内出土位置の分析から屋外土器埋設遺構が遺跡内の空間利用の変化を示す資料であると考えてきた（太田2017, 2019a）。中期後葉から後期前葉における屋外土器埋設遺構からみる空間利用の変化は中部高地・西南関東と栃木県域とで異なるとみられ（太田2019a）、福島県域の状況を把握することでより、当該期の共通性・地域性が明瞭になると考えられる。

2. 対象資料と分析項目

集成する遺構は屋外土器埋設遺構で、集成対象地域は福島県域である¹⁾。対象地域は浜通り（北部：富岡町以北・南部：楡葉町以南）、阿武隈川上流域（本宮市以南）、阿武隈川中流域（二本松市以北）、真野川流域（飯舘村周辺）、会津、に分けて文中で区分する。図表では真野川流域を浜通り北部に含め、阿武隈川上流域は中通り中部・南部、阿武隈川中流域は中通り北部と示す場合がある。分析対象遺跡を図1に、対象遺跡の一覧を表1に示す。

対象時期は中期後葉から後期前葉とし、関東地方の土器群でいうと、おおよそ加曾利E1式から堀之内2式までを中心とし、一部に中期前半（大木7式）の例を含む。時期区分の詳細は次章で示す。集成する屋外土器埋設遺構の属性やその分析方法は、筆者の集成基準に準拠する（太田2017, 2019a・c）。集成する属性項目は、以下の通りである。

- ・ 所属時期：埋設土器の土器型式
- ・ 出土タイプ
- ・ 遺跡内出土位置
- ・ 埋設姿勢
 - 正位、逆位、斜位（正・逆）、横位・合口（縦位・横位）、入れ子（正位系・逆位系・横位系）
- ・ 埋設土器の埋設された部位
 - 完形（口縁部から底部まで残存し最大径・器高・口縁径・底部径が復元可能な例）、胴上半（口縁部から胴中位が残存する例）、胴部（胴中位付近が

残存する例）・胴下半（胴中位から底部が残存する例）、口縁部（頸部より上が残存する例）、底部（底部のみが残存する例）

- ・ 埋設土器の器種
- ・ 埋設土器に対する意図的欠損行為の有無
 - 上部削平等の影響を加味しても、埋設当時から土器を打ち欠くなどしていたと考えられる例。例えば正位に胴上半を埋設していた場合、胴下半は打ち欠いてから埋設した可能性が高い。横位埋設の場合は意図的に欠損させていたかは判断できない。底部のみを打ち欠いている例は「底部打欠」として集成した。また、穿孔行為も意図的欠損行為に含め、底部穿孔（A：底面の中心付近に穿孔、B：底面の中心付近より外側に穿孔）、胴部穿孔（底部付近の側面も含む胴部への穿孔）として集成した。
- ・ 埋設土器の法量
 - 残存・推定可能な器高・口縁径・底部径・最大径
- ・ 掘方の形状、大きさ、深さ、内部の土層
- ・ 遺構内出土遺物、遺構の上部施設
- ・ 周辺に併存する同時期の遺構
 - 出土タイプと出土位置は、図表上では以下のように表記している。

【出土タイプ】

- ・ Xタイプ：単独出土
- ・ Yタイプ：群集出土（同時期の土器埋設遺構が近接）

【出土位置】

- I-a類：住居に近接して埋設
(近接は遺構分布図上で5～7m程度を目安)
- I-b-i類：中央広場があれば中央広場に埋設
- I-b-ii類：住居集中域の内縁に埋設
- I-b-iii類：住居集中域の外縁に埋設
- ※内縁・外縁は同時期に併存する住居跡の分布が環状・弧状に見かけ上みえた場合の中心側縁辺を内縁その反対側を外縁と便宜的に分けている。
- I-c類：住居址覆土土器埋設遺構（前段階（細別1～2段階）・同時期の住居址の覆土（住居址上に埋設）
- II-a-i類：土坑群に近接して埋設
- II-a-ii類：配石遺構に近接して埋設
- II-b類：遺物集中域内に埋設
- III類：同時期の遺構が近接しない地点に埋設

3. 時間軸の整理

3-1. 対象資料と編年

ここでは大木10式から綱取Ⅱ式の土器群について整理を行う。大木7a式から大木8b式は中野幸大(2008)、大木9式は丹羽茂(1971)・森幸彦(1985、

2008)・相原淳一(1988)の編年観におおむね準拠する。

関東地方の加曽利E式前半の土器は、新地平・地平編年(黒尾2016;小林ほか2004)や海老原都雄の『縄文土器大観』の北関東地域の編年観(1988)におおむね準拠し、加曽利E式後半は稲村晃嗣(1990)・石井寛(1992)・加納実(1989, 1994)・鈴木徳雄(2007, 2013)・千葉毅(2012, 2013)の変遷観を参考とする。筆者はアラビア数字で加曽利E式を表記し、加曽利E2式と加曽利E3式は磨消帯の明確な垂下をもって区分する。

東北地方の後期初頭から後期前葉のいわゆる「門前式」の編年観はおおむね稲村晃嗣の編年観(2008)に準拠し、地域的な土器群は鈴木克彦(2001, 2004)の検討を参照する。東北地方の後期初頭から後期前葉の段階区分に土器型式名(特定の土器群名)を用いず、「後期第〇段階」として表記することとする。

関東地方の称名寺式・堀之内式の土器は、市川考古博物館(1982)・石井寛(1984, 1992, 1993, 1995, 2018)・加納実(2003, 2008)の変遷観に準拠し、北陸地方の土器は石坂圭介(2008, 2012)・新潟県村上市元屋敷遺跡報告(金子2002)・金内元(2012, 2015, 2018)・田中耕作(1999, 2002, 2019)・鈴木徳雄(2018)の検討を参考とした。

上記のいずれの時期・地域における土器編年観についても、本稿では先行研究の編年観・変遷案を引用してそれに準拠するという形で筆者の立場を示すにとどめる。しかし、中期後葉から後期前葉の東日本地域における土器群は、広域的な視点に立った際の土器群の捉え方や土器型式の認定の問題(段階の呼称の問題を含む)、1段階を形成する土器群の組成の問題、土器変遷の詳細な部分は検討を要する点が多い。本稿では土器群の詳細な検討を提示できないため、このような先行研究上の問題は別の機会に論じたい。次に、本稿で主に触れる大木10式と「牛蛭式」、綱取式に関する研究史に触れておく。

3-2. 研究略史

3-2-1. 大木10式

大木10式の標式資料は宮城県七ヶ浜町大木囲貝塚出土資料である。標式資料に関する研究史や後世の評価、山内清男の一連の研究史は、菅野智則の論考に詳しい(菅野2011a・b;早瀬ほか2006, 2017)。

丹羽茂は福島県二本松市原瀬上原(うえはら)遺跡や同県本宮市荒井上原(かんばら)遺跡の層位的出土資料から、山内清男の型式設定資料における大木9式と大木10式の時間的断絶部分を含めた大木9式の後続

段階を大木10式とし、a・b・cの3期に区分した(丹羽1971)。この丹羽編年は広く支持されたが、堀越正行や八巻一夫は、丹羽編年の大木9b・10a・10b式は山内清男提示の大木9式・10式の範疇に入らないと指摘し(堀越1972;八巻1974)、「上原式(原瀬上原(うえはら)遺跡を標式)」を提唱した。

柳澤清一は、山内清男の型式設定資料を尊重する姿勢から丹羽1971編年を批判し、堀越や八巻と別の二本松市塩沢上原(うわはら)A遺跡を標式とするアルファベット文を主体とする「上原式」を提唱し、大木9式3細分、「上原式」3細分、大木10式5細分を行った(柳澤1980)。

『縄文文化の研究』(丹羽1981)のなかで丹羽は、大木9式を2段階、大木10式を3段階区分とした。大木10式の内容は以前の3期区分(a・b・c)と異なり、第I段階(1971年丹羽編年大木10a式)・第II段階(1971年丹羽編年大木10b・10c式)・第III段階(宮城県宮城郡松島町西ノ浜貝塚4層出土資料:宮城県教育委員会1967)とし、後期初頭土器群との中間型式としての第IV段階の存在も示唆した。

鈴鹿良一は、福島県相馬市馬見塚遺跡の切り合う複式炉の炉埋設土器に1971年丹羽編年の大木10a式と10b式を確認し、両型式がそれほど時間差をもたないと考え大木10式前半段階とし、無文帯の切り合いをメルクマールに後半段階を設定した(鈴鹿1982)。鈴鹿は、福島県相馬郡飯館村上ノ台A遺跡の報告のなかで丹羽第I段階と第II段階の一部を大木10式古段階、丹羽第II段階に含まれた微隆起線文土器を分離し無文帯により文様表出された沈線文系土器とともに大木10式中段階、西ノ浜貝塚4層出土資料を大木10式新段階とした(鈴鹿1984)。

森幸彦は、塩沢上原A遺跡から出土した資料を検討した。ここでは大木9式から10式への移行に重点が置かれ、大木9式中～新、大木9式新、大木10式古、大木10式中に区分された。内容としては鈴鹿とほぼ同一の内容が示され、主文様が縄文部で表出されるものが古、無文部で表出されるものが中とされている。大木9式中～新において文様間の蛇行沈線文が大木9式新では消滅し、分断されていた文様が縦方向に連結することが可能となり、ステッキ状文様が配置されるようになる。この配置の規制が弱まると文様が独立して器面に施され、大木10式の成立に至る、という変遷の方向性を示した(森1985)。その後、本間(1994)の考えに従い、大木10式2細分が妥当との見解を示している(森2008)。

中村良幸は、岩手県旧大迫町観音堂遺跡出土資料を報告し、中期後葉から後期初頭の変遷を示した(中

村 1986)。丹羽第Ⅲ段階類似土器群とそれに後続する土器群、門前Ⅰ式土器類似土器群が層位的に報告された。

池谷信之は、北・東関東の堀之内Ⅰ式にみられる磨消縄文の成立を大木10式に求め、その検討過程で大木9・10式を整理した。柳澤の「上原式」という名称は、大木10式まで系統的に連続することが明らかでない大木式の系統観に誤解を与えると指摘した。丹羽編年には山内資料の断絶部を大木10式に組み入れる編年の根拠が明示されていないことを指摘し、池谷自身は大木9式以来の縦方向施文規則の解放を根拠に断絶部分を大木10式に含めた。大木9式をa～cの3段階に区分し、cはさらに2段階に細分したうえで、大木10式への文様の変遷を示した。1981年丹羽編年の器形を上下に区分する胴部への区画線の有無を根拠とした第Ⅰ段階と第Ⅱ段階の時期差としての段階区分ができないこと、大木10式最新段階と評価される刺突列が沿う隆起線が口縁以下に施される特徴や無文帯で表出されるL字文などの特徴を持つ西ノ浜貝塚4層出土土器群と丹羽が第Ⅱ段階として示した微隆起線区画を施す土器群が新しい段階まで存続することを指摘し、これらの土器群は時期差ではなく地域差であることを指摘した。よって、丹羽第Ⅲ段階は第Ⅱ段階の一部と併行し、大木10a式・大木10b式の2細分ののち後期に移ること、大木10b式の沈線区画系土器は3段階の変遷を経ることを示した(池谷1988)。

相原淳一は、宮城県刈田郡七ヶ宿町大梁川遺跡出土資料を報告し、周辺地域の土器と比較して第Ⅳ層土器：大木9式前半、第Ⅲ層土器：大木9式後半、第Ⅱ層：大木10式前半(a～d層でa・bとc・dで2細分可能を示唆)、第Ⅰ層土器：大木10式後半と位置づけた(相原1988)。丹羽茂は、『縄文土器大観』にて大木9式、大木10式とも古・新の2段階区分にとどめており、大梁川遺跡の資料をふまえていると考えられる(丹羽1989)。

本間宏は、観音堂遺跡と大梁川遺跡の出土状況を層位的出土例として捉え、大木10式を2分した。前半の大木10a式は広域に分布する一方、大木10b式は北上川流域を分布の中心とする一群に限定されると述べ、後期初頭の土器群として「観音堂式」を設定し、大木10式と門前式を繋ぐ段階とした(本間1994)。

稲村晃嗣は、岩手県北上市横欠遺跡の報告(稲村1997)のなかで、北上川中流域の中期末葉から後期初頭の土器群の変遷をまとめた。稲村は、観音堂遺跡と北上市館Ⅳ遺跡の住居内出土資料をもとに大木10式を3段階に区分し、門前式への連続性を示している。

菅原哲文は大梁川遺跡の層位的な出土資料に対応さ

せ、一括性のある資料や層位的出土資料を中心に、山形県内で出土した資料を大木9式・大木10式ともにそれぞれを3段階に区分した(菅原1999)。その後、宮城県登米市浅部貝塚出土土器の分析を行い、大梁川遺跡の資料と比較して宮城県の南北で大木9式の地域性を検討した。この検討をもとに、東北地方の各地域における属性の類型組成(文様・器形)を比較した。大木9式前半・後半を通じて宮城県南部と北上川下流域とでは異なる地域性をもつことを明らかにし、深鉢の組成に顕著な相違と文様帯および文様の量的関係の地域性を指摘した(菅原2007)。

阿部昭典は大木9式から大木10式の土器を整理し、東北北部・中部・南部と信濃川流域の並行関係をまとめた(阿部2008)。大木9式は2細分、大木10式は3細分が可能であるとしながらも、大木10式中段階・新段階の段階区分はこの時期に大木10式の地域性が強くなる傾向にあることから、広域的に段階区分することが困難であり、検討を要すると指摘している。

菅野智則は、土器型式の実態を把握するための分析方法の確立を目的とし、多様な属性のうち形態的特徴(器形と各部位の形態)を取り上げて検討を加えた(菅野2007)。大まかな時期区分の中での器種・器形・法量・形態の変化とともに、中期末葉から後期初頭における細分段階での器形の変化とその特徴を示した。菅野は、東北南部(菅野2011a・b)と東北北部(菅野2017)における大木8b式から大木10式における型式設定から現在に至る研究史をまとめ、現況の課題を丁寧に整理している。

東北北部の大木10式併行期の研究史は小保内裕之に詳しく、この時期の土器群の段階設定を行っている(小保内2008)。鈴木克彦は地文縄文の上に沈線で文様を描く手法(施文手法A種)が東北北部の施文方法の特徴であり、時期が新しくなると磨消縄文(施文手法B種)が増加することを指摘し(鈴木2001)、東北北部の「中の平3式」「最花式」に後続する中期最後の型式として「大曲1式」を設定し、主要文様類型(S字文系・J字文系・波頭文)が5～6段階で変遷することを示し、大曲1a式・大曲1b式・大曲1c式を設定した(鈴木2000)。しかし、この段階設定は、細分段階によっては資料が不十分であり、その分布域を含めた型式範囲も確定していない。後期初頭として鈴木が設定する「上村式」(鈴木2001)への大曲1式からの変遷もスムーズには進んでいない。鈴木は大木10式の研究史にふれ、特定地域の型式分類を隣接地域にも援用する接ぎ木型式は地域差の認識を欠くとし、本間宏(1990)などの東北全体を大木式の範疇で捉える編年観を批判している(鈴木2001)。鈴木は、大木10

式と門前式の系譜関係を確認し、岩手県旧藤沢町上野平遺跡 RD06・22 出土資料を中期終末として位置づけている（鈴木 2004）。

東北南部・阿武隈川上流域の中期後半の土器群は、福島雅儀の論考に詳しい（福島 1987, 2012）。福島は、大木 9b 式から大木 10 式に並行する土器として、「びわ首沢式」（福島 1987）、「牛蛭式」（福島前掲）を設定し、山崎充浩は福島県田村郡三春町春田遺跡の報告でびわ首沢式に先行する「春田Ⅱ式」（山崎 1990）を設定した。福島は、三春町越田和遺跡（福島県教育委員会 1996）の出土土器を層位的出土状況にもとづいて 3 群にわけた。越田和 1 群土器は、1989 年丹羽編年の大木 9 式新相および大木 10 式古相に相当し、福島の「びわ首沢式」に相当する。越田和 2 群土器は、1989 年丹羽編年の大木 10 式新相に相当し、福島の「牛蛭式」、本間宏の「綱取式に先行する土器群」（本間 2008）が含まれていると提示された図からは判断できる。越田和 3 群土器は、堀之内 1 式に相当し綱取Ⅱ式も含まれる後期前葉の土器群である。

3-2-2. 「牛蛭式」

「牛蛭式」の提唱

大木 10 式後半とその直後段階には中通りを中心に、「牛蛭式」として設定された土器群が存在する（福島 1987, 2012）。これは当初、寸胴形で口縁部に「連接横位長楕円文」が配されることを指標に設定された。そのため、仲田茂司により「「連接横位長楕円文」をもつ深鉢 C のみで設定された「牛蛭式」が土器型式として成立しないのは明かであるが、（中略）この器種が時間的空間的に特徴的なものであることも事実であるので、「牛蛭型」…（略）」（仲田 1992：104）と批判された。批判より前に設定者（福島雅儀）は、「牛蛭式」とした土器の類例が大木 10 式前半に相当するという本間宏の指摘（本間 1990）を受けて、当初大木 10 式後半に限定していた「牛蛭式」の存続時間幅の上限を古くしていた（福島県教育委員会 1991）。前後して志賀敏行は、これらの土器群を後期に位置づけた（志賀 1990）。仲田は、三春町西方前遺跡の報告のなかでこの福島の型式再設定に触れているものの、「牛蛭型」を大木 10 式後半段階の時間幅に位置づけている（図 2）。図 2・3 には両者の変遷観を示した。図 2 には、西方前遺跡報告（仲田 1992）で対比されている柳澤清一の土器型式名（柳澤 1987, 1989, 2006）と三春町柴原 A 遺跡出土土器群の分類（福島 1989）を併記して示している。

「牛蛭式」設定をめぐる議論

「牛蛭式」／「牛蛭型」とその前後の土器群の段階

設定も含め、同一地域の土器（大滝根川流域）を扱っているものの仲田・福島両者の意見はそれぞれの土器群の捉え方もあいまって一致をみていなかった。福島は、「牛蛭式」前段階の大木 9b 式から大木 10 式古相の土器群に丹羽編年に対応できない地域性の強い要素を認め、「びわ首沢式」を設定した（福島 1987）。その後、特定の資料に基づく型式設定であったとして、「びわ首沢式」を「仲平式」に再設定しており、加曽利 E 式土器群（加曽利 E4 式）と大木式土器群（大木 9b 式から大木 10 式前半）の共存や接触を加味した土器群（型式）設定を行っている（福島県教育委員会 1991）。この点に関して仲田は、「「仲平式」の構造的特色は、大木系土器と加曽利系土器の共存ないし融合であると理解されるが、（中略）、筆者とは異なる意見である。また、佐藤達夫氏が指摘しているように、共存する異系統の土器を一括して一型式とするためには、その組み合わせが一定地域に安定していることを確認する必要がある。福島氏が主張するように、当地域独自の土器型式が存在する可能性は高いが、佐藤氏の指摘をクリアするにはまだ資料不足の感が否めない段階で、慌てて型式を設定しても「朝令暮改」になることは「びわ首沢式」の命運をみても明かである」（仲田 1992：103）と指摘した。福島は、「抽出された一つの土器群が、時間的空間的まとまりを持って存在する可能性があり、従来の概念では説明できない場合、その土器群に名前をつける必要があると筆者は考えている。（中略）名前をつければ、それを明確に対象として捕らえることが可能になる。（中略）各研究者によって大木 10 式の内容と概念が異なれば、研究も進まないし、議論もかみ合わない」（福島県教育委員会 1996：161）と述べた。二人の意見は、福島県域における中期末葉土器群に対する土器型式設定の捉え方を表しているものであるが、十分な資料的まとまりを重視し型式設定に慎重な仲田と、型式設定することで特徴的な土器群に対する研究が深化すると考える福島で、考え方の違いが表れている。その後、「びわ首沢式」／「仲平式」を含む当該期の土器群ならびに「牛蛭式」に関する目だった論考は著されていないが、福島は越田和遺跡と柴原 B 遺跡の集落分析を行うなかで、「牛蛭式」を「越田和 2 群土器（牛蛭式）」として段階設定している（図 3）。これによると、特定の器種や土器群に依らず、加曽利 E 式土器や称名寺式土器、この時期に東日本の広範囲に分布する口縁部無文帯をもつ胴部地文のみの土器など複数の系統の土器群（土器型式）が組み合わせられた段階の総称としての「牛蛭式」の設定（福島 2012）と筆者は捉えている。

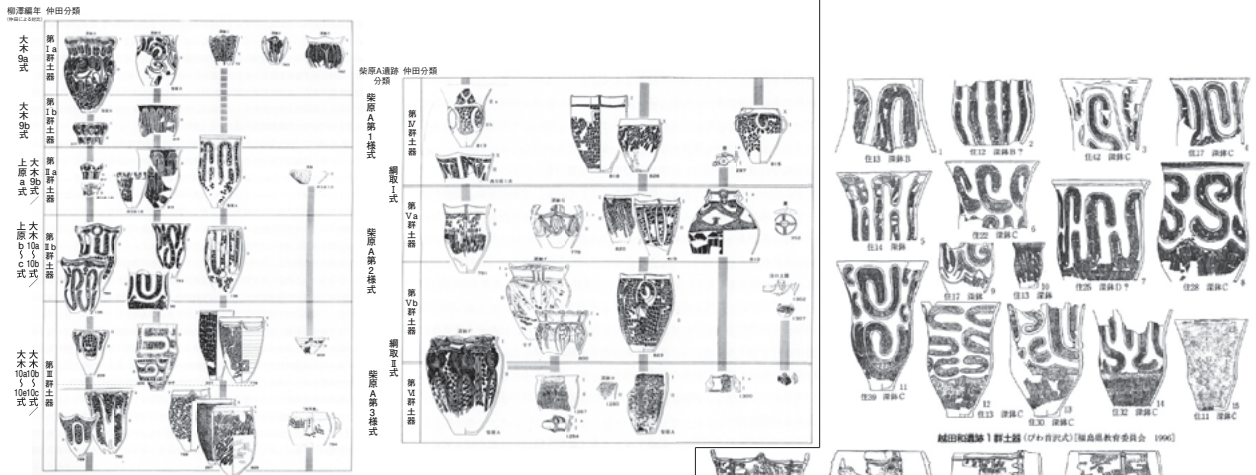


図2 仲田茂司による変遷観



図3 福島雅儀による変遷観

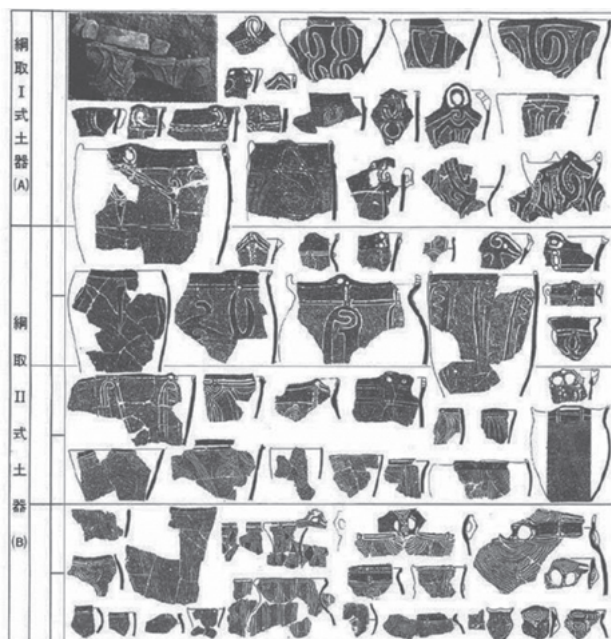


図4 馬目順一による網取式の変遷

3-2-3. 網取式

網取式は、福島県いわき市網取貝塚出土土器を標式として、馬目順一により設定された型式である（馬目 1968）。馬目は、設定後も浜通りにおける出土資料の検討を進め後期前葉を中心とした編年を構築した（馬目 1970, 1977, 1982 など：図 4）。馬目による網取 I・II 式の区分と変遷観（馬目 1970）は、明快であったためその後の広域編年研究において多くの研究者がおおむね馬目の編年観に準拠していると評価されている（本間 2008）。網取式は、前項の仲田・福島のほかにも検討されており（青木 1983；今村 1977；押山 2002；志賀 1990；鈴木 1997；本間 1990, 2008；柳澤 1977, 1978, 1979）、基本的に馬目編年と大きく違えることはない。『総覧縄文土器』で本間宏により示された網取式の変遷図は、馬目の網取 I・II 式の基準（口縁部文様帯を区画する口縁部下端区画線の表出方法の変化）が必ずしも反映されておらず、網取 II 式には堀之内 1 式土器に近い資料が多く配置されている。もっとも、堀之内 1 式の成立に網取式が介在したことは古くから指摘されており（柿沼 1975, 1976；谷井 1977）、網取 I 式と堀之内 1 式古段階の類型（D 群・E 群：石井 1993）の成立に強い影響を与えており（鈴木 2018）、その後の網取 II 式と堀之内 1 式古段階・中段階の土器は明確に型式を弁別することが難しい中間的な個体も多く存在すると筆者は理解している。

3-3. 時間軸の設定のための土器群の整理

土器の分析の基本的な流れは、各地域で遺跡・遺構単位の資料を抽出し文様の変化を中心とした型式学的変化の把握・配列の後、遺構出土資料の層位的な出土例から型式学的変化との相互検討、系譜が異なる土器群との遺構内における共伴関係から土器群間の併行関係を検討することである。本稿では、この分析作業の第一段階である遺跡・遺構単位の資料の提示ができない。本稿では上記の分析を行ったうえで筆者が配列した変遷案（図 8～13・17・21）を提示し、用いた遺構単位の層位的な出土例を記載することで説明に代え、分析作業は別稿で提示し本稿で提示した変遷案を補うとともに再検討することとしたい。このような形になるのは本稿の中心は土器埋設遺構の検討であり、遺構の時間的変化の時間軸を提示することが本論で土器に触れる目的だからである。

3-3-1. 大木 10 式の検討

筆者の大木 10 式の編年観は、先行研究の型式学的変化の見通しや層位的出土状況の報告と大きく変わることはなく、これらをベースとしている。なお、筆者

は大木 10 式を古段階・中段階・新段階の 3 段階に区分する立場を採る。

まず大木 10 式の主文様は、その文様形態から①アルファベット文、②波頭文（図 9-33・43・44）、③楕円文（図 8-18・19）、④横流れ S 字文、⑤横 6 字文の大きく 5 つのタイプがある。それぞれのタイプが主体となる地域・時期は、主文様のタイプにより異なる。また、地域により各主文様タイプの存続時期や組成率も異なり、タイプにおける文様形態の型式学的変化の程度や速度も異なる。本稿では、器形の変化を概観した後タイプごとの時間的変化と地域の特徴をまとめる。大木 10 式土器群は浅鉢、注口付土器、瓢形土器などが伴うが今回は深鉢のみを検討し、文様・文様表出方法・器形を中心とした型式学的変化を述べる。

器形の変化

大木式土器群の中期後葉から後期初頭における器形の変化は、池谷信之と菅野智則により分析されている（池谷 1988：図 5；菅野 2007：図 6）。器形の変遷に関する筆者の考えも両者の見解と違いはない。図 5 における大木 9c 式は筆者の大木 9 式、大木 10a 式は筆者の大木 10 式古段階・中段階前半、大木 10b 式は筆者の大木 10 式中段階後半・新段階に概ね対応している。池谷の図は、基本的な器形が提示され、口縁端部の形状（波状口縁か平縁か）で区別されていない。図 6 の c1・c2・d・a2 右は大木 9 式期に多い器形である。a2 左は大木 9b 式から大木 10 式古段階にかけて多い器形、a2 左・a3 は大木 10 式に基本となる器形で、a2 左の胴中位の張出がより突出すると、後期前葉の L 字文・方形区画文系土器群の器形となる。b は大木 10 式期の胴部地文のみの土器に多い器形である。a1 は大木 10 式新段階に確認される器形で、無文部による横 6 字文のほか、後期に継続する J 字文文様が付加され、台付・注口付の一群もある。d は大木 10 式新段階後半から門前式前半に基本となる朝顔形深鉢器形である。鉢・浅鉢・壺は大木 9b 式から大木 10 式にかけて確認される、鉢・浅鉢は後期前葉まで a1 左や b が残存する。中期後葉の深鉢は小形であるが、後期初頭にかけて徐々に大形化することが指摘されている（菅野 2007）。大木 9 式・大木 10 式にも大形の深鉢は組成するが、いわゆる「門前式」の朝顔形深鉢は大形かつ重量のある個体が多い。

文様タイプの変遷

主文様①は前段階の大木 9b 式から引き継がれる要素で、主文様③・④・⑤は主文様①・②から派生して生成される文様要素と考えられる。主文様②・③は大木 10 式古段階から新段階までその文様形態（パターン）を大きく変えずに存続する一方で、主文様①は文

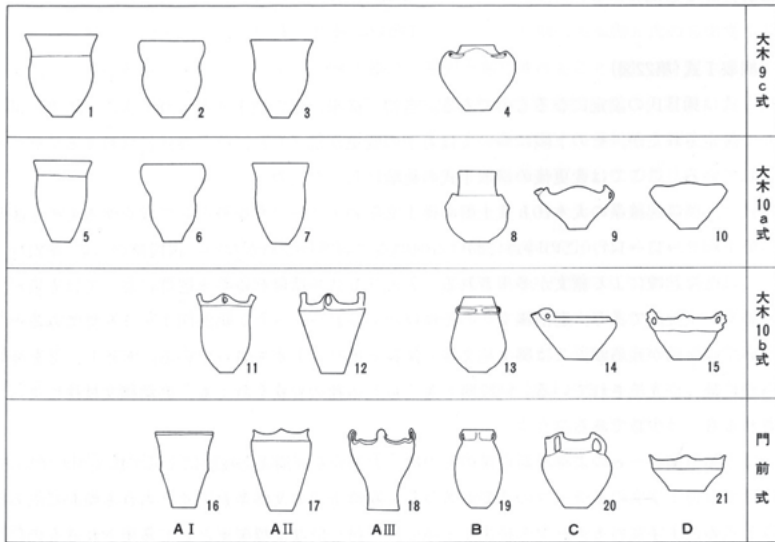


図5 池谷信之による器形の変遷

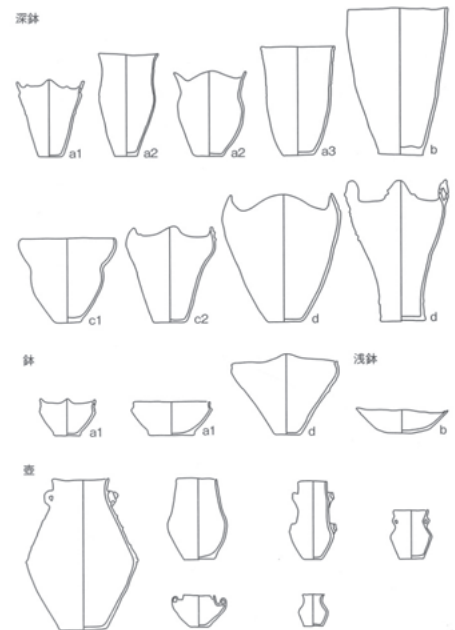


図6 菅野智則による器形の変遷

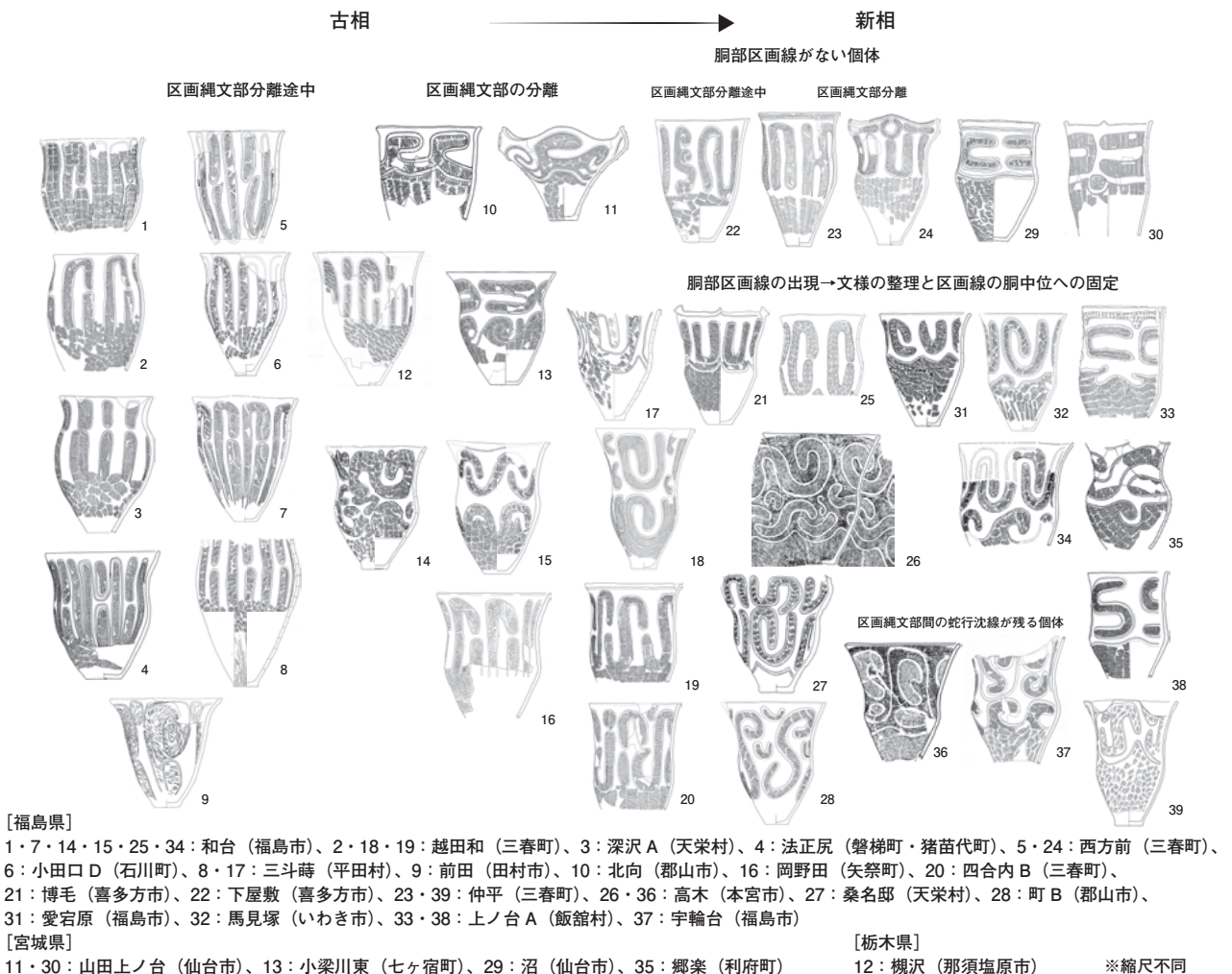


図7 大木10式古段階から中段階における胴部区画線の獲得

様形態を変えながら主文様④・⑤へと変遷していく。しかし、主文様①の中でも大木10式古段階から中段階の文様形態が新段階まで存続する地域も存在する。主文様⑤の段階になると、それまで縄文部で主文様を表出していた傾向が、無文部が主文様を表出する傾向へと変化する。大木10式の文様要素のうち主文様②・④・⑤は、各地域における次段階の後期土器群の文様に影響を与えている。以下では、主文様の形態の変化を主軸に、各段階の特徴を記載する。文様形態のうち古段階から中段階では、主文様②は大きな変化はみられず層位的出土例からみても文様形態や文様配置・構成をほとんど変化させずに存続するため、古段階・中段階は主文様①・④を中心に変化を追う。

大木10式古段階 古段階の指標は、「文様施文の縦方向規制からの解放」、「縄文部の単位文化」「アルファベット文タイプが主文様として定着」が大きなもので、「胴上半と胴下半を区画する胴部区画線の出現」も確認される。

大木9式までの縦方向の文様規制が解放され、主文様が自由に配され横方向のつながりももつようになる。その結果、大木9b式で文様部（縄文部）の下端を中心に開放されていた文様を区画する線が閉じ、器面の全面に閉じた縄文部として区画された縄文部により楕円文・円文やアルファベット文（e・u・c・S字文など）が展開する。つまり、区画縄文部の単位文化の萌芽がみとれる。胴上半のアルファベット文の単位文（区画された縄文部で表出）施文域と胴下半の地文としての縄文施文部施文域を区画するための胴部区画線が生成される個体が出現するのも本段階である。

ここで、胴部区画線の獲得に至る経緯を考えてみたい（図7）。大木9b式から大木10式古段階の間には2つの大きな流れが考えられる。ひとつは、区画された縄文部で表出された縦長の楕円・半楕円文の胴部文様の開放された下端部が個々に閉じることでアルファベット文として単位文化し、主にc字文・縦S字文が生成される。これは大木10式古段階において、口縁部文様帯を有する個体は胴部全面に、有さないものは器面全体にアルファベット文が配置される一群となる。もうひとつは、隣り合う区画された縄文部の開放された下端が横位に連繋し、融合することで横方向に繋がってアルファベット文をはじめとする区画された縄文部を形成する一群である。この変化には、大木9b式段階で区画された縄文部で表出される主文様の間を巡っていた沈線も大きく関与し、横S字文やu・e字文などを生成すると考えられる。生成されるアルファベット文などの区画された縄文部をみると、2つの流れが同一個体で生じている場合も見受けられる。

区画された縄文部による主文様の単位文様化が進行する過程で、個々の文様単位の下端部以下に縄文が施文され、胴下半の地文となる縄文部に区画された縄文部の下端が埋もれている状態となる一群が確認される。型式学的変化を推定すると、この状態の後、胴下半の地文としての縄文部から区画縄文部である単位文が分離・切断され、胴上半に単位文として固定化されると考えられる。

胴下半縄文部に文様単位の下端もしくは文様単位の一部が埋もれた例や胴下半縄文部からアルファベット文の単位文が分離していく過程がうかがえる個体は、阿武隈川流域を中心に東北南部から関東北東部で確認される。これらの例から、胴下半の縄文部に取り込まれていた主文様を表出する区画された縄文部が分離して単位文として胴上部に配置されるようになり、胴下半の縄文部と胴上半施文域の明確な文様配置・構成の分離が生じ、その区分のために器形のくびれ部に合わせて胴部区画線が生成されたと考えることが可能である。しかし、上記の型式学的変化の推定を裏づけるような明確な層位的な出土例はない。また、古段階において個々に文様が閉じ単位文化したと考えられる土器は、器面全体にアルファベット文が配置され、くびれ部による施文域の分割意識がない一群も確認される。このような器面全体にアルファベット文が配置される一群が、上記のような過程を経て施文域が上下に分割され、胴下半が縄文部になる土器群に変化するのか、別の過程を経て施文域の上下二分割が生じるのか、この一群は消失していくのかも現状では判断できない。器面全体にアルファベット文が配置される一群の最下段のアルファベット文が横位に連携して縄文部を形成したと考えれば、胴部区画線の獲得過程の最初の段階にこれらの土器群を位置づけることも可能であるがその変化の各段階を示す例や層位的出土例はない。

胴部区画線がなく胴下半に縄文施文だけなされる個体やくびれ部を無視して胴下半に区画線が引かれる個体が確認され、胴部区画線の獲得過程の最初の段階に位置づけてもよいような資料も存在する。しかし、胴部区画線が無い場合でもくびれ部にそった縄文施文域をもつ資料もあり、胴部区画線の獲得過程はいまだ不明瞭な点が多い。胴部区画線は最初から胴部中位に横走するように獲得されるわけではなく、胴下位に引かれる個体も多い。この点も胴部区画線の獲得を考えるうえで注意すべき点である。以上から、胴部区画線の生成を細別時期区分のメルクマールにすることに消極的な意見（鈴鹿1982, 1984）には筆者も賛同するが、胴部区画線の獲得が大木10式古段階に行われた可能性が高いと考えている。古段階と中段階との区分を定

めておく必要がある。アルファベット文タイプの土器群は、胴上半に文様施文域が圧縮され、くびれ部を境に、胴上半の無文部に区画された縄文部により単位文様が表出され、区画線以下の胴下半が地文の縄文部となり文様構成が二分割される。胴上半が主文様を表出するスペースとなったことで、横方向を意識したアルファベット文の配置・構成が展開するようになる。これにより、「横流れS字文」（図8-30～34、図9-37～39など）が主体となる。横流れS字文が中段階に主体となることは層位的な出土資料からも確認することができる。この変化の中で、e字文や縦S字文は縦方向に圧縮され、c・u字文や横流れS字文に変化していくと考えられる。

以上の変化の方向性をふまえて、大木10式古段階の特徴をまとめる。「文様施文の縦方向規制から解放され、主文様を表出する区画された縄文部の単位文化が進行し、アルファベット文タイプが主文様として定着する」段階であり、「胴中位以下またはくびれ部以下に胴部区画線が描出されるようになる」段階である。そして、「主文様を表出するアルファベット文などの区画された縄文部が施文域においてその配置や構成が整理されていない」段階で「横方向への主文様の配置意識が弱いまたは無い」段階である。「文様配置の整理」に関しては、客観的な指標とはなり得ず、漸移的な変化であり、主観的な要素でもあるため古段階と中段階を明確に区分する指標にはなりえないが、区画された縄文部の配置が乱雑で整理されていない段階が相対的に古い傾向にあるのは確かであると考えられる。

また、「横流れS字文」を指標として古段階と中段階を区分している部分が多いが、中段階は文様構成や施文技法の変化をふまえ、層位的出土例からも新旧2細分することができそうである。中段階の古相を含めて古段階にするほうがよいのかも今後の検討課題である。

器面全体にアルファベット文が配置される一群は大木9b式から大木10式古段階までに限定してよいだろう。加曽利E式土器群との接触がある東北地方南部では、大木9b式段階に加曽利E式キャリパー形土器に類似する口縁部文様帯を有する一群が存在し、阿武隈川流域を中心に大木10式古段階においても継続する。これらの器面には縦楕円文やアルファベット文が描かれることが多い。

大木10式中段階 中段階の指標は、「胴部区画線の胴中位への定着と主文様施文域の胴上半への固定化（胴上半への圧縮）」と「横方向への主文様の展開」である。

主文様がアルファベット文の一群は、胴部区画線が

胴中位まで上昇し胴下半は縄文部となり、アルファベット文の配置が整理され区画された縄文部による主文様部分が胴上半に圧縮され、施文域の上下二分が明瞭に行われるようになる。圧縮された縦・横S字文は横長化し横流れS字文となり、他の文様も横方向へ流れる傾向が強くなる。e字文はほとんどみられず、c字文が多くなる。文様が圧縮された結果、文様が崩れた不規則な文様（横Y字状文など）も存在する。大木10式古段階から様々な形の区画された縄文部によるモチーフはある。古段階では、区画された縄文部による文様単位の個数が多く配置も一定ではない個体も多く存在する（図8-52、図10-45、図11-44、図13-37など）ため、中段階における不規則な文様はこれらの一部が胴上半に圧縮されているとも捉えられる。アルファベット文以外の主文様は、波頭文の一群の一部は、胴下半の地文縄文部から胴部区画線または無文部分により、波頭部（縄文部）が切断され単位文として分離する（図7-10・11）。この分離した縄文部も不規則な形態の単位文になっていく。波頭部（縄文部）の長伸化や先端部の内側への巻き込み、波頭部の方形化といった変化が確認できるが、時期細別の指標にはなり得ない。

横流れS字文は中段階で主体となる。中段階には、口縁部下に横位の沈線が引かれ、胴上半に配置された文様の上半を切断する一群が出現する。このようにこの段階に口縁部上端に無文帯を作出する区画線の出現（図8-27・28など）を確認できる。文様表出の方法に着目すると、無文部を表出するユビナデが本段階の後半以降、次段階にかけて顕著となる（ナデが強くなる）傾向がある。これらの2つの大きな変化をもとに、中段階は前半と後半に区分できそうである。この変化の結果、文様構成にも変化がみられる。口縁部無文帯を区画する横位線が口縁部下に描かれるようになる結果、主文様の上部が切断されることで、文様モチーフの自由度が低下すると考えられる。この点は中村良幸（1986）も指摘している。ナデが強くなった結果、これまで主文様を表出していた区画された縄文部を無文部が分断するようになる。この縄文部の分断は、無文部のナデが強化されるとともに進行し、無文部が主文様を表出するようになる傾向が強くなり、縄文部を区画していた線が無文部を区画するように変化していく。横流れS字文系を例にとると、時期が下るにつれ縄文部であるS字文（縄文部）がS字の屈曲部で上下に切断される（図8-30→26→21・22→11～15→3～5、図9-37→35→28・29→19～21→22・16、図10-30→27・28→21・22、図11-16・14→8～10→7・4、図12-23・24→22→16など）。これは

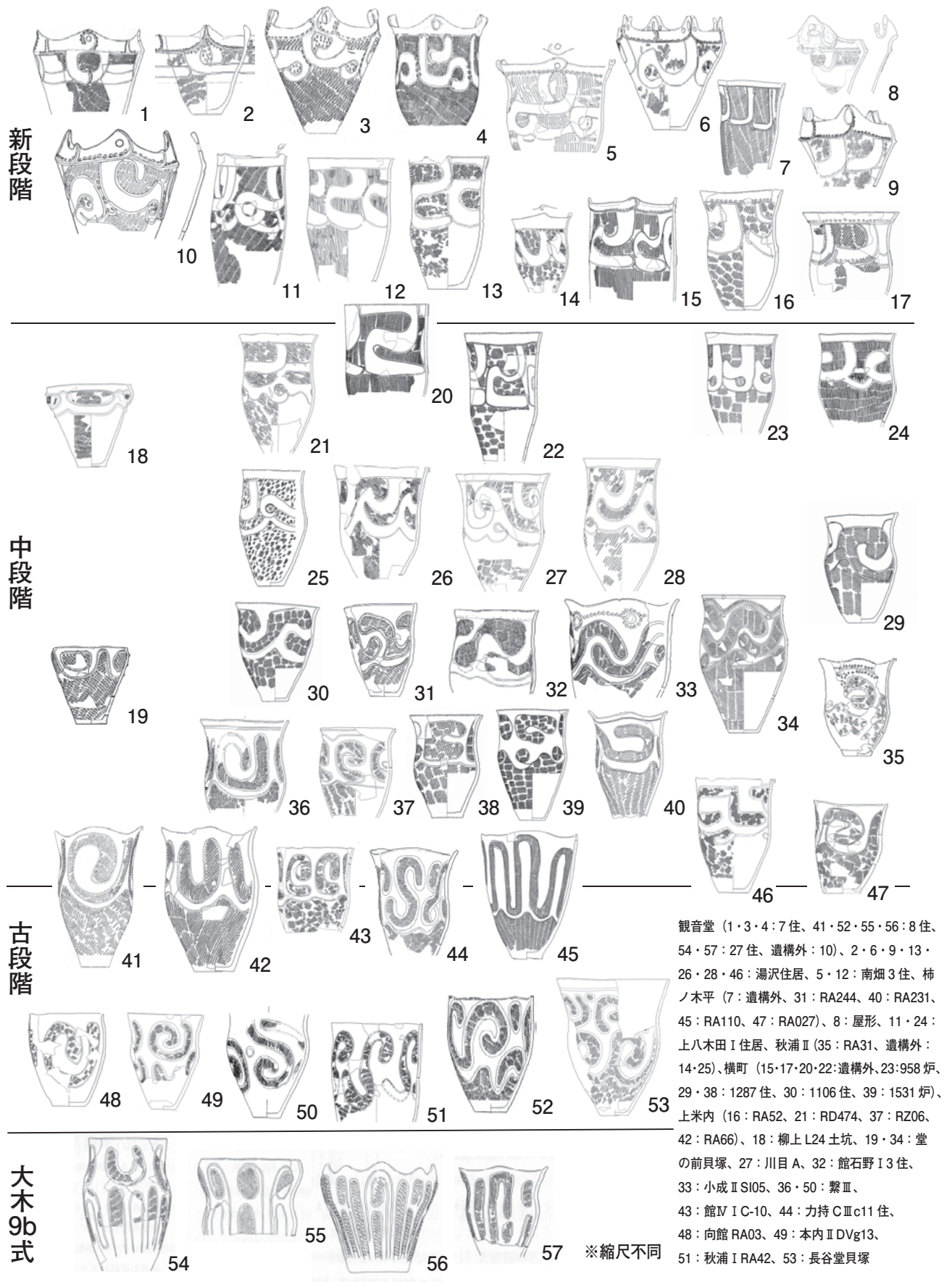


図8 大木10式変遷案 (盛岡・北上・三陸沿岸〔岩手県〕)

S字文（縄文部）の周囲の無文部のナデが強化された結果であり、次の段階にむけて主文様が無文部により表出されるようになり始める段階であると考えられる。古段階から中段階において通常は縄文部で表出される文様が無文部で表出される例が少ないながら確認される（図10-38、図13-12）。福島県南相馬市東町遺跡6号竪穴住居跡出土例は、出土状況や住居重複を確認すると新段階まで下る可能性があり、縄文部を無文部で置換する表出方法は新しい要素の可能性はある。

胴部区画線は、胴中位以下にひかれた段階を含む古段階から中段階前半までは波状のものが多くみられたが、新しくなると直線化していくと考えられ、器形との対応も読み取れる。波状とは別に胴部区画線より上に胴下半の地文縄文部から一連の縄文部が波頭状に突出していた波頭文の一群は、突出していた波頭部分が切断され、円・楕円文として分離する（図8-27・28・39、図9-34など）。この内部には縄文のほか刺突が充填される。刺突による加飾に関連して、口縁部や胴部への局所的な刺突による加飾例は、岩手県域を中心に中段階から新段階にまとまって確認される。棒状工具による刺突が多く、円形竹管による刺突も少ないが確認される。丁寧な刺突による加飾が施される土器は三陸沿岸中部に多い傾向にある（図8-33・34など）。胴部区画線は、胴上半の施文域を区画し、区画された縄文部による文様表出を行う範囲を設定していたが、前述した無文部の強調ならびに無文部を区画する意識への変化によりその役割が低下していくとみられる。波頭文の一群は新段階にかけて、切断された波頭部分（縄文部）が無文部に囲まれる。この無文部分が口縁部の無文部と一体となりJ字状・コ字状となり、無文部による主文様の表出に至る（図8-23・24→7・9・16・17、図9-33→26・27→23・13、図10-33→31→17→16など）。アルファベット文や楕円文の一群においても無文部のナデが強くなり、横流れS字文と同様の変化が生じる。この変化は縄文施文技法と連動しており、狭義の磨消縄文手法（「縄文→区画線→磨消」）の成立と関連するだろう。文様や口縁部を区画する線、胴部区画線などの区画線が別の区画線と接する部分が沈線による区画線においても微隆起化し始める。この傾向は次段階で顕著となる。

大木10式新段階 新段階の指標は、「区画線の接点や無文部端部が微隆起する（いわゆる鱗状突起の出現）」「口縁部内外面の双頭状突起化」である。

口縁部における無文部の横方向のユビナデが強くなり、内面または外面が双頭状突起化していくと考えられる。この延長上で口縁部に突起や把手が付加される

ようになると考えている。胴部の無文部のナデも強くなり、この段階で狭義の磨消縄文が一般化する。無文部のナデが強くなった結果、無文部が両側縁にナデが伴う微隆帯（ナデの過程でなで範囲の外縁が盛り上がった例を含む）で区画されたようになり、無文部が主文様にみえる傾向がさらに強まると考えられる。

主要な文様は、横流れのS字文（縄文部で表出）が区画線や無文部で切断された結果生成されたと考えられる横6字文（図9-1～5など）・横S字文（図8-3～6）であり、無文部で表出される。次段階のいわゆる「門前式」に伴う「方形区画文系土器群」（図14）の文様構成に繋がる要素（図9-22など）もこの段階で確認される。一部の地域ではアルファベット文の一群が残る。無文部のナデの終点や無文部の屈曲部、口縁部のヨコナデの終点には、明確な鱗状突起や微隆帯が形成される。

新段階は器形の変化が大きい。「口縁部形態が内湾する・朝顔形深鉢の出現」や「突起・注口の発達」を指標に大木10式新段階も新旧に区分できそうである。器形が変化した個体の文様モチーフはS字文系が極めて少なくなり、連続J字文（図9-6～8・12など）や横6字文が無文部で表出される一群が主体となる。J字文は波頭文系からの変化（縄文部の切断）が軸となると推定している。J字文は、後続土器群にも引き継がれる存続時間の長い文様である。

口縁部形態は、上端部が内湾する個体が出現する。胴部形態は、直線的に頸部から底部まで窄まる器形が出現し、次段階への素地となる。北上川流域では台付深鉢が組成する。一関周辺では台付・注口付・台付注口付深鉢などが発達し（図8-8、図9-6～8）、無文部による横6字文・連続J字文が付される一群が特徴的である。これらの土器は、底部にかけて直線的に窄まる器形で次段階の朝顔形深鉢器形への連続性が読み取れる。大木10式終末段階には注口付把手が発達する。北上川中流域だけでなく、三陸沿岸・岩手県釜石市屋形遺跡でもこれらの資料が確認される。盛岡・北上周辺では無文部で主文様を表出している段階の文様構成にあつて、縄文部と無文部を入れ替えて表出する一群や鱗状突起や微隆帯が形骸化し、無文部のナデと関連はなく部分的な隆帯の貼付で、鱗状突起・微隆起帯のみを表現する個体が確認される。これらは、確実な層位出土例がないので細かい時間的位置づけは決められない。型式学的には大木10式新段階に含まれると一見考えられるが、盛岡周辺における遺構からの出土状況やその形骸化した特徴から次段階以降に継続する大木10式の要素が強く残る土器群と考えられる。

大木10式新段階に後続する、いわゆる「門前式」

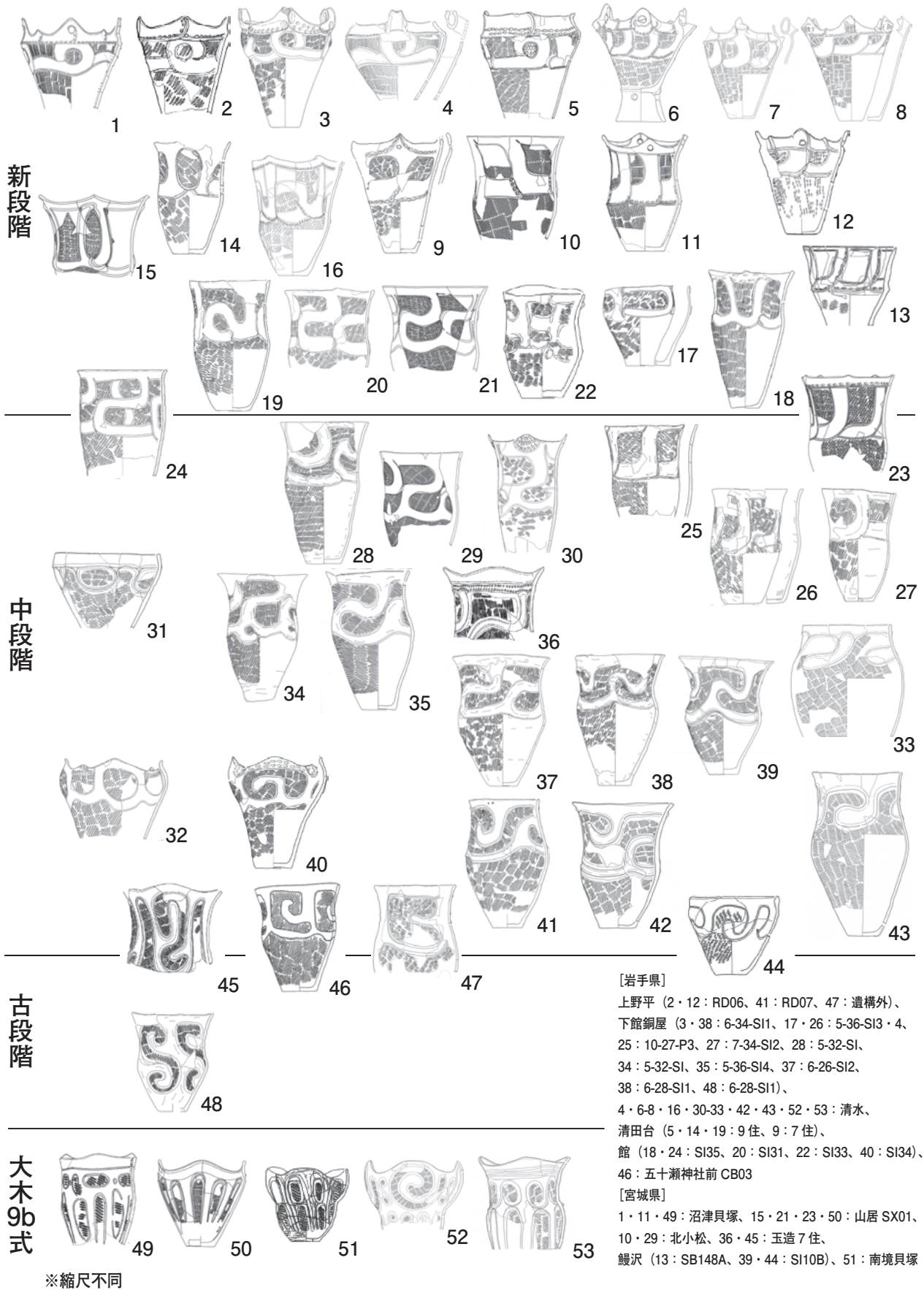
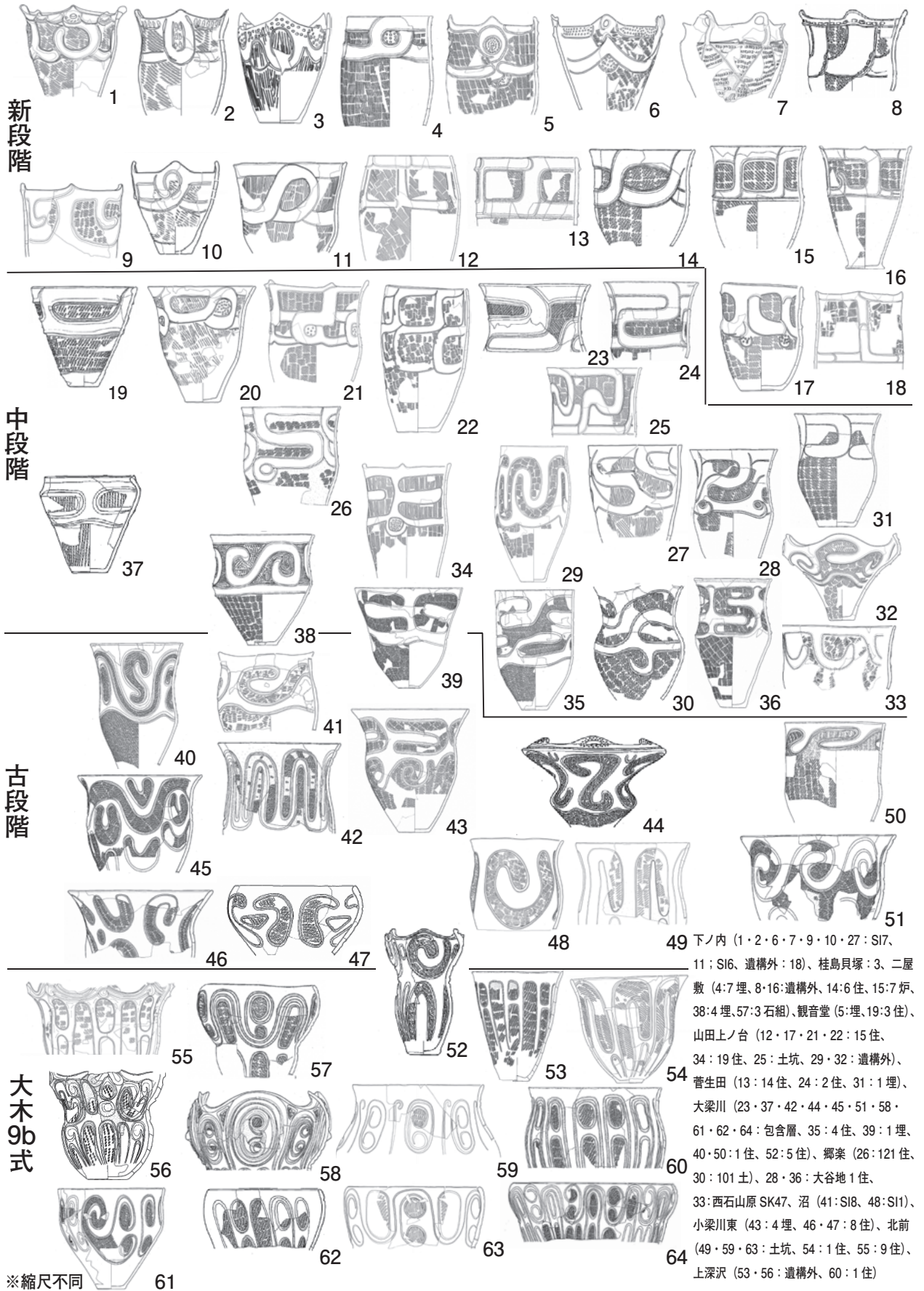


図9 大木10式変遷案 (一関・宮城北部)



49 下ノ内 (1・2・6・7・9・10・27: S17、11; S16、遺構外: 18)、桂島貝塚: 3、二層敷 (4:7埋、8-16:遺構外、14:6住、15:7炉、38:4埋、57:3石組)、観音堂 (5:埋、19:3住)、山田上ノ台 (12・17・21・22: 15住、34: 19住、25: 土坑、29・32: 遺構外)、菅生田 (13: 14住、24: 2住、31: 1埋)、大梁川 (23・37・42・44・45・51・58・61・62・64: 包含層、35: 4住、39: 1埋、40・50: 1住、52: 5住)、郷楽 (26: 121住、30: 101土)、28・36: 大谷地 1住、33: 西石山原 SK47、沼 (41: S18、48: S11)、小梁川東 (43: 4埋、46・47: 8住)、北前 (49・59・63: 土坑、54: 1住、55: 9住)、上深沢 (53・56: 遺構外、60: 1住)

图10 大木10式变遷案 (宮城中部・南部)

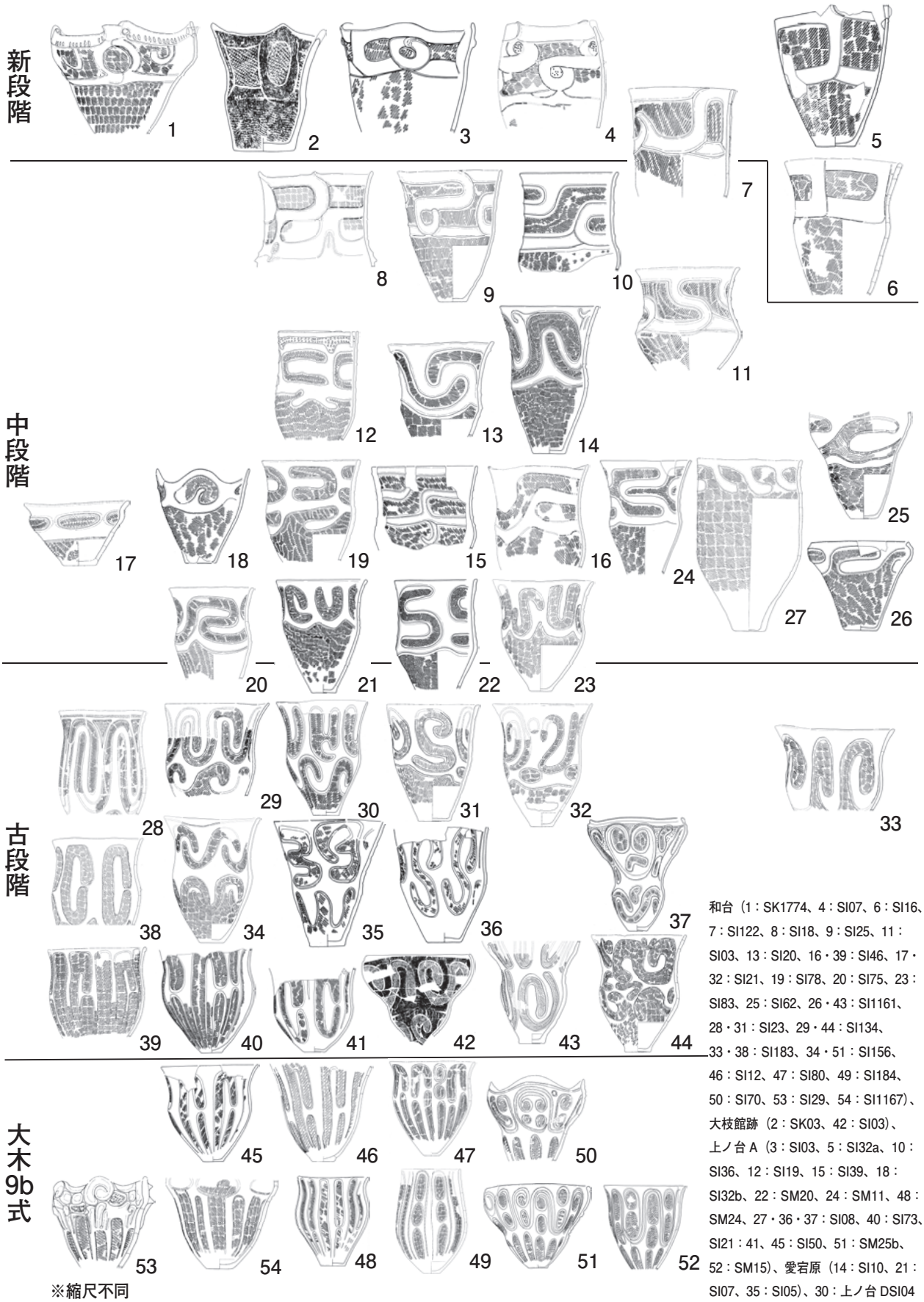


図11 大木10式変遷案 (福島北部)

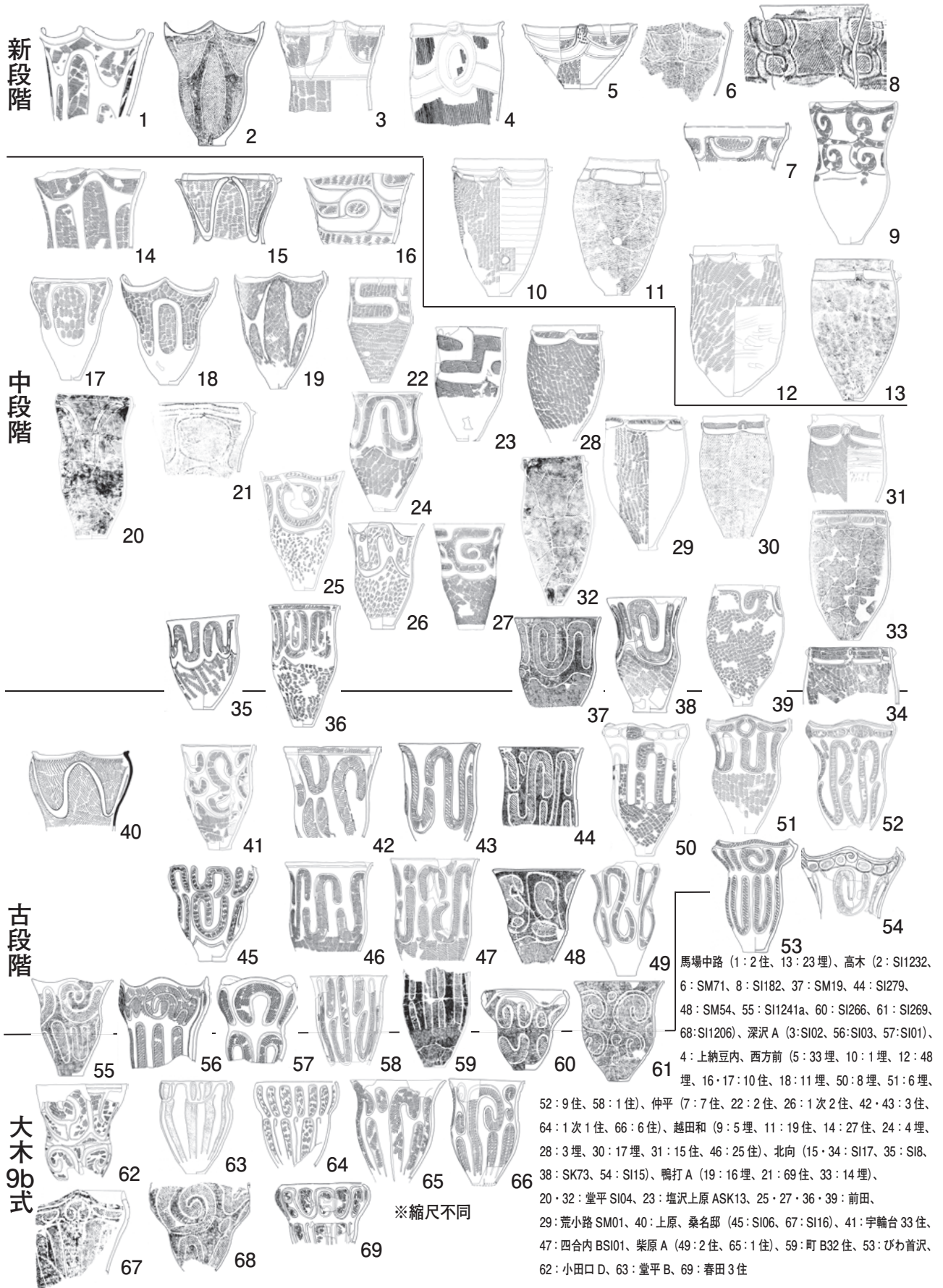


図12 大木10式変遷案 (中通り中部・南部 [福島県])

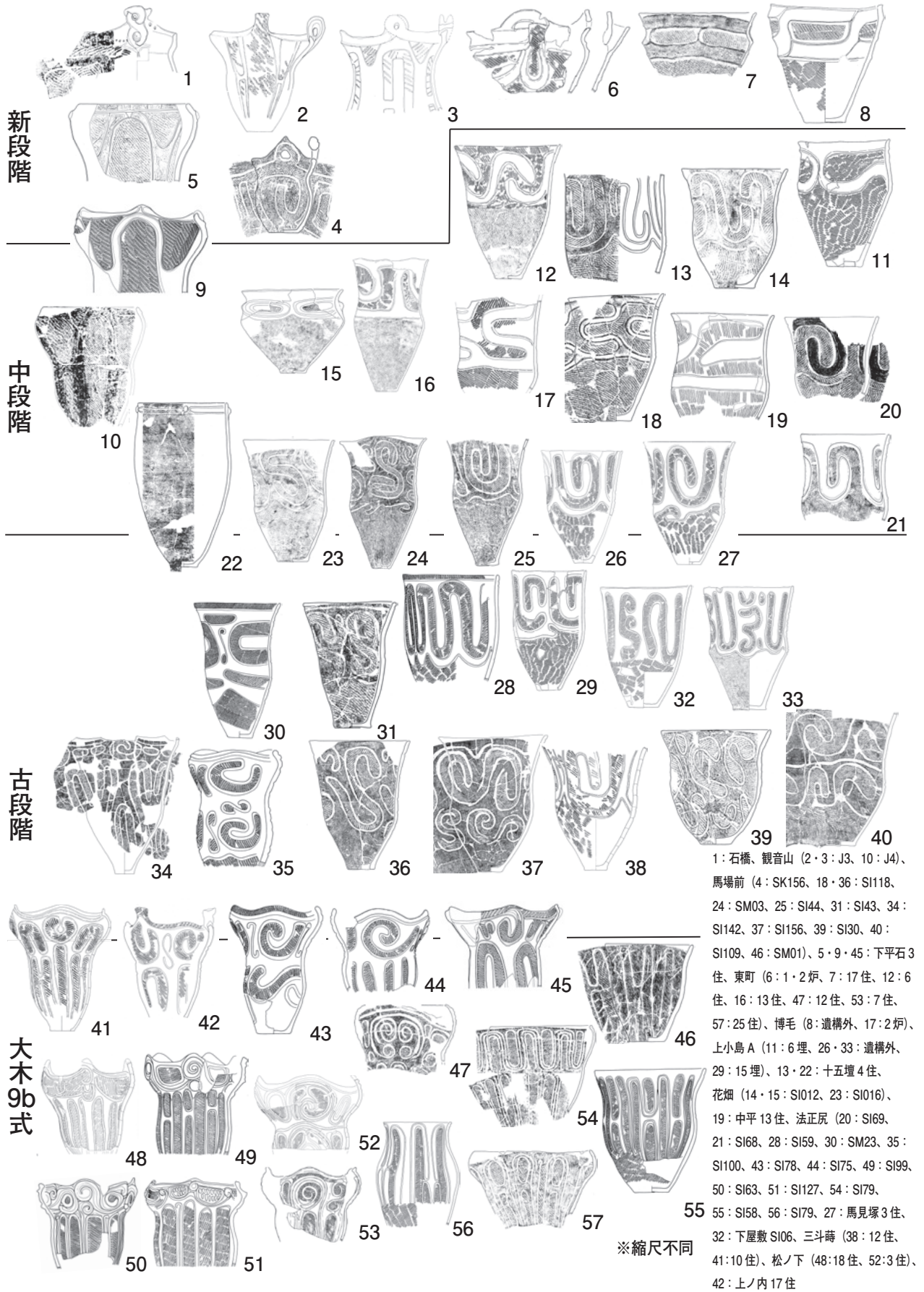


図13 大木10式変遷案 (浜通り・会津〔福島県〕)

成立期の土器群（図15：筆者の「後期第1段階前半」）は、北上川上流域の盛岡周辺（盛岡市上米内遺跡・滝沢市けや木の平団地遺跡）、北上川中流域（花巻市観音堂遺跡、北上市八天遺跡、一関市上野平遺跡・清水遺跡）、三陸沿岸南部（陸前高田市堂の前貝塚）などでまとまった資料が確認される。岩手県北部（安比川流域・馬淵川流域）や八戸周辺では大木10式新段階の「門前式」につながる文様をもつ一群は相対的に希薄である。これらの地域では新段階においても、アルファベット文の一群が北上川流域と比較して組成率が高く、地文の上に沈線で文様を表出する方法の採用率が高い。また、太平洋側沿岸部北部（小本川以北）では大木10式後半の土器群の分布が希薄であることも特徴である。

文様タイプからみる大木10式の地域的な特徴

大木10式古段階 大木9b式に東北南部（仙台湾北部より南）では口縁部文様帯を有する一群が一定数存在するが、大木10式古段階においても阿武隈川流域を中心に口縁部文様帯を有するアルファベット文タイプの土器群が継続する。古段階の資料は沿岸部を含む東北北部（北上川源流域より北）・中部（北上川流域）において少なく、文様構成や器形のバラエティにも乏しい。一方で東北南部には多く分布し、阿武隈川流域や浜通りで充実している。現在確認できる報告資料によれば、東北北部・中部では中段階に入って資料が急激に増加する。

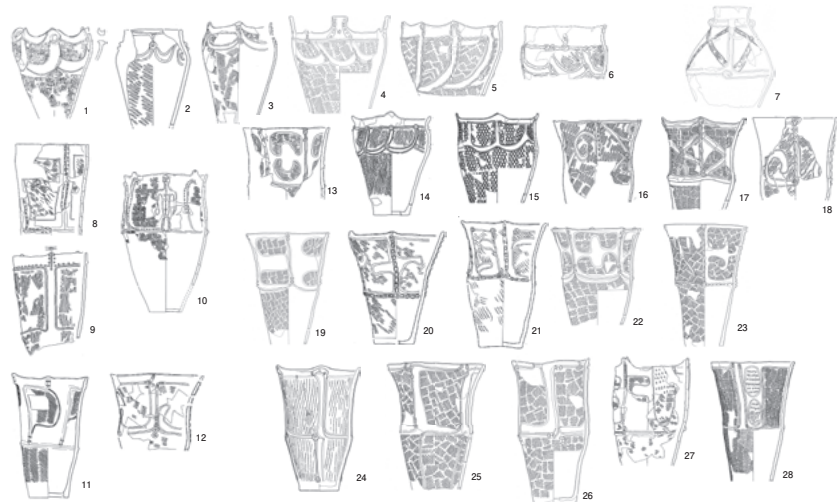
波頭文の一群は東北地方太平洋側の全域に確認され、古段階から存在すると考えられるが、古段階から中段階の型式学的変化が緩やかなため波頭文のみから時間的指標を見出すことは難しい。他の文様形態の土器との確実な共伴例に乏しいため、細かな時間的位置づけは難しい。この点は、楕円文の一群も同様である。

古段階の主要な文様は、アルファベット文である。東北南部では、大木9b式からの過渡的な様相を示す土器群も確認される。古段階には多様な形の区画された縄文部によるアルファベット文が配置され、中段階にかけて盛行する。器面全体にアルファベット文が配される土器と胴中位の括れまたは張出に合わせて器面が上下に分割される土器とに大きく二分されるが、前者は仙台湾北部や仙台市周辺、岩手県南部で確認される傾向が強い。後者は、2段以上のアルファベット文土器が配置され、アルファベット文の主要単位文の間に別のアルファベット文が充填されるような整理されていない構成の個体も多く、東北南部に多い（図11-37・44、図13-34～37など）。文様が整理されていない土器は、前述した胴部縄文部からの単位文が分離する過程や胴部区画線が上昇する過程を示す土器に

多い傾向にあるだろうか。阿武隈川流域や浜通りでは大木9b式から大木10式古段階に口縁部文様帯をもつ土器群やアルファベット文タイプの土器群が発達すると同時に、口縁部が内湾するキャリパー形器形で、口縁部上端に無文帯や縄文帯を有し（図12-50～54、図13-34・41～45）、胴部に2段以上のアルファベット文が配され文様施文域が上下二分されている（図12-41・45・47・48・57、図13-34～37・39・40）一群が多く確認される。これらの一群は関東北東部でも確認され（栃木県那須塩原市槻沢遺跡、栃木県茂木町松の木遺跡など）、加曾利E式土器群と大木式土器群の相互影響関係のなかで生成された一群と考えられ、これらを「びわ首沢式」として整理する考えがある（福島1987）と筆者は理解している。

大木10式中段階 北上川流域を中心に三陸沿岸を含む東北北部・中部で横流れS字文が盛行する。一方で東北南部、特に福島県域では横流れS字文は確認されるが北上川流域ほど発達はない。中通り・浜通りでは、加曾利E式土器群の組成比率が中段階から高くなる傾向にあり、会津では中段階以降、大木10式新段階から後期第1段階にかけてまとまった資料に乏しい。阿武隈川上流域や会津では胴部区画線が胴中位に定着し縄文部により表出されるアルファベット文が胴上半の施文域に圧縮・整理された段階に、口縁に横方向の縄文帯を有する土器群が一定数確認される。

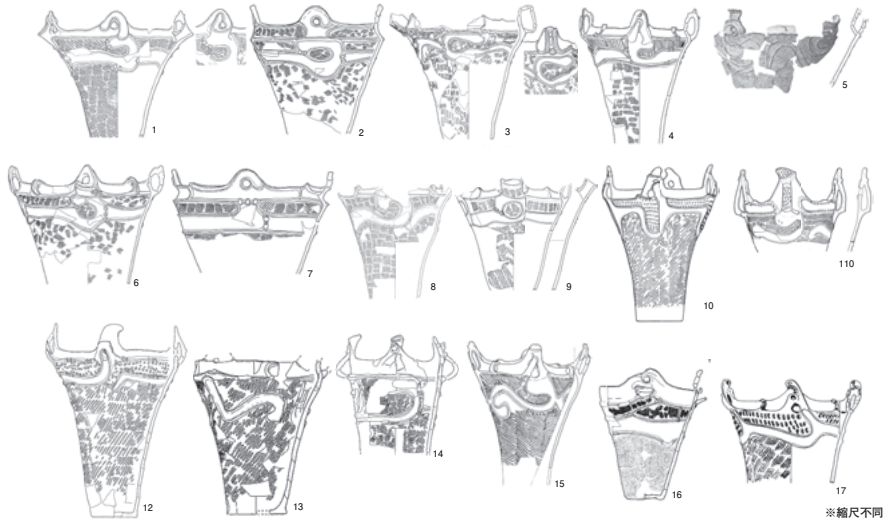
横流れS字文の一群は日本海側も含めて大木10式が分布するどの地域でも確認されるが、北上川流域を中心に岩手県域・秋田県域に分布が集中し、他の地域では胴上半に配される文様モチーフはc字文や横Y字文などの不規則な文様が多くなる傾向にある。また、中段階後半における無文部のナデ強化による横S字文の分断や口縁部下区画線による文様モチーフ上部の切断と固定化といった新段階にかけての変化は、太平洋側においては北上川流域以北で強く仙台湾北部・仙台市周辺より南の地域（宮城県南部・阿武隈川下流域、福島県北部）では北の地域と比較して不明瞭である（まとまった資料の多寡に影響されていると考えられる）。横流れS字文は福島県域では南へ行くほど希薄となり、福島県南部～関東北東部では確認されず、大木式の分布の中心が古段階までより北に移動したと考えられる。仙台湾周辺の大木10式中段階以降における特徴として、微隆帯による文様区画線の発達と文様モチーフの方形化が指摘でき（管見に触れる限り、微隆起帯の区画線と文様モチーフが角ばったり方形化したりするのは宮城県南部の土器に顕著である：図10-13・21～25など）、このような一群が北上川流域に比べ多い。この特徴は、大木10式新段階まで継続する。



1：浜川目沢田Ⅱ(山田町)、2：上米内(盛岡市)、3・12・15・20・21：堂の前貝塚(陸前高田市)、
4・5・19・22・23・25・26：清水(一関市)、6：越田松長根Ⅰ(宮古市)、7：白石(宮古市)、
8・10・13・18・27：けや木の平団地(滝沢市)、9：湯沢(盛岡市)、11：横欠(北上市)、
14：大葛(盛岡市)、16・17・28：上野平(一関市)、24：観音堂(花巻市)

※縮尺不同

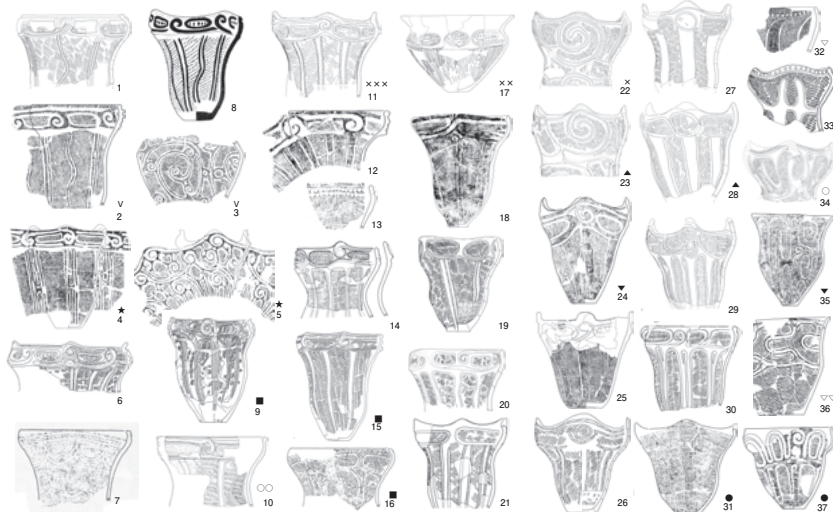
図14 岩手県域出土の「門前式」に併存する方形区画文系・J字文系土器



1～4・6・7：上野平(一関市)、5：乙部野Ⅱ(宮古市)、8・9：清水(一関市)、10・11：観音堂(花巻市)、
12～14：けや木の平団地(滝沢市)、15：八天(北上市)、16・17：堂の前貝塚(陸前高田市)

※縮尺不同

図15 岩手県域における「門前式」成立段階の土器



1・10・11・17・22・23・27～29・34：松ノ下(いわき市)、2・3・25・32・36：馬場前(檜葉町)、4・5：獅子内(福島市)、
6・7・9・13・15・16：前山A(富岡町)、8：上原(本宮市)、12：大富西畑(南相馬市)、14・21・30：馬場平B(田村市)、
18：矢大臣(小野町)、19・20・26：三斗蒔(平田村)、24・31・35・37：高木(本宮市)、33：びわ首沢(郡山市)
※図中の土器番号上の図形は、同じ図形は同一遺構での出土を示し、同じ図形で数が多いものは遺構内において下層と判断される位置で出土している。

※縮尺不同

図16 福島県域出土の加曾利E2式～E3式土器

管見に触れる限り、このような傾向は山形県域の大木10式中段階以降にも確認できるようであり、新段階には会津や宮城県北部でもこの傾向が確認される。

楕円文タイプの土器群は中段階までは確実に存続し、その一部は新段階前半まで残ると考えられる。

大木10式新段階 阿武隈川上流域では、横流れS字文タイプの土器群が発達しないため、横6字文タイプをはじめとする北上川流域を中心に盛行する土器群がほとんど確認されない。また、鱗状突起や顕著なユビナデが施される土器も少ない傾向にある。しかし、口縁部は北上川流域と同様、双頭状突起化する方向性を示す。

宮城南部・阿武隈川下流域～福島県北部を境に、太平洋側地域の大木10式新段階の様相は大きく異なる。福島県域では加曾利E式土器群（加曾利E5式）と称名寺1式といった関東系土器群が主体的な土器群となり、在地的な土器群として後述する「牛蛭式」が発達する（図21）。会津はこの段階の資料に乏しい。一方、北上川流域や三陸沿岸中部・南部、仙台湾北部・仙台市周辺では「典型的」な大木10式新段階の土器群が展開し、東北北部（青森県域・岩手県北部）は文様表出・施文方法や主体となる文様パターンは異なるが類似する土器群が展開する。福島県北部はこの段階の資料が少ないが北上川流域～仙台湾周辺の土器群と同様の土器群が確認される。

大木10式終末段階には無文部により表出される横6字文・J字文を配置する注口付把手が発達した土器群が北上川中流域や三陸沿岸中部にまとまる。これらの土器群は、いわゆる「門前式」をはじめとする後期第1段階の土器に強く影響を与えていく。

大木10式の遺構単位の層位的な出土例

東日本太平洋側地域の良好な遺構出土例を挙げる。

岩手県岩手郡雫石町南畑遺跡3号住居跡、盛岡市上米内遺跡RA51・52・66、花巻市観音堂遺跡第7・8・24・27号住居跡、奥州市五十瀬神社前遺跡CB03住居跡、一関市清田台遺跡第7・9・22・23・24号住居跡、同市上野平遺跡RA04・05・06-RD06、同市下館銅屋遺跡3-30-SI、5-36-SI4、5-32-SI、下閉伊郡普代村力持遺跡（2019年報告）3号住・1号焼土遺構、閉伊郡山田町浜川目沢田I遺跡RA8・9・10、気仙郡住田町館遺跡SI31・33・35・36、宮城県大崎市玉造遺跡第7・8・9号住居跡、仙台市下ノ内遺跡SI5・6・7、同市山田上ノ台遺跡1・2・14・15・19号住居跡、加美郡色麻町大谷地遺跡第1・3号住居跡、黒川郡大衡村上深沢遺跡第1・2・3・20号住居跡、刈田郡蔵王町二屋敷遺跡第6号住居跡、刈田郡七ヶ宿町大梁川遺跡第1・3・4・6号住居跡、福島県福島市大枝館跡SK03、同

市和台遺跡SI02・03・21・23・46・122・134・156・183・1161、同市宮畑遺跡SI46・47・67・71、安達郡大玉村台田遺跡SI8、本宮市高木遺跡SI179・208・287・1241a、郡山市北向遺跡SI15、同市町B遺跡32号住居跡、田村郡三春町西方前遺跡第1・10号住居跡、同町四合内B遺跡SI01、同町仲平遺跡（1次）SI01・02、岩瀬郡天栄村桑名邸遺跡SI04・07、同村深沢A遺跡SI01・03、石川郡平田村三斗蒔遺跡10号住居址、相馬郡飯館村上ノ台A遺跡SI08・39、南相馬市東町遺跡（2次）5・6・9・11・13・14・17・24・29号竪穴住居跡、いわき市松ノ下遺跡第17号住居跡、耶麻郡磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡SI59・78、大沼郡会津美里町十五壇遺跡第4調査区4号住居跡、河沼郡会津坂下町花畑遺跡SI012・016

大木10式と加曾利E式土器群の併行関係

東北南部では中期後葉以降、後期初頭にかけて加曾利E式土器群が分布を拡大し出土量も多くなる（図16）。本稿では詳述することができないが、稲村晃嗣（1990）・加納実（1994）・千葉毅（2012, 2013）らの変遷観をベースに前述した作業手順で把握された福島県域に隣接する那珂川流域における加曾利E式後半の変遷案を提示しておく（図17）。筆者の管見に触れた資料とその出土状況から、加曾利E式後半土器群の変遷と型式学的変化の類似、層位的な出土例（遺構内での共伴例）を考慮し、以下のような大まかな併行関係を考えている。

加曾利E4式前半＝大木10式古段階

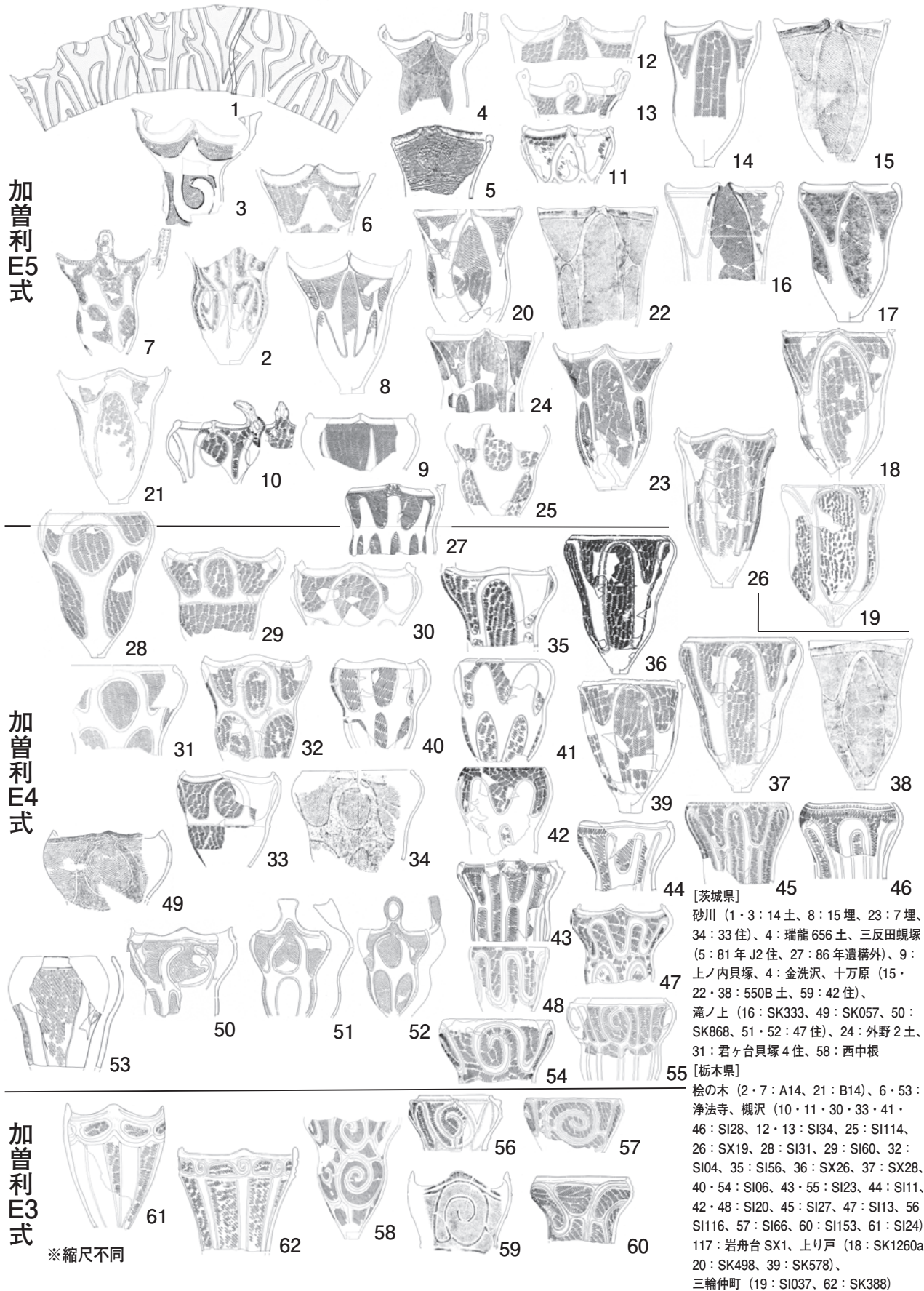
加曾利E4式後半＝大木10式中段階

加曾利E5式前半＝大木10式新段階

中期末葉から後期初頭にかけての加曾利E式後半の土器群の検討は、先行研究の提示・再検討や関連資料の提示・分析も含め別の機会に改めて行いたい。

3-3-2. 東北南部における中期末葉から後期初頭の土器

本間宏（1994）も指摘するように、大木10式中段階以降、大木10式の分布中心地域は東北南部から北上川流域に移る。中期後葉以降、東北南部には加曾利E式土器の影響が強くなり中期末葉から後期初頭には顕著になる。このような土器群の分布状況ならびに土器群の関係性を有する東北南部（特に福島県域）において、中期後葉から後期初頭に現れる土器群の地域性を先行研究とどう対比し、捉えるかが東北南部における中期末葉から後期初頭土器群研究の課題であった。福島県域の後期初頭の土器群をみると加曾利E5式が一定量分布し、加曾利E式土器群の系譜は追えるが大木10式新段階の土器群は希薄であり、綱取I式の成立までを繋ぐ大木式の要素を残す土器群が一部の地域



[茨城県]
 砂川 (1・3: 14土、8: 15埋、23: 7埋、34: 33住)、4: 瑞龍 656土、三反田蜆塚 (5: 81年J2住、27: 86年遺構外)、9: 上ノ内貝塚、4: 金洗沢、十万原 (15・22・38: 550B土、59: 42住)、滝ノ上 (16: SK333、49: SK057、50: SK868、51・52: 47住)、24: 外野2土、31: 君ヶ台貝塚4住、58: 西中根

[栃木県]
 檜の木 (2・7: A14、21: B14)、6・53: 浄法寺、槻沢 (10・11・30・33・41・46: SI28、12・13: SI34、25: SI114、26: SX19、28: SI31、29: SI60、32: SI04、35: SI56、36: SX26、37: SX28、40・54: SI06、43・55: SI23、44: SI11、42・48: SI20、45: SI27、47: SH13、56: SI116、57: SI66、60: SI153、61: SI24)、117: 岩舟台 SX1、上り戸 (18: SK1260a、20: SK498、39: SK578)、三輪仲町 (19: SI037、62: SK388)

図17 那珂川流域における加曾利E式終末の変遷案

を除いて不明瞭な状況にある。このような状況のなかで筆者は、「牛蛭式」が明確な分布範囲と一定の資料のまとまり（遺構内出土）をもち出土することを確認し、大木10式新段階から綱取I式成立までを埋める土器群として重要であると理解したため、その成立と展開を改めて整理したい。

「牛蛭式」「牛蛭型」とされてきた土器群の分布は、福島県域から栃木県・茨城県域に広がり、一定の分布があることはこれまでの調査報告から確かなものである。土器群が分布する時期も中期末葉から後期初頭で、東北南部では大木10式古段階から綱取I式成立以前にあることも確認されている（本間2008）。中期末葉から後期初頭において東北南部は大木10式新段階の中心分布域から外れ、綱取I式が成立するまで加曾利E式土器群や称名寺式土器群が組成し、在地の土器群を示す土器型式は曖昧なままである。福島雅儀が土器型式を設定し、このような土器群が確認されているならば、型式設定が可能かを検討する必要がある。周辺地域を分布中心地域とする土器型式に依らず在地の土器型式で時間的変化を辿れるならば、その土器群をもって段階設定することが望ましい。

従来「牛蛭式」「牛蛭型」とされてきた、口縁部に「連接横位長楕円文」を有する寸胴（砲弾）形の土器を「牛蛭類型」と仮称し、その特徴的な口縁部文様帯とその文様の出現と展開を検討し、「牛蛭類型」の土器群としての成立過程、存続期間、後続土器群への影響等を把握する。「牛蛭類型」は屋外土器埋設遺構や屋内土器埋設遺構の埋設土器として使用されることも多く、「牛蛭類型」の時間的位置づけを整理することは、東北南部における遺構群の時間的変化を検討するうえでも重要である。また、成立から展開までの過程を把握し、中期末葉から後期初頭という短期間に特徴的な土器群が生成された背景を探ることで当該期の土器群の動態や地域間関係を探るという目的もある。「牛蛭類型」の変遷に関する資料を図18に示した（以下、本項の番号は図18の土器番号を示す）。

「連接横位長楕円文」の生成

「牛蛭類型」に特徴的な口縁部の「連接横位長楕円文」は、口縁部文様帯を有する大木9a式土器からの系譜が考えられている（仲田1992）。大木式土器群は、大木9a式に至って区画縄文部が明確化し、口縁部文様帯における楕円区画と渦巻文の分離が大木9b式から大木10式古段階にかけて促進される傾向にある。1・2のような土器から3のような土器への口縁部文様帯の変化が想定される。1・2から3の変化をみると胴部文様でも区画縄文部の単位文化が促進されている。当該期の加曾利E式土器群・大木式土器群の類似

する型式学的変化の流れのなかで、口縁部文様帯をもつ一群において楕円文区画が整理されていくと考えられる。加曾利E式の場合は、口縁部文様帯の渦巻き文とそれに伴う区画縄文部が簡略化され円+楕円のように変化する。3にみられる口縁部文様は、4～9のように単独の横に長い楕円文として簡略化し整理されていくと考えられ、6・8のように横長に延びるものが後出するだろう。4・8・9のように連接横位長楕円文の接点が突起化するものも認められる一方で、9のように波頂下の渦巻文が配置されていた位置が渦巻状の円文になる一群や16のように波頂下の渦巻文が配置されていた位置にU字状文が配置される一群が確認される。これらは加曾利E3式のキャリパー形土器の口縁部文様帯が崩れ、楕円文と波頂下の渦巻文が配された部分へ円文が置換される9→16という変化と同じであると考えられる。16を起点に、横位楕円文の間にU字・逆U字文が配される一群（17・27・28・29・44）が形成される。

「連接横位長楕円文」の発達

6・8のように整理された連接横位長楕円文は、12・13・15を経て18・22～26のような連接横位長楕円文の接点部分を起点とした弧線文で区画され長楕円文の周囲が無文部となり長楕円文が縄文部として浮きあがるような一群に変化すると考えられる。そのなかで4・8・9のように接続部分が突起化していた一群の系譜上に12・13・15・18・20・23・24・25などの土器があり、連接横位長楕円文の接続部（胴部縄文部を区画する弧線文と接続部の接点）が舌状突起状に飛び出している。これらは20・21のように縦に長い突起に変化していくと考えられる。後続する土器群にはこの縦長突起の系譜の一群（31・32・35）が存在する。連接横位長楕円文の間にU字文が配置される一群は、縄文部の逆U字状文が逆U字状の突起となり、前述した一群と同様の変化をたどると考えられる。

縦長の突起を連接横位長楕円文の接点に有する一群（20・21）は、その突起が橋状把手に発達する例（31）や突起が伸長する例（32）が確認される。31では橋状把手化に伴って連接楕円文部分が相互に連結しひとつになると考えられ、無文部と縄文部の位置が反転している。32でも連越横位楕円文の縄文部が無文部化され、楕円部が拡大している。32など一群は、口縁部文様帯の上端が省略され35のような土器に変化すると考えられる。同様に、33→34→37のような変遷が考えられる。逆U字状突起を有する一群も逆U字状の突起を残しながら口縁部上端が省略され、40や43のような土器に変化する。

「接続横位長楕円文」の終焉

口縁部上端が省略された土器が前段階の突起を口縁部無文帯内の縦位区画もしくは双頭状突起様の区画に変えていく段階（38・39）が「接続横位長楕円文」の終焉である。41・42は40から変化し、綱取I式の口縁部文様帯との類似性が読み取れ、綱取I式の成立に関与し、その古段階と併行する可能性も残る。

3-3-3. 「牛蛭類型」の時間的な位置づけ

「牛蛭類型」の大木式土器群・加曽利E式土器群との遺構内での共伴して出土した例を挙げる。

福島県田村市堂平遺跡SI04、北向遺跡SI17、越田和遺跡15・19・23・26・27・34号竪穴住居跡、四合内B遺跡1号竪穴住居跡、西方前遺跡第9号竪穴住居跡、桑名邸遺跡SI04、十五壇遺跡第4調査区4号住居跡、栃木県那須塩原市槻沢遺跡SI06・28-SK34・277

時間的位置づけ

併行関係を遺構出土例に基づき示す。「牛蛭類型」は屋外土器埋設遺構や包含層出土として出土する例が多く、型式学的検討を優先した部分や遺構内出土やその重複関係以外の出土状況を加味した部分がある。【 】付の土器群はその土器群と「牛蛭類型」との確実な共伴関係が確認できていない時期である。

- 口縁部に楕円区画文が整理される段階（3～7・16）
＝大木9b式～大木10式古段階／【加曽利E3式新相】
- 口縁部楕円区画文の接点が生じる段階（8・9・11～13・15）
＝大木10式古段階／【加曽利E4式前半】
- 接続横位長楕円文が明確化する段階（17・18・20～30）
＝大木10式中段階／【加曽利E4式後半】
- 接続横位長楕円文接点の突起が発達し無文化する段階（31～34）
＝【大木10式新段階】／【加曽利E5式前半】
- 口縁部上端が省略される段階（35～37・43）
＝加曽利E5式後半／【称名寺式第4・5段階】
- 口縁部が双頭状突起様になる段階（38・39）
＝【加曽利E5式終末？】／【綱取I式直前段階と想定】
- 逆U字状突起が発達する段階（40～42）
＝後期第2段階（綱取I式前半）

「牛蛭類型」の変遷と周辺地域の土器群

「牛蛭類型」の生成と展開には、口縁部文様帯の単位文化傾向が関与している。大木9a式／加曽利E3式古段階のキャリアー形土器にみられた口縁部文様帯が、文様表出の区画縄文部化・単位文化傾向という加曽利E式土器群・大木式土器群の変化の方向性のなかで在地的に発達し、口縁部接続横位長楕円文を生成し

たとえられる。

「牛蛭類型」が独自の変化を展開していくうえでは、それまで福島県域に存在していた加曽利E式土器群・大木式土器群の各要素を素地として、在地での変化が進行したとみられる。加曽利E3式以降、加曽利E式土器群は福島県域に一定量分布しており、大木10式中段階以降、大木10式の分布・変遷の中心地域が東北中部に移ると加曽利E4式・E5式がさらにその分布密度を高くすると考えられる。このような加曽利E式と大木式の分布範囲の変遷も「牛蛭類型」の変化に影響を与えているだろうが、基本的には大木9式以降の在地的な土器群の変化が主軸と考えられる。なお、「牛蛭類型」は接続横位長楕円文が明確化する段階で東関東北部に分布域を拡大する一方で、宮城県南部より北に「牛蛭類型」は拡散せず宮城県南部でも出土例は極めて少ない。この分布状況をみると、中期末葉から後期初頭において「牛蛭類型」は、大木式土器群よりも加曽利E式土器群の分布域と重複するとみられる。加曽利E式土器群との相互関係を示す資料としては、筆者がかつて「舌状突起を有する土器群」（46・47）とした土器群がある（太田2019b）。これらの土器群は関東地方の中期末葉から後期初頭の土器群に多く認められることが指摘されていた（青木1983）が、筆者の管見に触れる限りでは、加曽利E5式／称名寺第2段階から第4段階に資料が集中し、綱取II式併行期まで胴部文様（地文のみを含む）を変化させながら継続する。これらの土器群は、茨城県南西部を南限・福島市周辺を北限として、栃木県域・茨城県県央以北・中通りに集中して確認される。これらの土器群に特徴的な舌状突起は、加曽利E式土器群の変遷と「牛蛭類型」の変遷をふまえると、「牛蛭類型」の接続横位長楕円文の接点に生じる突起の系譜で生成された舌状突起である可能性が高い。この舌状突起は、加曽利E式土器群の終末における口縁部無文帯の双頭状突起化とは異なる突起の生成の流れと捉えられ、その系譜を「牛蛭類型」に求めることが可能ではないだろうか。「舌状突起を有する土器群」の器形が砲弾状で大形な点も「牛蛭類型」と共通する。26・30・33などの土器の胴上位で無文部を区画する弧線文がせり上がる一方で、口縁部上端が省略され、口縁部文様帯が全て無文部としてナゲられ舌状突起だけ残ったものが「舌状突起を有する土器群」（46・47）となると型式学的には推定できる。確実な層位的出土例・共伴例は少ないが、加曽利E4式新段階から加曽利E5式併行期に成立し、後期前葉まで存続していくと考えられる。分布範囲は、加曽利E5式や「牛蛭類型」の分布中心地域と重複することから、大木10式とその関連土器群が分布する

東日本の各地域で確認される「口縁部無文帯を有し胴部無文(地文のみ)」の土器群のなかにあり「牛蛭類型」と関連が強い類型と考えられる。

以上のように、「牛蛭類型」は中期末葉に加曾利E式・大木式土器群がもつ口縁部文様帯の在地的な変化で生成され、展開したと説明できるだろう。「牛蛭類型」が発達する時期には、「牛蛭類型」の分布が集中する栃木県北東部・那須から福島県・中通りにおいて屋外・屋内横位土器埋設遺構が発達する。後述するように、屋外横位土器埋設遺構は当該地域に特徴的な埋設属性を有しており、埋設土器に「牛蛭類型」が多用されることも含めて屋外土器埋設遺構の地域色が強くなったものと理解される。「牛蛭類型」の特徴的な器形や法量、胴部に過度な装飾を行わないといった要素は、埋設土器という機能的な面も関係するかもしれない。「牛蛭類型」の終末にみられる口縁部無文帯の加飾(逆U字文が配置され、それらが突起化する流れの一群)は綱取I式との類似度が高いことから「牛蛭類型」が綱取I式の成立に関与したことは確実であろう。綱取I式成立前段階から成立段階にかけての土器群として「牛蛭類型」が存在すると考えられる。

「牛蛭式」の設定

①大木式の文様が付加されず、②胴部が地文のみとなり、③長胴・大形の砲弾形、という特徴が出揃うのは17・18・20～30の段階である。これらの段階の資料は関東北東部から福島県域にかけて多く確認されることから、「牛蛭式」を設定する場合この段階をもって成立するのが明快であろう。41・42などの土器は口縁部の部分的な装飾に綱取I式の口縁部文様帯との類似点をみてとれる。また38・39などの土器は、32・34などの土器の口縁部上端が省略された直後の35～37・40・43土器と比べて1段の口縁部無文帯が定着している。38・39の位置づけは難しいが、41・42とともに綱取I式の成立段階と併行する可能性もあろう。口縁部上端が省略された段階の土器群までが一連の「接続横位長楕円文の成立から終焉」までの流れを示していると捉え、この段階までを「牛蛭式」とするのが妥当ではないだろうか。よって、17・18・20～30の段階を「牛蛭1式」、35～37・40・43の段階を「牛蛭2式」とし、31～34は過渡期とするのがよいだろう。

「牛蛭類型」は、北関東東部(栃木県域・茨城県北東部)～東北南部(福島県域)に分布し、遺構内出土例から資料的まとまりや層位的まとまりが確認できる。また、類型内で型式学的変化を追うことができるうえ、大木式土器群と加曾利E式土器群との共伴関係を把握することも可能である。福島雅儀は越田和遺跡

2群土器の呼称を用いて加曾利E式土器群や称名寺式も含めて「牛蛭式」(福島2012)とし、仲田茂司が指摘した異系統の土器を一括して一型式として捉えた。筆者は、「牛蛭式」が大木式土器群をベースに加曾利E式土器群の影響を受けながら独自に器形や口縁部文様帯を変化させた土器群であると捉え、一定期間その土器群の流れが存続することを確認した。また、綱取式の成立に大きな影響を与えている土器群である。大木式土器群や加曾利E式土器群、称名寺式土器群とは共伴し混在するものの区分可能な土器群であると考えている。この点は、土器型式の設定要件として重要であると考えられる特定地域で一定期間の系譜関係を追え(一定期間の時間的分布)、一定範囲の分布的広がり、時間的に後続する土器群との関係が把握でき、周辺地域の土器群と共伴して出土している、という点を備えている²⁾。この点は仲田茂司が懸念した特徴的だが普遍的ではない可能性が高い土器を安易に型式として認定してもよいのかという懸念(仲田1992)にも応えていけるのではないだろうか。しかしながら、筆者は現時点で深鉢の変遷しか捉えられておらず、器種組成や接続長楕円文以外の類型があるかといった点については課題が残る。ここでは、福島雅儀(2012)の「牛蛭式」とは異なり横位接続楕円文の変化や砲弾形の器形を基準にした一連の深鉢形土器群を「牛蛭式」として仮に型式設定してみたい(本論では仮設定した牛蛭式に「」は付けずに記載する)。前述した「舌状突起を有する土器群」も「牛蛭式」に含めてよいかもしれないが、型式学的変化を看取できる要素が少なく共伴関係にも乏しいため、大木10式土器群とその関連土器が広がる範囲に分布する胴部地文のみで口縁部無文帯を有する土器群のひとつとして捉えておく。現時点では、土器群間の併行関係は以下のように考えている。

牛蛭1式前半=大木10式中段階=加曾利E4式新段階
牛蛭1式後半=大木10式新段階=加曾利E5式前半
牛蛭2式=加曾利E5式後半=称名寺式第4・5段階
層位的な出土例の追加があれば、過渡期の様相も整理できるだろう。現時点で過渡期は、牛蛭1式に含め牛蛭1式を前半・後半に二分して考えておきたい。

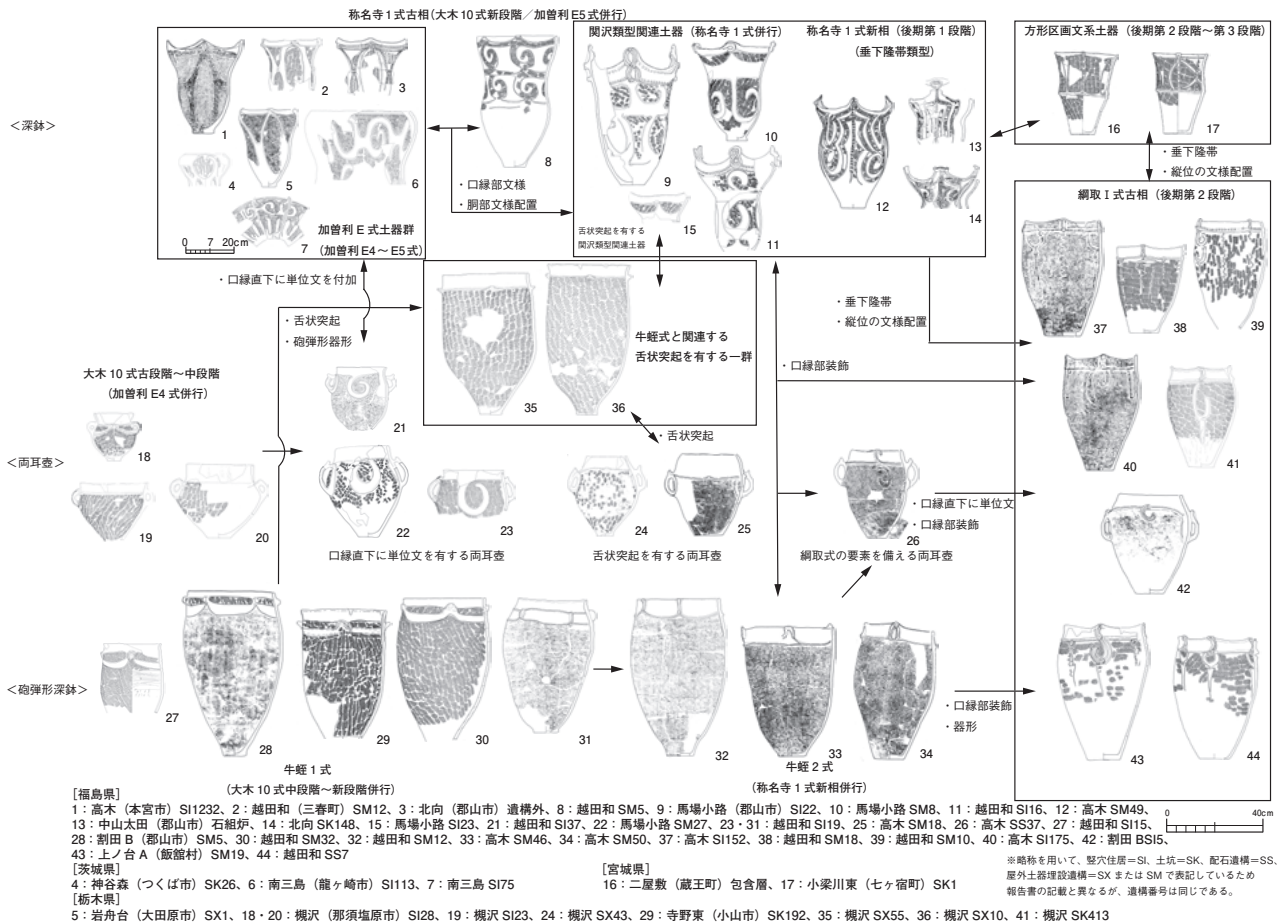
3-3-4. 綱取式の成立と展開

筆者は、綱取式に関して馬目順一の分類と設定(馬目1968, 1970)に従い、口縁部文様帯(無文帯)を区画する口縁部下端区画線の表出方法の変化(隆線/微隆線・隆線+沈線→沈線)を指標とし、I式・II式の2段階の段階区分という立場を採る。綱取I式には口縁部無文帯にC字状文の貼付が多用され、胴部には



[福島県]
 1: 柴原 B (三春町)、3・17・27・28・30・32・35: 越田和 (三春町)、4・9・10・16・24・33・34・36・37: 西方前 (三春町)、6・38~41・43: 高木 (本宮市)、
 11・12: 桑名邸 (天栄村)、13・22: 北向 (郡山市)、14・15: 十五壇 (会津美里町)、18・19: 堂平 (田村市)、20・25: 柳橋 (福島市)、21: 鴨打 A (郡山市)、
 26: 荒小路 (郡山市)、29: 馬場小路 (郡山市)、31・42: 馬場中路 (郡山市)
 [茨城県] [栃木県]
 2: 十王堂 (日立市) 5・7・8・23・46・47: 槻沢 (那須塩原市)、44: 寺野東 (小山市)、45: 御城田 (宇都宮市)

図 18 「牛蛭類型」の変遷



[福島県]
 1: 高木 (本宮市) SI1232、2: 越田和 (三春町) SM12、3: 北向 (郡山市) 遺構外、8: 越田和 SM5、9: 馬場小路 (郡山市) SI22、10: 馬場小路 SM8、11: 越田和 SI16、12: 高木 SM49、
 13: 中山太田 (郡山市) 石組炉、14: 北向 SK148、15: 馬場小路 SI23、21: 越田和 SI37、22: 馬場小路 SM27、23・31: 越田和 SI19、25: 高木 SM18、26: 高木 SS37、27: 越田和 SI15、
 28: 郡田 B (郡山市) SM5、30: 越田和 SM32、32: 越田和 SM12、33: 高木 SM46、34: 高木 SM50、37: 高木 SI152、38: 越田和 SM18、39: 越田和 SM10、40: 高木 SI175、42: 割田 BS15、
 43: 上ノ台 A (飯館村) SM19、44: 越田和 SS7
 [茨城県]
 4: 神谷森 (つくば市) SK26、6: 南三島 (龍ヶ崎市) SI113、7: 南三島 SI75
 [宮城県]
 16: 二屋敷 (蔵王町) 包倉層、17: 小梁川東 (七ヶ宿町) SK1
 ※略称を用いて、竪穴住居=SI、土坑=SK、配石遺構=SS、
 屋外土器埋設遺構= SX または SM で表記しているため
 報告書の記載と異なるが、遺構番号は同じである。

図 19 網取式成立の変遷案

磨消縄文または地文縄文上に文様が隆線・沈線で表出される。文様は縦方向に分割され、単位文が懸垂する。綱取Ⅱ式は曲線的な文様が増加し、沈線による表出のみになる。新しくなると多重沈線によるモチーフが展開するようになり、堀之内Ⅰ式・南三十稲場Ⅰ式の影響がみられ、前者との区別が難しい個体も多い。

青木秀雄は、福島県いわき市出土の土器の分析から加曽利Ⅴ式から称名寺Ⅰ式・仙台湾周辺の土器・三十稲場Ⅰ式系統の土器等の影響と中期末以来の大木Ⅰ式の伝統とが関連し非常に複雑な現象をみせることを指摘し、大木Ⅰ式土器群の延長上にあつて周辺土器群の影響により綱取Ⅰ式が成立したと指摘している（青木1983）。

筆者の考えを結論から述べると、加曽利Ⅴ式土器群と大木Ⅰ式土器群の要素を在地化させた牛蛭Ⅰ式の要素が素地となり、そこに加曽利Ⅴ式を介して拡散した称名寺Ⅳ段階以降の文様構成要素や北上川流域を中心に分布する大木Ⅰ式土器群の系譜を引く方形区画文系土器群の胴上半の文様構成要素が相互に関与することで、綱取Ⅰ式が成立すると推定している。綱取Ⅰ式（図19-37~44）の器形は牛蛭Ⅰ式の砲弾形器形の影響を受けており、口縁部無文帯に特徴的なC字・ノ字貼付文は牛蛭Ⅰ式の口縁部無文帯の装飾の影響を受けていると考えられる。綱取Ⅰ式成立前段階には加曽利Ⅴ式土器群とその影響が強い関沢Ⅰ類型（鈴木1999）関連土器と牛蛭Ⅰ式の間にも口縁部無文帯への装飾に類似点を確認できる。綱取Ⅰ式の口縁部直下にはJ字文を中心としたモチーフで単位文を表出する点は、加曽利Ⅴ式土器群ならびに両耳壺の影響と考えられ、両耳壺における口縁部区画線に付着する単位文は、加曽利Ⅴ式新段階から加曽利Ⅴ式に顕著となる文様の単位文化傾向と連動して進行しており、この影響の延長上にあると考えられる。縦位方向への文様展開や垂下する蛇行沈線などは称名寺Ⅰ式（垂下隆帯Ⅰ類型）や同時期に北上川中流域・下流域を中心に展開する門前Ⅰ式に伴う方形区画文系土器群（図19-16・17）との相互影響のなかで採用されたと考えられる。方形区画文とは剣先状モチーフやX字状モチーフも共通しており、綱取Ⅰ式成立直後の相互の影響関係がうかがえる。このように東南北部において大木Ⅰ式の系譜で加曽利Ⅴ式の影響の下に生成された可能性が高い牛蛭Ⅰ式や中期末葉に分布が拡大する加曽利Ⅴ式土器群とそれに伴う両耳壺をベースに加曽利Ⅴ式土器群や大木Ⅰ式に後続する土器群の拡大に伴って波及した周辺地域の土器群の影響を受けて綱取Ⅰ式が成立すると考えている。

方形区画文の影響について稲村晃嗣は、垂下文による方形区画が加曽利Ⅴ式土器の中から生成する可能性を指摘し、後期において大木Ⅰ式土器群の影響が強

く残る地域で加曽利ⅤⅣ式の影響の強い地域の中で形成された方形区画内のモチーフが、方形区画をやや先行して形成していた大木Ⅰ式の器形を援用することで方形区画文類型が形成された可能性を述べており（稲村2004）、当該期の広域な土器群間の関係を考えるうえで重要である。稲村や筆者の見解の背景には、加曽利ⅤⅢ式以降の加曽利Ⅴ式土器群の福島県域への拡大と加曽利ⅤⅣ式以降のさらなる影響の拡大が背景にある。綱取Ⅰ式が東南北部において加曽利Ⅴ式土器群の積極的な関与を背景に成立したのに対し、綱取Ⅰ式成立以後は逆に綱取Ⅰ式が称名寺Ⅰ式終末の土器に関与し堀之内Ⅰ式の一部の類型の生成に強く関与し、影響の方向性が称名寺Ⅱ式終末から堀之内Ⅰ式初頭に切り換わる。この点は、稲村晃嗣や青木秀雄も指摘している（青木1983；稲村1994, 2004）。

両耳壺の展開

中期末葉以降の加曽利Ⅴ式土器群の展開の中で、綱取Ⅰ式の成立にも関与する土器群（または器種）に幅のある口縁部無文帯をもち壺に近い鉢状の器形を呈し2個一対の橋状把手を口縁部無文帯直下に有する「両耳壺」がある。牛蛭Ⅰ式と加曽利Ⅴ式土器群に伴う両耳壺に共通する点は、広い口縁部無文帯とそれを区画する横位微隆帯区画線であり、両者の要素が混在した個体（図19-26）も確認される。両耳壺をもとに綱取Ⅰ式の成立を考えたい。

稲村晃嗣は中部高地から東南北部において両耳壺を集成し、胴部に施文される文様から「横帯文系譜の両耳壺」「逆U字文系譜の両耳壺」「単位文系譜の両耳壺」「地文系譜の両耳壺」に分類してその分布と文様・形態上の変遷を検討し、第1期（加曽利ⅤⅢ式期以前）から第4期（称名寺Ⅱ式期）まで4段階の変遷を示した（稲村1994）。稲村によると両耳壺は、加曽利ⅤⅣ式期を中心に関東地方にみられるが起源は中部地方にあり、加曽利ⅤⅡ式後半段階に加曽利Ⅴ式土器群の中に取り入れられ、関東北東部の加曽利ⅤⅣ式期に盛行し称名寺Ⅰ式期を経て堀之内Ⅰ式期まで継続する土器群である。口縁は平縁で隆帯（微隆帯）により区画される幅広な口縁部無文帯を有し胴上部に最大径をもち、深鉢と鉢の中間的形態という器形的特徴を全時期においてもつ。曾利Ⅰ式土器の一部を構成していた段階では有文の個体が多く、加曽利Ⅴ式土器群に取り込まれた初期の段階では胴部文様帯が盛行するが、加曽利ⅤⅢ式後半に短冊状の文様を持つものが出現し加曽利ⅤⅣ式には徐々に無文化するなかで、文様は胴部中央に残存し単位文化して渦文などが発達すると指摘されている。両耳壺は曾利Ⅰ式土器の影響を受けつつ成立した加曽利Ⅴ式特有の形態の土器群であり、加曽利Ⅴ

Ⅱ式後半から称名寺Ⅱ式後半～堀之内Ⅰ式期まで存続し、時期が下るにつれ南関東から北関東にむけて分布範囲を移動しながら展開し、最終段階には称名寺式段階の加曽利E式土器群の分布範囲と一致し土器群の一形態を担うものとなり、綱取式の中に採用されていくとその変遷をまとめている。稲村は、加曽利E式が称名寺式土器の時期まで存続し、その主体性を損なうことなく綱取式の中に影響を与えていく姿が読み取れ、時期が下るにつれ器形が樽形・深鉢形に変化し深鉢の中に両耳壺が担っていた機能が引き継がれていくと述べた。両耳壺の分布域の変遷から、加曽利E式土器群が一定の地域的まとまりをもち分布域を北遷し、分布の北端は仙台湾にまで至り、この動きが後期初頭に反転し、東北地方の文化が関東地方に及ぶことを指摘した(稲村前掲)。

両耳壺と牛蛭式と綱取式

先行研究(稲村1994)を参考に、関東北東部～東北南部において若干の集成を行ったうえで「両耳壺」をもとに当該期の地域間関係ならびに綱取Ⅰ式の成立について整理する。稲村の検討以後に報告された資料を中心に那須・中通り出土の土器を図20に示した。両耳壺は、中期後葉から後期初頭の関東北東部において基本的な器種として組成し、胴部地文のみの両耳壺が加曽利E4式前半以降、北関東東部を中心に確認され、加曽利E4式後半以降は中通りでも確認されるようになり、加曽利E5式以降は、関東北東部～中通りで胴部に条線(縦位・斜位、網目状格子文など)が施文される個体が確認される。称名寺2式併行以後の条線表出の増加は、大木10式後半が分布する範囲に広く分布する「口縁部無文帯を有する胴部地文のみの土器群」にも確認される。稲村が指摘する「単位文系譜の両耳壺」はJ字文を有するものが三春町や郡山市周辺で確認されている(図20-5～8:本項の番号は図20の土器番号を示す)。関東北東部～東北南部の範囲では、資料が増加した現在でも稲村の見解から大きな変更は必要ないと考えられる。

1と3は同じ住居の覆土から大木10式古段階以降の土器と共伴して出土しており、加曽利E4式古段階併行と考えられる。1は地文系譜の両耳壺、3は横帯文系譜の両耳壺の終末段階と考えられ、3は小形土器である。2は、大木10式古段階の土器と共伴する地文系譜の両耳壺で1・3とほぼ同じ段階である。4は器形的にやや新しい段階の資料と考えられ、加曽利E4式古段階には中通りまで地文系譜の両耳壺が展開している。5～8は単位文系譜の両耳壺である。いずれも口縁部無文帯の直下の把手間に無文部J字文を付している。7は器形が樽形となり、両耳壺の終末段階と考え

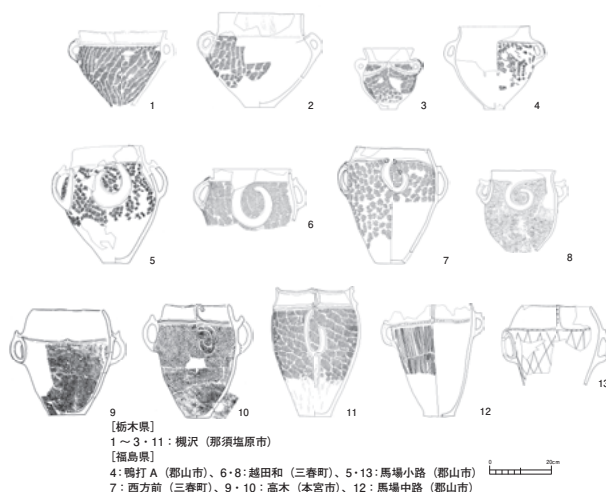


図20 那須～中通りの両耳壺

られる。5・6・8も樽形に近い形状に移行している段階と考えられるが、共伴する土器は、6は牛蛭Ⅰ式後半、8は牛蛭Ⅱ式終末から直後段階相当の土器とそれぞれ共伴しており、称名寺Ⅰ式前半から称名寺Ⅱ式併行となる。器形をみると9も口縁部が内湾し樽形に近い形状である。9は、稲村が口縁部無文帯直下の鏢状隆帯が中央部にて跳ね上がる形態として称名寺Ⅱ式期に顕著になると指摘した形態(稲村前掲)である。筆者は、この特徴は「牛蛭類型」由来の舌状突起で胴部地文のみの土器で口縁部文様帯直下に横走る区画微隆帯上に舌状突起を有する土器と同様の舌状突起が付されていると考えている。舌状突起を有する綱取Ⅰ式の文様を配する土器は、宮城県刈谷郡蔵王町二屋敷遺跡でも確認できる。12・13は樽形を経て深鉢形土器に吸収された個体だろう。口縁部の微隆帯上には、大木10式分布圏に広く分布する口縁部無文帯を有する胴部地文のみの土器群と同様の刻み(刺突)が施されている。また、胴部には条線による施文があり、称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式にかけての関東北東部～東北南部を中心に分布する口縁部無文帯を有する土器群の胴部文様と共通する。12・13の口縁部と胴部の文様や9の舌状突起からも、稲村が指摘したように深鉢形の系譜の中に両耳壺が融合する状況が捉えられ、9・12・13から大木10式土器群・加曽利E式土器群に伴って広域に分布する口縁部無文帯を有する胴部地文のみの深鉢形土器群や舌状突起を有する深鉢形土器群の中に地文系譜の両耳壺が取り込まれていくことが読み取れる。12・13に共伴する土器はないが、12は称名寺Ⅱ式以降併行と考えられ、13は配石遺構から出土しており称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式の間に併行すると考えられる。10は両耳壺と牛蛭式、綱取Ⅰ式の関係を考えるうえで重要である。口縁部文様帯は、牛蛭式終末の突起(把手)が痕跡化して口縁部無文帯を区画するC

字状の隆帯になると考えられる。胴部には口縁部を区画する隆帯に付着する形で単位文系譜の両耳壺由来の単位文（無文部J字文）が分離し逆C字文として配される。このような口縁部のC字状隆帯や口縁部直下の胴部逆C字文は、11のように綱取I式前半の典型的な文様モチーフとなる。

綱取式の成立に関する予察

図19（以下本項の番号は図19の土器番号を示す）に綱取I式成立の変遷案をまとめる。綱取I式は37～44で、器形は胴中位から上に最大径をもち底部から膨らみをもって立ち上がる。胴上位はそのまま立ち上がるかやや窄まる。口縁部文様帯は、幅広の無文部で隆帯やC・ノ字状の貼付隆帯によって縦位区画される。口縁部文様帯の下位は、隆帯（微隆帯）が横位に走ることにより区画される。胴部の地文は縄文で、胴上位には口縁部文様帯を区画する横位隆帯に付着するようにJ字（逆J字）の区画無文部が配される。このJ字の底部からはさらに下に無文部が伸び蕨手状になる例も多く（41・43・44）、基本的に縦方向に文様が展開する。これらの特徴は、牛蛭式（27～34）と加曽利E式土器群の両耳壺（18～23）、称名寺式（3）と加曽利E5式との関係の中で成立した関沢類型関連土器（1・2）からの系譜であると考えられる。器形は牛蛭式の砲弾形と両耳壺の壺形が融合して25・26のような樽形になり綱取I式の器形になると考えられる。口縁部無文部の加飾は、牛蛭式の「横位連接楕円文」の退化の延長上にあり、32や34が26に繋がると考えられる。綱取I式の胴上位の文様は、両耳壺（21～23）の口縁直下に付加する単位文が祖形にあると考えられ、ここに関沢類型関連土器（9～11・15）の影響が及ぶのだろう。縦方向の文様配置は、関沢類型関連土器と北関東において加曽利E式土器群と称名寺1式前半の土器群の接触で生まれた称名寺1式後半の一群（12～14）の影響と考えられる。37～39のような縦位の蛇行線は器面を区画する意図がうかがえるが、12～14の垂下する隆帯をもつ称名寺式との関連が推定される。垂下する隆帯については北上川中流域の後期第2段階「門前式」のいわゆる鎖状隆帯の影響も考えられるが、現時点で東北部の称名寺式・綱取I式と「門前式」の直接的な影響関係を論じるには資料が不足している。なお、後期初頭から後期前葉の東関東・南関東では「門前式」と関連すると考えられる土器や「門前式」に伴う方形区画文系・J字文系土器などが一定量出土している。方形区画文系土器群（16・17）は一定数の分布が確認され、胴上半に表出される文様が綱取式の胴部文様と類似する要素もみられるため影響関係があると考えられる。紙幅の都合上、「門前式」

と併行する北上川流域を中心に分布する土器群には触れられないが、「門前式」を論じる際に改めて、福島県域以南との関係を論じたい³⁾。

綱取I式の成立は、牛蛭式や両耳壺などの加曽利E式土器群の影響を受けた土器のみから辿れるものではなく、加曽利E式土器群が有していた地域間関係を媒介として拡散する称名寺式第4・5段階の土器や北上川流域～仙台市周辺に分布する方形区画文系土器群の文様要素・構成が影響を与えている。東北部で成立した綱取I式の素地に加曽利E式土器群と大木式土器群の狭間に在って在地化した牛蛭式と両耳壺があったことは確実である。中期末葉から後期初頭における加曽利E式土器群・称名寺式土器群・大木10式系譜の土器群の少なくとも3つの土器群の相互関係のなかで綱取I式が成立したと考えられる。複数の系統の土器群が混在するなかで生成された綱取I式は、東北部を中心に東関東まで影響を拡大し、堀之内1式を成立期の類型に大きな影響を与え、綱取式と堀之内式の相互の影響関係は強くなる。堀之内1式中段階以降、堀之内1式や綱取II式は仙台湾以北に影響を与えるようになり、土器群の分布や組成からみる地域間関係は複雑化する。活発な地域間関係の始まりは、綱取I式成立の直前段階にあったと言えるだろう。加曽利E式終末土器群と両耳壺は密接な関係があるため、稲村が断っていたように（稲村1994）、西関東における加曽利E式終末土器群とそれに伴う両耳壺については別途検討が必要である。いわき地域における樽形器形の形成には、中越地域の沖ノ原式の諸類型から派生した「城之腰式」（石坂2012）との関係が推定されている（鈴木2018）。綱取I式の成立には前述の土器群に加え、新潟県域やその他の土器群が関与してくると考えられる。この点は、会津・新潟県域・群馬県域・北信の土器群を整理したうえで、改めて考えていきたい。後期前半の福島県域における深鉢形土器を中心とした土器群の変遷案を図21に示す。各段階は3～4の系譜が異なる土器群で構成され後期第5段階以降、堀之内2式に収斂していくと考えられる。

3-4. 時間軸の整理

本稿では、表2の時間軸をもとに遺構の時間的変化を検討する。筆者の後期第1段階から後期第4段階「門前式」は、稲村晃嗣（2008）の門前式第1段階から第3段階・後期前葉にそれぞれ対比できる。後期第5段階は門前式の系統が捉えづらくなり、北上川中流域の在地の土器群が把握しづらくなる。十腰内I式前半の土器群、堀之内式土器群、南三十稲場式の影響を受けた土器群が北上川中流域以南の東北中部・南部太平洋

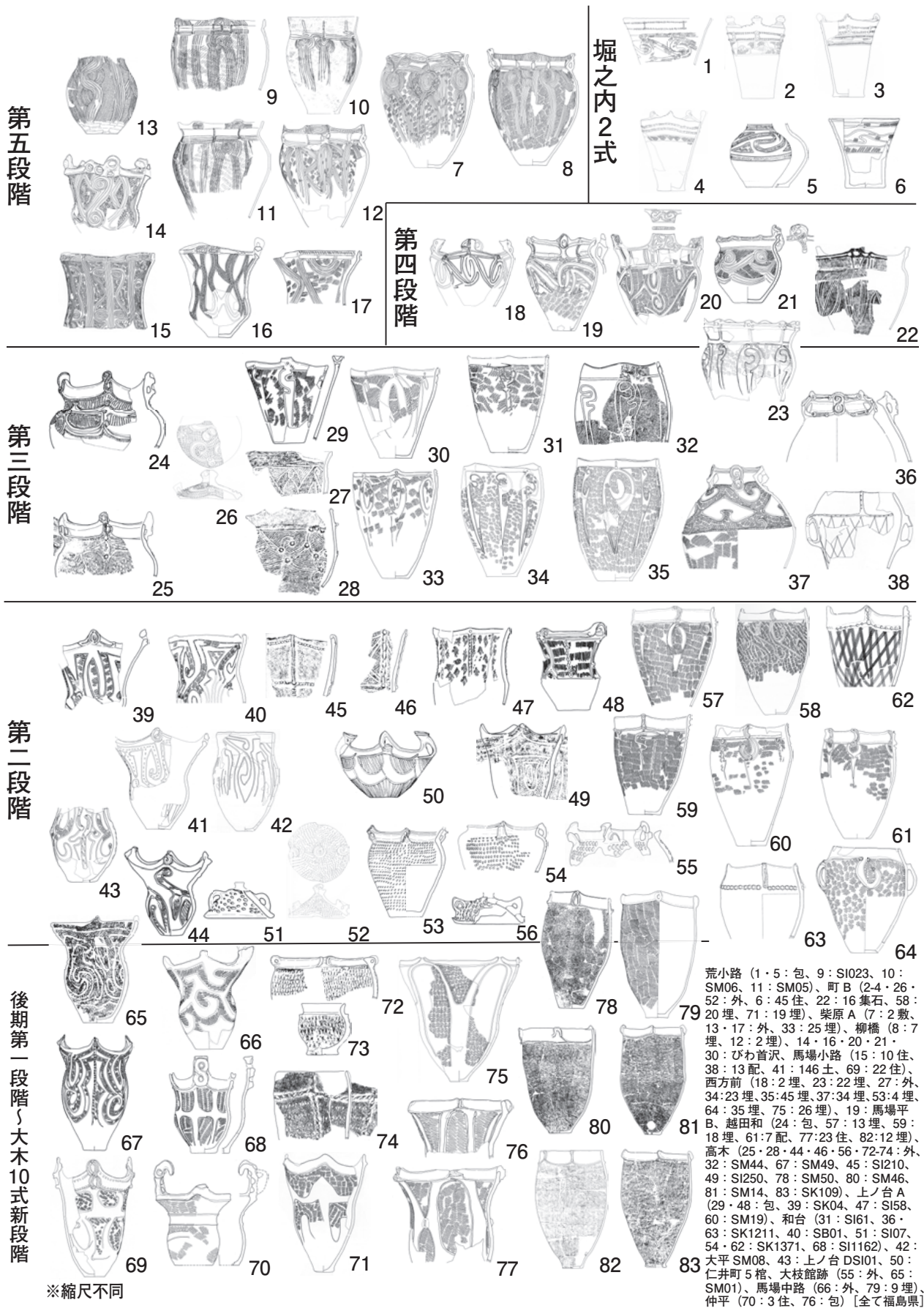


図21 阿武隈川流域における後期初頭～前葉の変遷案

表2 本稿における時間軸

時期区分\地域		中通り・浜通り		仙台湾周辺	北上川中～下流域・三陸沿岸南部
中期後葉		加曾利E3式	大木9a式		
			大木9b式		
中期末葉		加曾利E4式	大木10式古段階		
			大木10式中段階		
後期初頭	後期最初頭段階	加曾利E5式	牛蛭1式	称名寺1式古相	大木10式新段階
	後期第1段階		牛蛭2式	称名寺1式新相	
後期前葉 前半	後期第2段階	網取I式	称名寺2式	網取I式	後期第1段階「門前式」
	後期第3段階	網取II式	堀之内1式古段階	網取II式	後期第3段階「門前式」
	後期第4段階		堀之内1式中段階		後期第4段階「門前式」
後期前葉 後半	後期第5段階	堀之内1式新段階			後期第5段階（「門前式」）
		堀之内2式			+

※この時期の会津の土器群の状況は、中通り・浜通りと異なる点が多いが、本稿では中通り・浜通りに対比させる。
 ※この時期の東北部地域では、在地的な土器群と非在地的な土器群が混在してひとつの段階の土器群を形成することが多い。
 ※会津、中通り・浜通り、仙台湾周辺では後期初頭後半～後期前葉にかけて三十稲場式・南三十稲場式が一定数確認される。

側地域には分布する。堀之内2式併行期には、堀之内2式またはその影響が強い土器群がこれらの地域に分布し、北上川上流域以北では十腰内I式後半の土器群が分布するようになる。

4. 土器埋設遺構の集成結果

対象時期は中期前葉から後期前葉としたが、屋外土器埋設遺構の出土数は晩期までの検出例を集計した。出土状況や埋設された土器の残存状況からわかる時期幅が時間軸の細分段階において2・3段階の時間幅を有する例は、遺跡内・地域内での時期比定が確実な資料の数の比率に基づき遺跡・地域ごとに分配している。本稿の主旨からはずれる後期中葉以降の例は、おおよそ3段階（3型式）分をひとまとまりにして集成している。これらの操作は、後期前葉までも後期中葉以降も胴部地文のみや無文の埋設土器、胴下半の地文のみの部分しか残存しない埋設土器が多い（特に後期中葉以降に多い）ためである。

出土位置や各種属性を分析する資料は、時間的変化を把握するために時間軸の細分段階において1～2段階以内で時期比定が可能なものに絞った。時期不明とした資料は、細別段階に時期比定ができない資料とともに分析対象資料から除外した。埋設土器の法量の分析では、粗製土器や上部削平により一部しか残存していない埋設土器でも数値が明らかなものもあるが、時期が細別段階で比定できない例は、分析から除外した。屋外土器埋設遺構として報告されている例のうち、炉遺構や屋内土器埋設遺構の可能性のある遺構も分析対象資料から除外した。その結果、集成した対象資料は、福島県域で71遺跡784遺構であり、埋設属性の分析対象としたのは58遺跡407遺構である。

遺構により抽出することができた出土位置や埋設属性は異なるので各図表の個体数は異なっている。晩期の屋外土器埋設遺構資料について、本分析の出土数に福島市宮畑遺跡の資料群を出土数に含めていないた

め、実際の資料は図22で示したグラフより晩期初頭から中葉の資料は多い。宮畑遺跡では晩期の掘立柱建物群に関連して土器埋設遺構群が構築されている。近年では、同様の後期・晩期の遺構が伊達郡川俣町前田遺跡で検出され人骨も出土しているほか、太平洋沿岸では晩期中葉から末葉に人骨が出土する例が一定数確認されるが、本稿では触れない。

4-1. 検出数の時間的変化

図22に地域別の検出数の動向を棒グラフ、福島県域全体の動向を折れ線グラフで示した。古い段階では、中期前葉に会津で確認されるほか、大木7b式には阿武隈川中流域や真野川流域で出現し、大木8a式には阿武隈川上流域でも確認され始める。堅穴住居数が増加する大木9b式には各地域で検出例が増加し、特に阿武隈川上流域で多くなる。福島県域において堅穴住居数が減少する大木10式中段階には堅穴住居数に伴って減少するが⁴⁾、大木10式新段階には堅穴住居数の減少とは相反して中通りでは屋外土器埋設遺構が増加し、大木10式新段階から後期第1段階には阿武隈川上流域で急増する。中期から後期前葉におけるピークは後期第1段階にある。後期第2段階以降は数を減らしながら阿武隈川上流域を中心に中通りや浜通りで確認され、後期第4段階から堀之内2式併行にかけて低調となる。阿武隈川上流域では後期第5段階に屋外土器埋設遺構が一時的に増加する。後期中葉の例は少なく、後期後葉に浜通り・真野川流域で急増する。これらは沿岸部を中心に群集するタイプの土器埋設遺構が多く、後期前葉までの屋外土器埋設遺構とは性質が異なると考えられる。群集するタイプは晩期に継続し、前葉には阿武隈川中流域に拡大し、福島市宮畑遺跡のような屋外土器埋設遺構群を形成する遺跡が出現すると考えられ、沿岸部でも仙台湾や三陸南部にかけて屋外土器埋設遺構が発達する。福島県域における屋内土器埋設遺構の出土数と比較すると、屋内土器埋設

遺構の検出数は堅穴住居数の変化とほぼ同じ傾向をたどる。屋外土器埋設遺構の検出数が増加する後期第1段階にも検出数は増加しない。出土数からは屋内と屋外の相関関係は読み取れない(図23)。

4-2. 埋設属性の時間的变化

4-2-1. 埋設姿勢(図24)

埋設姿勢のうち、「入れ子」としたものは2個体以上の埋設土器が1遺構(ひとつの掘方への埋設)に使用され、同じ向きに重ねて埋設されたものを基本とし、正位+逆位のように埋設されている例は「合口」として分けた。しかしながら、大形の逆位(正位)埋設土器が小形の正位(逆位)埋設土器に覆いかぶさる例もあり、これらは「入れ子」としてカウントしている。「入れ子」「合口」とともに縦位に埋設される場合と横位に埋設される場合が存在する。「特異」とした例は、「同一個体の胴部破片が囲い状に埋設された例」と「同一個体の土器を分割し埋設土器を土器片囲いして構築する例」が確認された。

グラフには示していないが、中期前葉から中期中葉の例は会津・阿武隈川中流域・浜通り南部が中心となる。検出数は少ないが、大木8a式新段階から大木8b式古段階にかけて逆位埋設が発達する傾向にある。正位系が主体と考えられるが、横位や入れ子等の埋設姿勢もこの段階から確認される。大木9式期は、正位系(正位・正斜位)が主体で横位埋設がこの段階から一定数確認される。大木10式古段階から中段併行期は、正位系と横位が主体の中に、逆位が確認される。後期に入って、大木10式新段階併行期から後期第2段階も正位系と横位が主体である。この段階ではやや横位の比率が高く、続く後期第2段階ではやや正位系の比率が高くなり逆位も一定数確認される。牛蛭1式後半から牛蛭2式への過渡期(大木10式新段階併行)と牛蛭2式から綱取I式への過渡期(後期第1段階から後期第2段階併行)では後期第1段階と同様に横位が主体である。「合口」は、大木10式新段階併行期と牛蛭2式から綱取I式への過渡期に確認され、横位埋設の合口が多い。後期第3段階から堀之内2式併行期は、正位系と横位が主体であるが正位系の比率が高い傾向にあり、後期第5段階まで続いていく。横位埋設は、後期第5段階に比率を高めたあと、堀之内2式には確認されなくなる。

4-2-2. 埋設部位(図25)

全時期を通じて、完形または土器の上下半分を欠損した(または意図的に打ち欠いた)埋設土器を採用することが多く、土器の大部分を意図的に打ち欠いたと

考えられる胴部・口縁部・底部などを埋設部位とした例は少ない傾向にある。ただし、完形と判断した埋設土器のなかに口縁部等の局所的な打ち欠きや埋設土器を半裁して縦半分を埋設していないというような埋設部位の選択があった場合は、報告書等からでは判断できず、次に述べる意図的欠損行為を見落としている可能性がある。福島県域の埋設部位の選択傾向は、中部高地・西南関東・栃木県域の傾向(太田2017, 2019a)とは完形土器の採用比率が高い点では異なる。完形土器を採用する傾向は、中期末葉以降、後期前葉にかけて一貫して強く、胴部・口縁部・底部を採用することはほとんどない。

4-2-3. 意図的欠損行為(図26)

グラフのうち「部位打欠」は調査所見や報告図版、埋設姿勢と埋設部位から判断し胴上半や胴下半、口縁部を意図的に欠損したと考えられる例を一括した。底部のみの打欠は「底部打欠」として独立させている。

グラフに示していない中期前葉から中期中葉は検出数が少なく会津の例が中心となるが、大木7a式新段階から大木8a式新段階に底部穿孔・底部打欠が確認され、大木8a式古段階までは意図的欠損の比率が高い傾向にある。中期後葉から後期前葉は、多くの時期で意図的欠損行為が「ない」例が半数近くを占めるが、大木10式古段階・牛蛭1式後半から牛蛭2式・後期第1段階から第2段階に意図的欠損行為を加える例が多い傾向にあり、後期第3段階から堀之内2式併行期も比較的多い傾向にある。意図的欠損行為の内訳をみると、中期前葉から中期中葉に底部穿孔・底部打欠が確認される。胴部穿孔は大木9b式から後期第2段階にかけて主要な意図的欠損行為ではないが確認され、底部穿孔は後期第4段階を除く大木9a式から後期第5段階まで継続的に確認され、大木10式新段階併行から後期第2段階にかけて多い傾向にある。

4-3. 出土位置の時間的变化

4-3-1. 出土タイプ(図27)

全時期を通じて単独出土タイプ(Xタイプ)が主体であるが、2基以上が近接する群集出土タイプ(Yタイプ)は大木8b式中段階以降、堀之内2式併行期まで確認される。中期末葉から後期最初頭と後期前葉に群集出土タイプの検出例が多くなる傾向にあり、これらの時期には3基以上が群集する例も他時期と比較して多く確認される傾向にある。後期前葉に群集出土タイプが増加する傾向は、栃木県域で確認される傾向(太田2019a)と同様である。

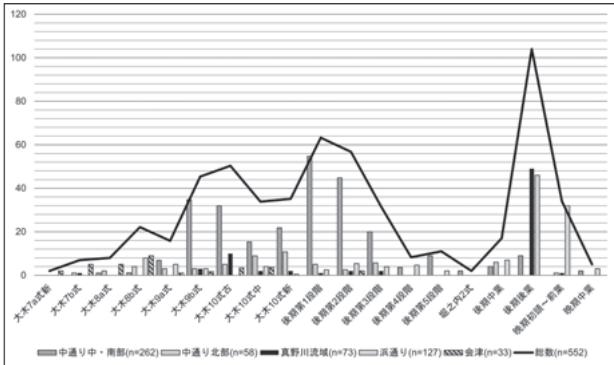


図22 福島県域における屋外土器埋設遺構出土数の変化

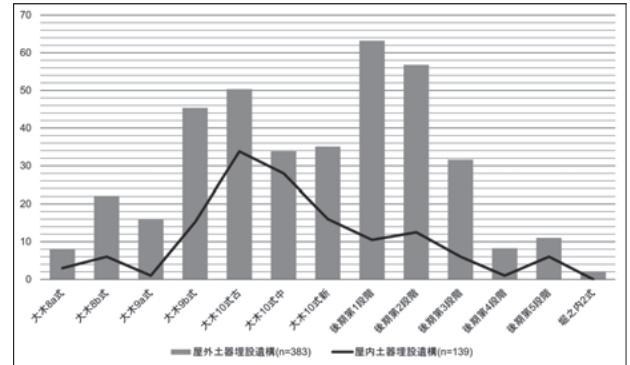


図23 福島県域における土器埋設遺構出土数の比較 (屋外・屋内)

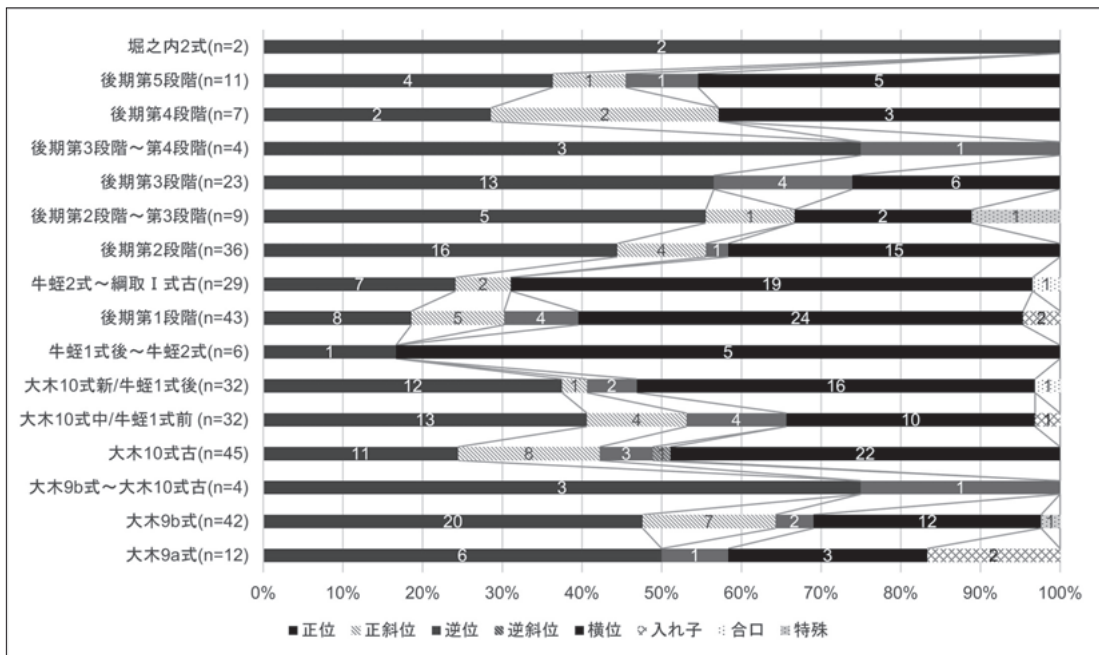


図24 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設姿勢の変化

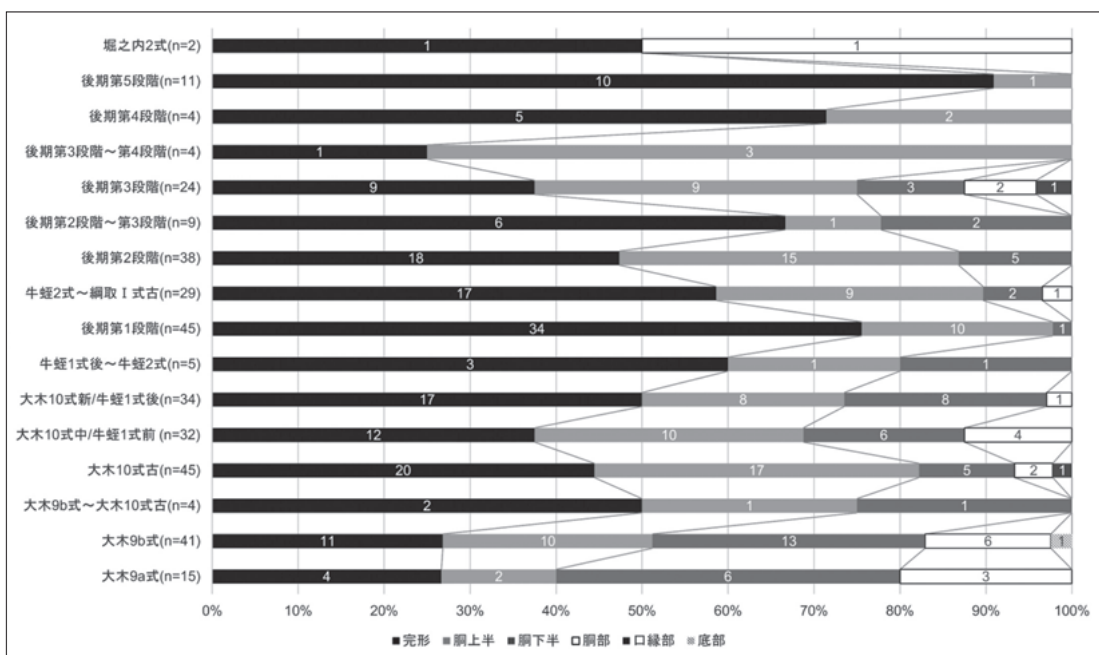


図25 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設部位の変化

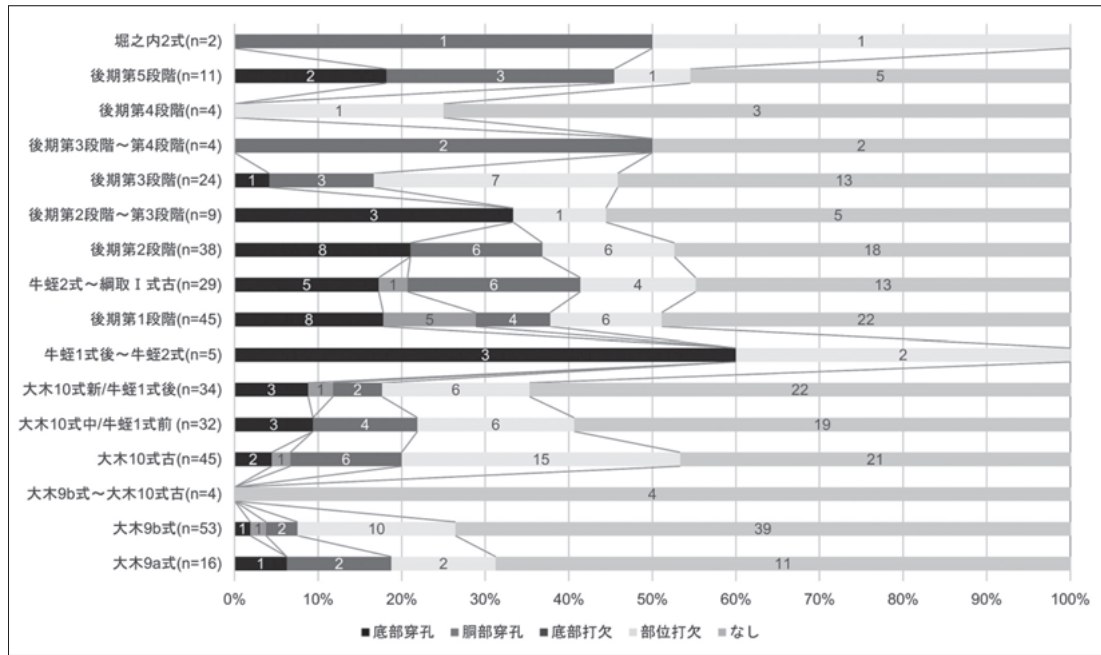


図26 福島県域における屋外埋設土器への意図的欠損行為の変化

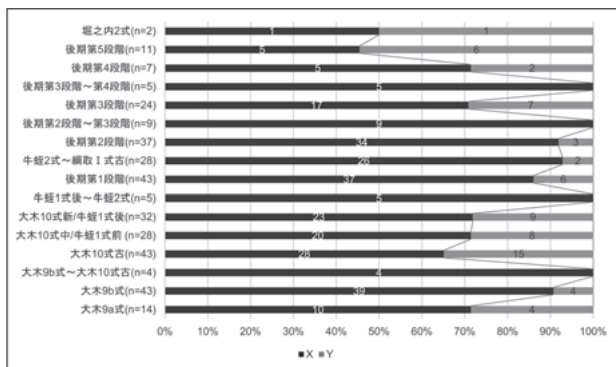


図27 福島県域における屋外土器埋設遺構の出土タイプの変化

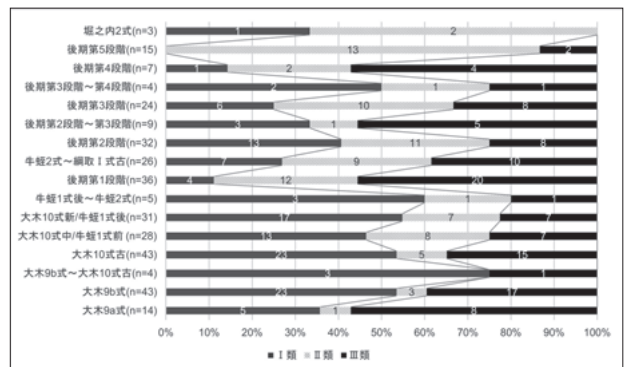


図28 福島県域における屋外土器埋設遺構の出土位置(大別)

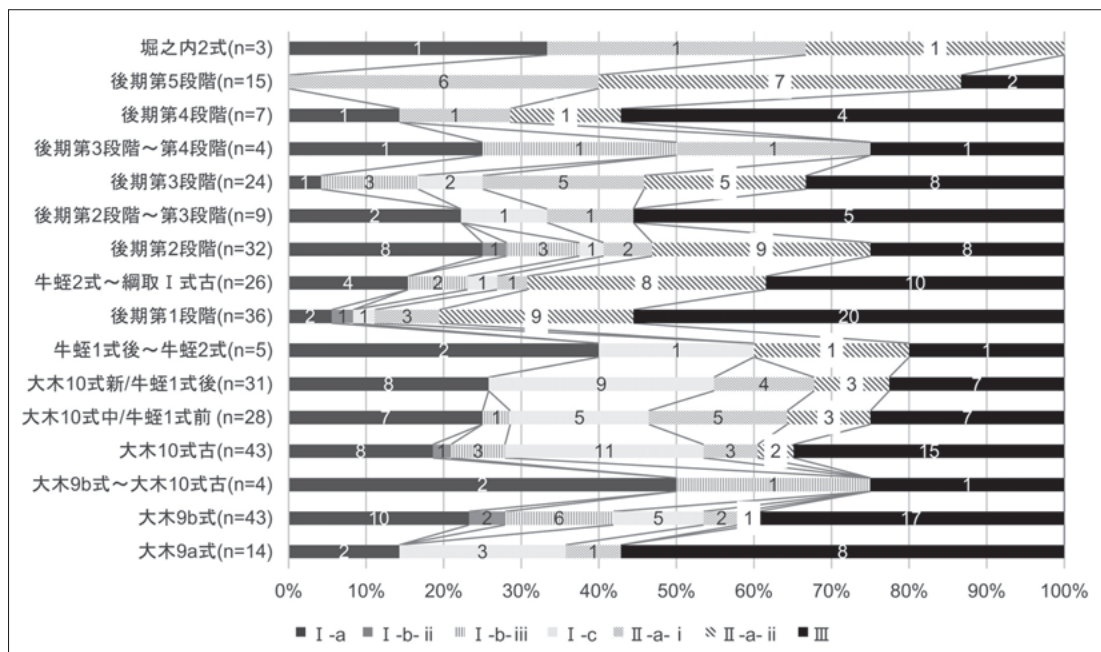


図29 福島県域における屋外土器埋設遺構の出土位置の変化(細別)

4-3-2. 出土位置 (図28・29)

グラフには示していないが、中期前葉は住居域に埋設される例 (I類) が少なく、住居域外に埋設される例 (II類・III類) が多い。中期中葉にはI類例が主体となるが、住居域外の埋設も確認される。中期後葉は住居の近くに埋設される (I-a類) 例が主体であり、住居址覆土土器埋設遺構 (I-c類) も確認される。住居域以外で他の遺構と近接する例は少なく、単独で埋設される例 (III類) も多い。中期末葉になると前段階までの傾向が継続する一方で、土坑群や配石遺構に近接して埋設される例 (II-a-i類・II-a-ii類) が増加し始める。これらII類例は後期第1段階から第2段階に増加し、配石に近接して埋設される例 (II-a-ii類) が増加する。II類が3割～4割前後を占める状況は堀之内2式併行期まで継続し、後期第1段階以降、III類も3割前後の比率を占め、住居域埋設 (I類) 例の割合は前時期と比較して後期第1段階から堀之内2式に低下する傾向にある。しかし、後期前葉は東北地方太平洋側地域では堅穴住居自体が検出されにくい可能性がある点に留意する必要がある。後期前葉にI類例がなくなるわけではなく、後期に土器埋設遺構を埋設する区域が特定の空間として区画される状況は読み取れない。I-c類は、大木8b式中段階に確実な例が確認され、中期後葉から後期初頭に発達する。飯館村上ノ台A遺跡などでは、中期末葉に群集タイプの住居址覆土土器埋設遺構が検出される例や、I類のうち住居に近接はしないが、同時期住居のまとまりの外縁部に埋設されている例 (I-b-ii類・I-b-iii類) が確認される。

4-4. 屋外土器埋設遺構からの遺物出土例

阿武隈川上流域の穿孔行為が施される埋設土器の検出率の高さは、埋葬や祭祀といった葬制や墓制に関連した埋設属性を想起させる。内容物が検出されなければ土器埋設遺構の機能を特定することはできないが (太田2017)、福島県域を中心とした東日本太平洋側地域における埋設土器や掘方内部から出土遺物が検出される例と葬制・墓制に関連して掘方の上部に配石が付される例をまとめる (表3)。表に記載していないが、祇園原貝塚で他に時期不明人骨 (胎児・乳児骨) が出土する屋外土器埋設遺構が2基検出されている。千葉県船橋市古作貝塚や千葉市加曽利貝塚でも屋外土器埋設遺構から人骨の出土が報告されているが詳細は不明であるため記載していない。東北地方太平洋側地域で中期後葉から後期前葉の屋外土器埋設遺構の内部や遺構上面に配石が付される例は、岩手県和賀郡西和賀町本内II遺跡D VII t10埋設土器 (大木8b式・横位一底部欠損)、福島県本宮市高木遺跡 SS23 (牛蛭2式・

正位一完形)・SS37 (牛蛭2式・正斜位一完形で胴部穿孔)・SS41 (牛蛭2式・横位2基一完形で胴部穿孔と完形、赤彩礫が検出)、田村郡三春町越田和遺跡7号配石遺構 (綱取1式・横位一完形で底部穿孔)、三春町西方前遺跡46号埋設土器遺構 (後期第3段階・横位一完形、群集する出土タイプ)、郡山市荒小路遺跡6号埋設 (後期第5段階・正位一完形で底部穿孔、群集する出土タイプ)・SK24 (後期第5段階・横位一完形で底部穿孔、群集する出土タイプ) が確認された。栃木県北部・東部でも横位土器埋設遺構の上に礫が配される例や、埋設姿勢は問わず配石遺構と関連する例が検出されている。福島県域では配石遺構と関連する屋外土器埋設遺構に横位埋設や埋設土器への穿孔行為が目立つ。筆者は、横位土器埋設遺構の機能の一部に墓の機能を求める蓋然性が高いと指摘したことがある (太田2019b) が、今回の集成でも検出例は少なく、機能の特定は確実な内容物や上部施設について詳細に検討し、他の墓関連遺構との対比を行っていくことが必要である。一方で、今回集成した検出例は中期末葉から後期前葉に集中し、人骨出土例も福島県域では中期末葉から後期初頭、千葉県域では後期前葉に確認されるようになることは屋外土器埋設遺構のひとつの側面を表し、当該期に土器を採用した葬制・墓制が発達することを示している。ともに屋外土器埋設遺構から人骨が出土している福島県域と千葉県域でも、埋設姿勢と埋設部位からみると異なる点も多い。

5. 考察

5-1. 地域別にみた埋設属性 (図30・31)

中期前葉 (大木7a式後半) から後期前葉 (堀之内2式併行) を通じた「埋設姿勢」と「意図的欠損行為」の2つの属性の傾向を福島県域の地域別に確認する。

「埋設姿勢」には福島県域内において地域差が確認される。正位埋設は、阿武隈川上流域を除く地域で50%以上を占める主体的な埋設姿勢である。阿武隈川上流域では横位埋設が主体となる。横位埋設は、阿武隈川上流域で50%以上を占めるが、浜通り・会津では少なく、浜通り南部では10%未満である。逆位埋設は、会津で多く浜通り北部・阿武隈川上流域では10%未満であり、浜通り南部では確認されない。入れ子埋設は浜通り南部を除く地域で確認されるが、どの地域においても少ない例である。合口埋設は阿武隈川流域のみで確認される。

浜通りでは埋設姿勢の種類が少なく、正位系が主体で正斜位埋設が多い傾向にあり、北部では南部よりも埋設姿勢の種類が多い傾向にある。阿武隈川中流域は正位を主体としながらも、各埋設姿勢のバランスが5

表3 内容物が検出された屋外横位土器埋設遺構

出土遺物分類	所在地	遺跡名	遺構名	時期	埋設姿勢	埋設部位	出土遺物	備考
石製品	岩手県九戸郡九戸村	田代VI	土器埋設遺構	大木9b式	横位	完形	硬玉製玉2点	
石製品	福島県二本松市	塩沢上原A	SK13	大木10式中	正斜位	完形	ヒスイ製玉1点	埋設土器底部穿孔。
石製品	福島県本宮市	高木	SM11	大木10式中	正位	完形	磨製石斧1点	
土製品	福島県本宮市	高木	SM46	牛轡2式	横位	完形	円形土製品1点	埋設土器胴部穿孔。
土製品	福島県本宮市	高木	SM89	後期第2段階	特異(破片囲)	胴上半	ミニチュア土器、有孔土錘、磨製石斧各1点	
土製品	福島県河沼郡柳津町	石生前	SK69	大木8b式古	逆位	完形	板状土偶1点	土坑掘方の壁際に埋設。
人骨	福島県福島市	和台	SM78	大木10式	横位	口縁部欠損	被熱した幼児骨	
人骨	福島県郡山市	町B	20号埋ガメ	綱取1式	横位	完形	幼児歯列	
人骨	千葉県松戸市	貝の花貝塚	埋甕J	称名寺2式	正位	完形	幼年骨	
人骨	千葉県松戸市	貝の花貝塚	埋甕C	後期初頭	正位	完形	幼年骨	成人女性人骨が近接。
人骨	千葉県松戸市	貝の花貝塚	埋甕F	堀之内1式中	正位	完形	新生児骨	土器埋設遺構が近接。
人骨	千葉県松戸市	貝の花貝塚	埋甕L	称名寺2式	正位	完形	新生児骨	
人骨	千葉県松戸市	貝の花貝塚	埋甕M	加曾利E3式	正位	完形	小児骨破片	
人骨	千葉県松戸市	貝の花貝塚	埋甕N	称名寺2式	不明	胴上半	小児骨破片	
人骨	千葉県千葉市	大膳野南貝塚	1号小児土器棺	堀之内1式	正位	底部	周産期人骨	
人骨	千葉県千葉市	大膳野南貝塚	2号小児土器棺	堀之内1式	正位	底部	乳児骨、貝製垂飾1点	埋設土器底部穿孔。
人骨	千葉県千葉市	大膳野南貝塚	3号小児土器棺	後期前葉	正位	胴下半	周産期人骨	
人骨	千葉県千葉市	大膳野南貝塚	4号小児土器棺	堀之内1式中	横位	胴上半	周産期人骨	
人骨	千葉県千葉市	大膳野南貝塚	5号小児土器棺	後期前葉	横位	胴上半	周産期人骨破片	
人骨	千葉県千葉市	大膳野南貝塚	6号小児土器棺	堀之内1式新	横位	胴下半	周産期人骨、貝製穿孔品1点	
人骨	千葉県市原市	祇園原貝塚	22号人骨	称名寺2式	正位	胴下半	小児骨	イヌ埋葬が近接。
人骨	千葉県市原市	祇園原貝塚	23号人骨	称名寺2式	正位	完形	幼児骨	イヌ埋葬が近接。墓関連遺構が群集する地点。
人骨	千葉県市原市	祇園原貝塚	71号人骨	堀之内1式	正位	胴部	胎児骨	イヌ埋葬が近接。墓関連遺構が群集する地点。
人骨	千葉県市原市	祇園原貝塚	74号人骨	堀之内1式古	正斜位	胴上半	新生児骨	成人女性人骨が近接。

地域の中ではもっともとれている。この状況から、福島県域内において北半地域は各埋設姿勢がバランス良く分布する傾向にある。会津の逆位埋設は中期前葉から中期中葉⁵⁾、阿武隈川上流域の横位埋設は中期末葉から後期前葉における特定の埋設姿勢の盛行を示している。

「意図的欠損行為」にも地域差がある。基本的にどの地域も70%程の埋設土器には意図的欠損行為が施されない。部位打欠の傾向も各地域で10~15%程で大きな地域差はない。しかし、底部穿孔・胴部穿孔・底部打欠は地域ごとに差がある。底部穿孔は全地域で確認されるが、阿武隈川流域と浜通り南部で5%以上と比較的多く確認される。胴部穿孔は、阿武隈川上流域でのみ確認され、阿武隈川上流域は穿孔行為と底部打欠全体が他の地域と比較して発達する傾向にある。底部打欠は、阿武隈川中流域・浜通り南部・会津で低調であるのに対して、阿武隈川上流域・浜通り北部では5%以上確認される。

管見に触れる限り、縄文時代の東日本太平洋側地域で屋外土器埋設遺構の底部穿孔行為が福島県域ほど発達する地域はほかにない。他に底部穿孔が盛行する時期・地域は、大木8b式期の北上川流域と三陸沿岸南半、中期末葉から後期前葉の名取川流域と宮城県西南部、晩期の仙台湾~三陸沿岸南部と限定的である。阿武隈川流域では中期末葉から後期前葉に穿孔行為が発達するため、宮城県西南部との関連が考えられるかもしれない。この点は、後期中葉以降の屋外土器埋設遺構との関係を含めた今後の検討課題である。関東地域

では基本的に意図的欠損行為は低調であり、穿孔行為も少ない。中期末葉から後期前葉の阿武隈川流域を中心とした地域における穿孔行為の盛行は、地域的な特徴として把握することができる。

5-2. 埋設姿勢と他の埋設属性

「埋設姿勢と埋設部位」の関係を見る。図32では底部打欠例は完形としてカウントし、横位の入れ子・合口例は横位埋設としてカウントした(横位入れ子が1基、横位合口が2基確認され、いずれも「完形」2個体ずつの組み合わせとした)。「完形」の採用率は、横位埋設で50%以上となるほか、合口(縦位)・「同一個体の土器を分割し埋設土器を土器片囲いして構築する」埋設方法では完形2個体の組み合わせが確認される。横位埋設には完形と胴上半の部位を埋設土器に採用する傾向があり、底部打欠とは別に胴下半を意図的に欠損させる傾向が強いのだろう。正位・逆位埋設でも完形の採用率が高い傾向にあるが、栃木県域の正位・逆位埋設と比較すると、福島県域では縦位系埋設にも完形の採用率が高い。埋設姿勢別ではなく全体の埋設姿勢の傾向としてみた場合でも、中部高地・西関東や栃木県域の傾向と比較すると福島県域では完形の採用率が非常に高く、胴部・口縁部・底部などの埋設土器の大部分を欠損または打ち欠いた部位の採用率が低い。このことは福島県域の特徴といえる。一方で横位埋設に完形と胴上半が採用される比率が高い傾向は、栃木県域の横位埋設の傾向と一致する。縦位埋設に採用する埋設部位の傾向は異なるが、横位埋設に採

用する埋設部位の傾向は、福島県域と栃木県域で共通する傾向にあり、地域をさらに細分すると阿武隈川上流域と那珂川上・中流域で共通している。横位埋設は縦位系埋設に比べ上部削平の影響が埋設土器を半裁する形で及ぶことも評価に影響するが、この影響を考慮したとしても上記の埋設姿勢と埋設部位の関係と傾向が指摘できるだろう。

次に「埋設姿勢と意図的欠損行為」の関係をみる(図33)。逆位埋設は意図的欠損行為「なし」の割合が80%以上で意図的欠損行為の比率が低いようにみえるが、実際はそうではない。逆位埋設の場合、遺構上面が削平されると底部～胴下半が欠損するケースが多い。その場合、胴下半が埋設部位として現在の観察者には認識されず、底部穿孔・底部付近の胴部穿孔・底部打欠の有無は判断できずに「意図的欠損行為あり」と判断できる確率が低下する。そのため図34に示された逆位埋設の「なし」は、意図的欠損行為の中でも特に当時の実際の行為を反映するのが困難である。逆位埋設以外の意図的欠損行為は、正位系埋設では10%強に穿孔行為が加えられ、横位埋設では20%強に穿孔行為が加えられる傾向にあり、横位埋設では他の埋設姿勢と比較して穿孔行為が加えられる傾向が強い。横位埋設は、底部打欠が加えられる比率も他の埋設姿勢と比べ高く全体として意図的欠損行為が加えられる傾向が強い。栃木県域では意図的欠損行為が加えられる埋設姿勢は正位系が90%を超え、底部穿孔・底部打欠も正位系埋設に多く、「埋設姿勢と埋設部位」には福島県域と栃木県北東部に共通性が確認されたが、「埋設姿勢と底部穿孔」には共通性が確認されない。

5-3. 法量と埋設属性

「法量と埋設姿勢」の関係をみる。図34には中期中葉(大木8a式)から後期前葉(堀之内2式併行)までの時期比定が可能で埋設姿勢と器高・最大径が読み取り可能な資料(推定・復元含む)を埋設姿勢別に法量をプロットした。個体数は、正位系179、逆位系37、横位145、合口・入れ子6、特異3である。

横位系は縦位系と比較して上部削平の影響が器高に表れにくい点に埋設部位と同様に留意する必要がある。

縦位系のなかでも逆位系は、最大径に対して器高が短い範囲に集中し、正位系と比較しても器高が短い範囲に集中している。これは、露出土器埋設遺構1類(太田2017, 2019a)との関係を考える必要がある。今回は露出土器埋設遺構を検討できていないが、福島県域でも埋設状況や掘方の大きさと埋設土器の法量から露

出土器埋設遺構と考えられる例が確認される。

他に散布図からは有意な関係はあまり見いだせないが、横位は正位系と比較して最大径40cm以上、器高50cm以上に集中し、大形土器が埋設土器として採用される傾向が強い。上部削平による埋設土器や掘方の欠損を考慮せねばならないが、縦位系では逆位系より正位系に大形土器を採用する傾向が強く、縦位系より横位のほうが大形土器を採用する傾向が強いと考えられ、栃木県域の傾向(太田2019a)と一致する。

次に「法量と穿孔行為」の関係をみる(図35)。意図的欠損行為全般は法量との直接的な比較が難しいため、部位の打欠が生じていない底部・胴部穿孔(54個体)と底部打欠(5個体)が施された個体をプロットした。抽出した対象が完形に近い土器が大多数であるため大形土器(最大径40cm以上・器高50cm以上)の範囲に集中するのが当然と考えられるが、これを考慮したうえでも穿孔行為が行われる土器は大形である可能性が考えられる。

5-4. 牛蛭式土器が使用される土器埋設遺構

「舌状突起を有する土器群」は、牛蛭式に関連する土器群であると筆者は理解している。そこで、牛蛭式期(大木10式古段階併行から大木10式新段階併行)における福島県域の屋外横位土器埋設遺構に採用される土器群を、大木式土器群・牛蛭式土器群・加曾利E式土器群・称名寺式土器群にわけて時期ごとの組成比率を出した(図36)。ここでは牛蛭式と関係の強い「舌状突起を有する土器群」も牛蛭式として扱う。また、牛蛭1式後半(大木10式新段階併行)から牛蛭2式(後期第1段階併行)の過渡期にあたるものは牛蛭1式後半に、牛蛭2式から綱取I式古相(後期第2段階併行)の過渡期にあたるものは牛蛭2式に含めてカウントしている。

牛蛭1式が成立する大木10式中段階併行期から横位埋設の40%に牛蛭式が採用されており、大木10式と同じ採用率である。大木10式中段階併行期は、加曾利E4式が福島県域に前段階に増して分布を拡大する時期であるが、加曾利E4式も20%採用されている。大木10式新段階併行期になると55%強に牛蛭式が採用されるようになる。この時期には福島県域に加曾利E式土器群とともに称名寺式土器群も拡大し、埋設土器に採用されるが、この2つの土器群の採用率は低い。横位土器埋設遺構が阿武隈川上流域を中心に増加する後期第1段階には福島県域には各種土器群(加曾利E式、称名寺式、三十稲場式、北上川流域を中心に分布する土器群:図21)が分布するが、牛蛭式が90%強となる。後期第2段階にも前述の各種土器群が福島県

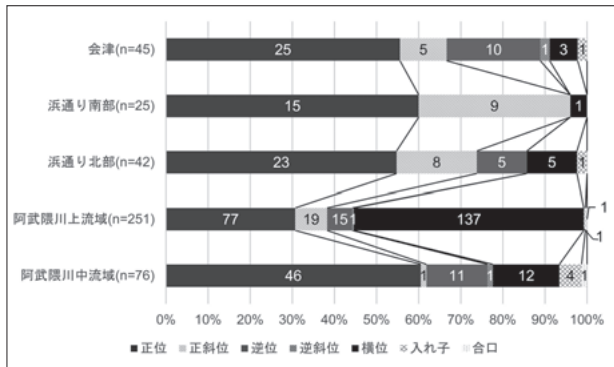


図30 福島県域における屋外土器埋設遺構の地域別埋設姿勢

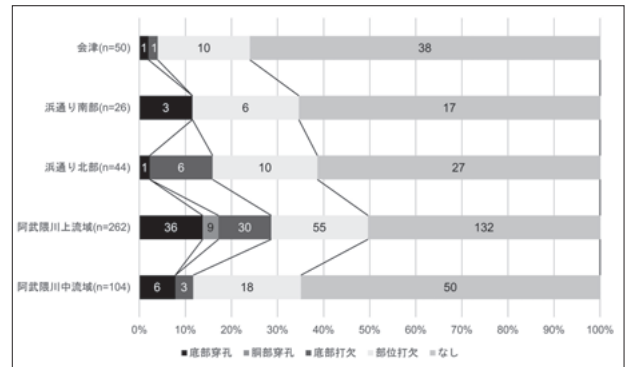


図31 福島県域における屋外土器埋設遺構の地域別意図的欠損行為

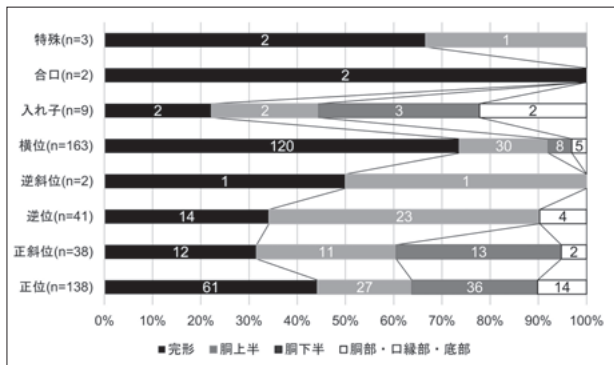


図32 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設姿勢と埋設部位の関係

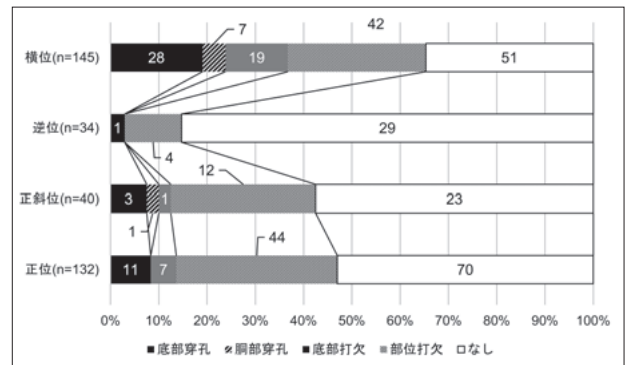


図33 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設姿勢と意図的欠損行為の関係

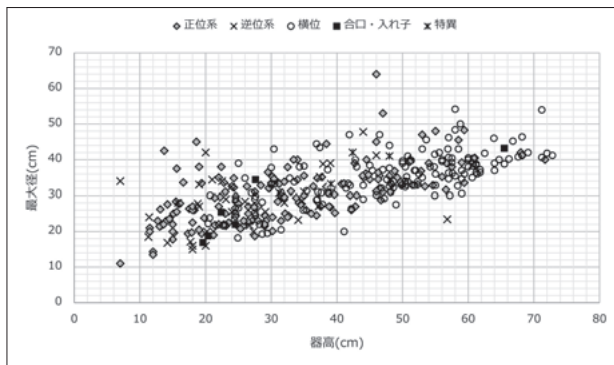


図34 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設姿勢と法量の関係

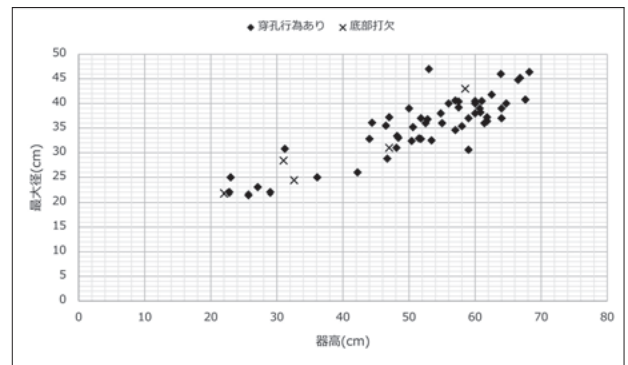


図35 福島県域における屋外土器埋設遺構の意図的欠損行為と法量の関係

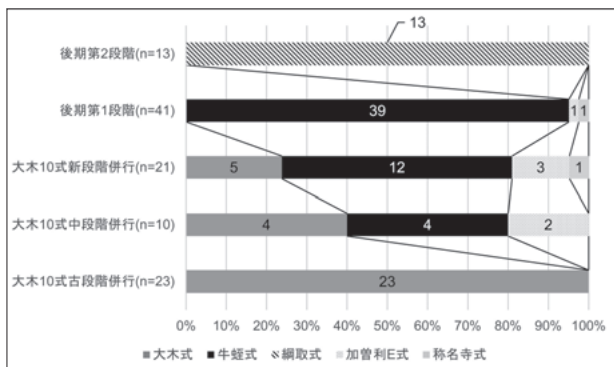


図36 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設される土器群の変化

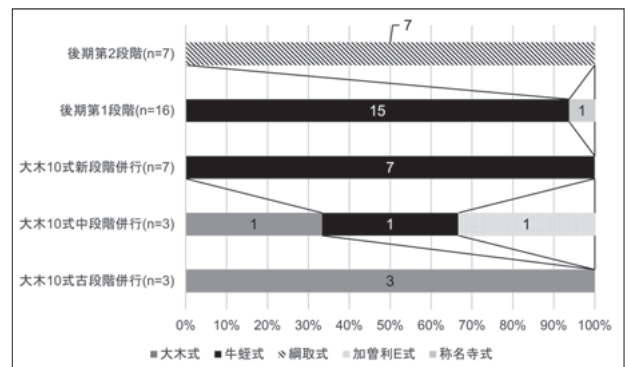


図37 福島県域における屋外土器埋設遺構の埋設土器への穿孔行為と埋設される土器群

域に分布するが、牛蛭式土器に周辺地域の土器群が影響を与え成立した綱取I式の採用率がほぼ100%となる。

屋外横位土器埋設遺構に加えられることが多い穿孔行為の付加について確認すると(図37)、横位埋設に用いられる土器群の比率と大きな差はなく、大木10式新段階併行以降の後期初頭には、牛蛭式と後続する綱取I式に穿孔行為が加えられる傾向が強い。牛蛭式成立直後から福島地域の屋外土器埋設遺構は横位土器埋設遺構が増加し、穿孔行為の比率も増加する。この傾向と横位土器埋設遺構への牛蛭式の採用比率の時間的変化との間に関係性をただちに求めることはできないが、特定土器群(牛蛭式と牛蛭式と関係の強い土器)と特定の埋設属性(横位埋設・穿孔行為)に強い相関がある可能性が考えられる。牛蛭式と牛蛭式と関係の強い土器が器高50cm以上の比較的大形の個体が多い傾向にあることもふまえ、牛蛭式が土器埋設遺構専用の埋設土器であった可能性も想定できるかもしれない。しかし、牛蛭式は福島地域に一定数の分布を示し、ひとつの時間的段階を成す土器群で前後の土器群との系統関係も辿れること、牛蛭式は堅穴住居内でも一定数出土していることをふまえると明確な専用土器としての使い分けがあった可能性は低い。牛蛭式の横位土器埋設遺構への採用率は、那珂川上流域の那須でも高い傾向にあり、屋外横位土器埋設遺構が展開する時期に中通りと那須で共通して牛蛭式が屋外横位土器埋設遺構の埋設土器に採用されていたことが指摘できる。中通りでは、屋内横位土器埋設遺構にも牛蛭式が採用される傾向が強い。

5-5. 東日本太平洋側地域における横位土器埋設遺構

これまでの検討から、中期末葉から後期初頭における阿武隈川流域～那珂川上流域に屋外横位土器埋設遺構が発達し、阿武隈川上流域を中心として特徴的な埋設属性の付加が確認され、その特徴の多くは那珂川上流域でも共通していることが把握された。

福島地域では大木7b式に屋外横位埋設が確認されるが、継続的に確認されるようになるのは大木9a式以降である。栃木地域では日光市仲内遺跡と下都賀郡壬生町御新田遺跡で加曾利E1式期(大木8a式併行期)の例が1例ずつあり、大木9a式に宇都宮市上欠遺跡などで数例確認されるが、検出例の多くは中期末葉から後期初頭の那珂川上・中流域に集中する。茨城県域では那珂川下流域の水戸市砂川遺跡で中期末葉から後期初頭の屋外横位埋設が発達するほか屋外横位埋設はほとんど確認できない。中部高地・西関東でも屋外横位

埋設は中期後葉に確認されるが、福島地域・栃木地域と比較し検出数は極めて少ない。本稿の検討を通じて把握された横位土器埋設遺構の地域的特徴を東日本太平洋側地域に位置づけるためのひとつのアプローチとして、対象地域とその周辺の屋外・屋内の横位土器埋設遺構を検討する。本節では土器埋設遺構を屋内・屋外と略称する。

5-5-1. 東北地方太平洋側地域の屋外横位土器埋設遺構

東北地方太平洋側地域の屋外横位埋設例の分布を先行研究(北日本縄文文化研究会2014)から把握する。検出例を抽出すると、青森地域の太平洋側では円筒下層d式(前期末葉)に2例、岩手県域では前期に2例・中期中葉に9例(1遺跡7例)・中期後葉に1例・中期末葉に1例・晩期に4例、宮城県域では大木6式から大木8a式(前期末葉から中期中葉)に1遺跡25例・中期末葉に1例・後期前葉に1例・晩期に6例確認される。岩手県紫波郡矢巾町白沢森遺跡では大木8b式の屋外横位埋設が7例、宮城県刈田郡七ヶ宿町小梁川遺跡では大木6式から大木8a式の屋外横位埋設が25例検出され、一定の期間に屋外横位埋設が継続するとともに遺跡内における同時期の検出数が多い。この2遺跡を除き、屋外横位埋設が盛行する地域・時期は現時点で確認することができない。円筒上層式期(中期前半)には青森県青森市三内丸山遺跡でも屋外が確認されるが、遺跡内の同時期の屋外に占める横位埋設の割合は低い。東北地方太平洋側地域で屋外横位埋設の分布の時間的推移を辿ろうとすれば、「小梁川東遺跡→白沢森遺跡→東南北部」という流れが推定されるが資料的空白があり、現段階で系譜関係を想定するのは難しい。中期後半までに分布する東北地方の屋外横位埋設例が福島地域の屋外横位埋設と無関係とは断言できないが、中期末葉から後期初頭に発達する阿武隈川上流域から那珂川流域を中心とした屋外横位埋設はこの地域において何らかの要因で「横位埋設」が積極的に選択され、穿孔行為などの各種属性が付加され発達したこの地域に特徴的な屋外であると考えたい。選択の背景にある要因は機能とも関連し、多角的な視点から分析を行う必要がある。

5-5-2. 東日本太平洋側地域の屋内横位土器埋設遺構

屋内は、埋設位置・姿勢・部位といった属性からパターン分けされることが多い。屋内は屋外と異なり、堅穴住居内という規制された空間の中に構築されるため、埋設位置が重要な属性となり、他の属性も堅穴住居内の空間に規制されると筆者は考えている。本項では屋外と屋内にみられる「横位埋設」属性に着目しな

がら福島県域とその周辺地域の屋内を確認し、屋外と屋内の関係性を検討する。

東北地方太平洋側地域

東北北部（青森県域、津軽を含む）の検出例を先行研究（岡本 2014；永瀬 2015；成田 1997）をもとに概観すると、前期から中期中葉と中期末葉から後期前葉に屋内が検出されるが検出例は少ない。埋設位置は壁際への埋設や柱穴ラインより内側の空間への埋設などがあり、埋設姿勢は縦位にほぼ限定される。地域的な傾向を把握できないが、大木 8b 式期に盛岡周辺や宮古周辺で盛行する屋内逆位底部穿孔（後述）や広義の複式炉の前庭部に埋設される例は分布しないと考えられる。屋外も含め、青森県域を中心とした東北北部は土器埋設遺構の発達する時期が前期から中期中葉であることを考えると、東北地方中部・南部や中部高地・関東地方とは異なる系譜の土器埋設遺構が展開していた可能性がある。この点は、東北北部とその周辺地域の集成と分析をもとに東日本全体という広域的視点に立って改めて考える必要があるだろう。

岩手県域の屋内は、阿部勝則が指摘した中期中葉の逆位底部穿孔パターンが特徴的である（阿部 1998, 2008）。以下、筆者の集成をもとに概観する（54 遺跡 135 例）。岩手県域では内陸部・沿岸部ともに屋内が確認され、大木 8b 式と大木 9b 式から大木 10 式新段階に検出例が集中する。大木 9a 式は検出例が極めて少ないが、確認できる竪穴住居の数が少なくなるためであり、大木 9b 式から大木 10 式新段階に検出数が増えるのは竪穴住居の数が増加するためと考えている。言い換えれば、どの時期も一定の割合の住居に屋内が構築されていたことになる。地域的な分布状況も竪穴住居を伴う遺跡の動向を反映しているとみられ、地域的・時期的な偏在は読み取れない。岩手県域でどの時期にも確認される埋設パターンは、縦位埋設で炉軸線上や柱穴内側の空間を意識した埋設、竪穴住居壁際への埋設である。逆位埋設は阿部勝則が指摘した通り、炉軸線上や炉を中心とした柱穴内側の空間を意識され、完形＋底部穿孔または打欠といった属性が付加される例が多い。これら屋内逆位底部穿孔例は、大木 8a 式から 8b 式、特に大木 8b 式中・新段階に集中する。正位系埋設は住居奥壁部を含む壁際に埋設される例が多く、大木 8b 式から後期第 3 段階まで長期間にわたり確認できる基本的な埋設パターンである。他に、出入口部への埋設が中期後葉から末葉に、複式炉前庭部周辺への埋設が大木 10 式期に確認され、住居中央部の空間や炉から柱穴ライン内側の空間を意識した縦位埋設例が大木 8a 式・大木 9b 式に確認される。屋内逆位底部穿孔例は、埋設属性に強い規制があり、埋設方法

にも一部規制が確認できる。分布する時期は大木 8a 式から大木 8b 式（一部は大木 9a 式まで）に限定され、分布範囲は盛岡周辺と沿岸部の刈屋川流域・宮古・山田湾周辺に集中する。一部、岩手郡岩手町や北上市にも確認され、この埋設に関する情報は盛岡周辺にも広がっており、情報の選択により分布の偏が生じた可能性も考えられる。縦位埋設で炉軸線上や柱穴内側の空間を意識した埋設や竪穴住居壁際へ埋設される例は、大木 8b 式新段階から後期第 3 段階に岩手県全域で確認され、大木 9b 式から大木 10 式新段階に多い。大木 10 式期に北上川中流域や沿岸中部・南部で増加する一方、後期初頭から前葉には沿岸北部や馬淵川流域に集中する。岩手県域では北部・南部ともに前期から中期前半の屋内が数例検出され、正位・逆位の双方があり特定の埋設姿勢に偏らない。屋内逆位底部穿孔例が先行し、縦位埋設で炉軸線上や柱穴内側の空間を意識した埋設や竪穴住居壁際へ埋設されるパターンに変化したとも捉えられるが、属性の規制が相対的に弱いパターンや多様な屋内のパターンの中から特定地域に規制が強い埋設パターンが出現したと考えるほうが自然だろうか。つまり、何らかの理由で強い規制をもつ埋設パターンが出現するが、これは強い規制をもつ埋設パターンが出現する前段階から採用されている相対的に規制の弱い埋設パターンと並存しており、何らかの理由で屋内逆位底部穿孔例の規制が開放され、規制の弱い埋設方法（縦位埋設で炉軸線上や柱穴内側の空間を意識した埋設や竪穴住居壁際へ埋設されるパターン）のみが後期前葉まで存続していくという変遷である。中期後葉以降になると出入口部への埋設や複式炉前庭部周辺への埋設、前述した住居中央部の空間や炉から柱穴ライン内側の空間を意識した縦位埋設、炉辺への埋設など様々な埋設パターンが確認されるが、その中でも「壁際への縦位埋設」が各時期に一定の割合を占め、岩手県域における基本的な埋設パターンの可能性が高い。

宮城県域の資料は管見に触れる限りでは奥壁部側の柱穴ライン内側や柱穴脇への埋設や壁際への埋設を主体とした縦位埋設例が多い。

福島県域の資料を概観する。住居内の壁際と柱穴を結んだラインに囲まれる空間に横位に埋設され、埋設土器は完形が選択され打欠や穿孔が加えられることが多いパターンが特徴的で、中期末葉から後期初頭に阿武隈川流域で盛行する。福島県域において屋内土器埋設遺構が盛行するのは中期後葉以降で、中期中葉の検出例は少なく、逆位埋設や埋設土器への底部穿孔例、炉軸線上や炉周辺の空間を意識した埋設例は確認できず、岩手県域に特徴的な埋設パターンは確認できな

い。筆者が確認した屋内157例のうち逆位系埋設は13例(8%強)あり、その多くは大木9b式から後期第1段階の例で会津東部や中通り、浜通りと広域に分布している。屋内逆位例に明確な底部穿孔例はなく、底部欠損例は12例中2例のみである。屋内逆位例の埋設位置は炉軸線上が意識された例はあるが、壁際や柱穴付近、前庭部周辺、出入口部、廃絶時の炉上埋設と埋設位置は様々である。盛岡周辺の屋内逆位底部穿孔例との関連性は指摘できないだろう。縦位埋設で炉軸線上や柱穴内側の空間を意識した埋設や壁際へ埋設される例は岩手県域と同様、大木8b式以降、大木9b式から大木10式中段階に集中し阿武隈川流域を中心に真野川流域や浜通りで後期前葉まで確認される。

以上、東北地方太平洋側地域を中心に屋内土器埋設遺構を概観した。東北地方では、大木9b式から大木10式に奥壁部側の柱穴ラインの内側に埋設する例や壁際埋設を主とした縦位埋設例の埋設パターンが主軸にあると考えられる。時間的な分布傾向は、岩手県域・宮城県域・福島県域ともに大きな差はみられず、両地域とも中期後葉以降、大木10式期に壁際埋設を主体とした縦位埋設例が集中し、後期前葉まで継続する。時期ごとに分布集中地域の偏りがみられる可能性があるが、壁際埋設を主体とした縦位埋設例は長期間存続する東北地方太平洋側地域における屋内土器埋設遺構の埋設パターンの基本であると考えられる。このような共通する埋設属性を有しながらも、岩手県域や福島県域では時期を異にしながら地域の特徴を有した埋設パターンが比較的短い期間に展開する。

関東地方東部

後藤信祐の集成研究(後藤2009)をベースに栃木県域を概観する。栃木県南半では加曾利E2式新段階、北半では加曾利E3式新段階以降に屋内土器埋設遺構が確認され、全域で中期末葉から後期初頭に発達し堀之内1式中段階まで確認される。南半では中期末葉から後期初頭に柄鏡形住居や敷石住居に伴う例も確認され明確な出入口部への埋設が増加し、出入口への埋設はほぼ同時期に北半でも増加する。埋設位置は出入口部・炉周辺・炉と柱穴の間の空間・壁際・複式炉前庭部などがあるが、全時期を通して「壁際への縦位埋設」が主体であり、炉周辺への埋設も中期末葉以降に増加する。埋設姿勢は、全時期を通して正位・正斜位が主体である。横位埋設は、八溝山地の西側を中心に分布し、芳賀郡茂木町松の木遺跡では阿武隈川流域の横位埋設パターンに相当する例が確認される。同町塙平遺跡では逆位埋設や合口埋設の屋内が確認されマイナーな埋設例が分布する。那珂川上流域では屋外横位例は阿武隈川流域との共通性がみられるが、屋内横位例は

発達しない。屋内逆位例や底部穿孔例も確認されず、中期中葉に屋内は発達しない。中期末葉以降は、南半地域を中心に南関東の典型的な柄鏡形住居と関連する出入口部・張出部埋設が確認され、南関東との共通性が高くなる一方、中期末葉以降の北半地域では、壁炉軸線上や炉周辺の空間を意識した縦位埋設例が確認され東北太平洋側地域との共通性がうかがえるが出入口部への埋設も存在し、東北と南関東の中間的な状況が読み取れる。

茨城県域の資料は正確に把握していないが、加曾利E3式古段階から堀之内1式に検出例を確認でき、後期初頭の例が多い。埋設位置は炉周辺や炉と柱穴の間の空間、壁際への埋設が確認できるが、炉と柱穴の間の空間や柱穴間への埋設、壁際への埋設例が多い。埋設姿勢は正位が主体で、横位埋設は後期第1段階併行に1例のみ確認した。確認した例が少なく地域的な傾向は見いだせない。現利根川下流域を挟んで千葉県域側では称名寺1式から堀之内1式の屋内が柄鏡形住居と関連して発達するが、茨城県域側の現利根川下流域では堀之内1式期の例が少ない。

千葉県域では東京湾東岸と印旛を中心に194例を確認している。加曾利E1式新相から堀之内1式に集中し、特に加曾利E4式から堀之内1式に多い。加曾利E2式からE3式の例は、東京湾湾口に近い地域でまとめて確認され曾利式系土器が埋設土器に使用される例も確認される。印旛では加曾利E2式例もあるが加曾利E3式以降の例が多い。東京湾湾口寄りの地域では壁際縦位埋設例が多く、印旛では壁際に加え柱穴間への縦位埋設例が多い。加曾利E3式新段階以降の例は、市原市以北の東京湾東岸と印旛で多い。加曾利E4式以降、埋設姿勢の傾向は変わらないが、埋設位置に出入口部を意識した埋設が出現する。後期初頭は圧倒的に正位系埋設が主体で、壁際縦位埋設や柱穴間縦位埋設、出入口部(柄鏡形住居連結部・張出部)埋設が増加する。壁際埋設と柱穴間埋設は柄鏡形住居以外の住居や印旛で多く、東京湾東岸では柄鏡形住居を中心に出入口部埋設が発達し、連結部や張出部に炉方向に傾斜する正斜位で埋設される例や1住居に2基埋設される例が増え、2基が炉軸線を意識して埋設される例が多い。堀之内1式になると東京湾東岸、特に市原市域を中心に屋内横位埋設が発達する。屋内横位埋設例は出入口部(連結部)に埋設される場合もあるが、住居壁寄りや壁際に柱穴を意識して埋設され、阿武隈川流域の横位埋設例に近い。屋内横位埋設は、印旛や東京湾湾口でも採用されるが、堀之内2式以降、屋内は急減する。千葉県域に特徴的で、屋内と類似する遺構として、加曾利E3式期の小竪穴内の壁際にピット

を穿って土器を埋設する例（松戸市子和清水貝塚、四街道市中山遺跡、千葉市有吉南貝塚、市原市草刈貝塚）がある。同様の例は、福島県河沼郡柳津町石生前遺跡の大木8b式古段階例がある。屋内逆位例・底部穿孔例は確認できず、中期中葉に屋内は発達しない。千葉県域の屋内は、東京湾湾口寄りの地域では曾利式系土器の波及とともに東京湾西岸を介した中部高地の影響が波及し、中期後葉前半に屋内が内房で先行して発達すると考えられる。中期末葉から後期初頭は東京湾東岸でも松戸・市川・船橋・習志野・千葉市域に集中し、後期前葉には市原市域周辺に集中するといった時間的な分布集中域の変化が確認される。壁際や柱穴間に正位に埋設するパターンが主体的な埋設方法でありながら、時期ごとに特徴的な埋設属性が出現する。中期末葉から後期初頭は柄鏡形住居に関連した連結部・張出部への縦位系主体の埋設、後期前葉には柱穴を意識した横位の埋設が主体となる。印旛や東京湾湾口寄りの地域でも中期後葉以降、東京湾東岸との関係のなか後期前葉まで屋内の構築が継続する。中期末葉から後期初頭に顕著となる特徴は、西南関東と連動した「典型的な柄鏡形住居」の波及に伴う変化であり、竪穴住居の設計に伴って波及したあるいは在地の埋設方法が変容したと考えられる。後期前葉の屋内横位埋設には、市原市域周辺で阿武隈川流域との関係がうかがえる屋内横位埋設が確認できる（石井2011）ことが注目される。

5-5-3. 屋外横位土器埋設遺構と屋内横位土器埋設遺構

屋外横位埋設は大木9b式/加曾利E3式期以降、那須～中通りで大木10式中段階から後期第1段階にかけて共に盛行する。一方、屋内横位埋設が盛行するのは大木10式中段階から綱取I式にかけての中通り（特に郡山周辺や三春町周辺）であり、堀之内1式期には検出例は少なくなる。屋内横位埋設は那須では発達せず、関東地方東部で検出例が集中するのは堀之内1式古段階・中段階の東京湾東岸、特に市原市域周辺である。このように、屋外横位埋設は中期末葉から後期初頭に那須～中通りに限定的に発達するのに対し、屋内横位土器埋設遺構は地域・時期は限定的なものの時期がずれて中通りと東京湾東岸という離れた地域で発達しており、屋外と屋内の時空間的分布の違いを確認できる。

筆者は、関東北東部～東北南部における屋内が、住居内に設置されるという遺構の性格から一定の規制を有して中部高地・西南関東から波及しその規制をある程度維持して受容された遺構であるのに対し、屋外は特定の中心地をもたず各地域で出現・展開した在地的

要素が強い遺構と仮定したうえで、屋外横位埋設が屋内横位埋設に先行すると判断し、屋外横位埋設の地域性が波及してきた屋内の中に採り入れられることにより、地域性の強い屋内が中期末葉から後期初頭にかけて阿武隈川流域で展開したと推測した（太田2019b）。福島県域では阿武隈川上流域を中心に大木9b式に屋内横位埋設が出現し、大木10式期に発達する。屋外横位埋設は大木9a式から後期第5段階に確認され、大木10式古段階/牛蛭1式前半から後期第1段階まで盛行する。屋内・屋外ともに横位土器埋設遺構が盛行する時期はほぼ同じで、出現は屋外が先行することから上記の推測と見かけ上の矛盾はない。

一方、那珂川上流域では屋内横位埋設は発達せず、屋外横位埋設が那珂川上流域と比べて発達しない八溝山地の西側において後期初頭の屋内横位埋設（茂木町椀の木遺跡A10住居）や屋内正斜位合口埋設（茂木町塙平遺跡SI-02）が確認される。屋内・屋外間の埋設属性の相互関係は、屋内・屋外どちらかの横位が発達した地域でもう一方にも横位が採用されるといった単純な構造ではない。栃木県域の屋外横位埋設は小山市寺野東遺跡埋3・埋35（後期初頭）、那須烏山市荻ノ平遺跡SX-127（堀之内1式）、下都賀郡壬生町八剣遺跡SX-72（堀之内1式）、佐野市北の内遺跡のⅢ区2号埋甕（後期前葉）で確認されるが検出例は少ない。茨城県域では、後期初頭に「舌状突起を有する土器群」も用いられながら水戸市砂川遺跡で少なくとも7例の屋外横位埋設例が、後期前葉に龍ヶ崎市南三島遺跡3区M14・5区M14で堀之内1式期の屋外横位埋設例が確認されるのみである。中部高地・西関東でも後期初頭から前葉の屋外横位埋設例は少ない。

千葉県域では堀之内1式期に千葉市大膳野南貝塚、市原市武士遺跡・能満上小貝塚、袖ヶ浦市山野貝塚で1遺跡1～2例の屋外横位埋設例が確認されており、南関東・東関東のなかでは検出例が集中する。武士遺跡や市原市西広貝塚、君津市三直貝塚、佐倉市宮内井戸作遺跡では屋内横位埋設が4遺跡で計10基以上確認されており、出入口部（連結部）周辺への埋設の他に、阿武隈川流域の壁際横位埋設に類似する壁際柱穴ラインを意識した埋設パターンも確認できる。この時期の土器群の動きをみると、堀之内1式に入る時期は、東北と東関東の土器群の相互の関係が強まり、北上川中流域や福島県域の土器群の影響が千葉県の太平洋側地域を中心に確認される時期であり、屋内横位埋設例が集中する市原市域でもその影響がみられる資料は多数確認される。特に、堀之内1式の成立前後には綱取I式の影響が千葉県の太平洋側地域のみならず市原市周辺域でも強く、堀之内1式を構成する土器群の

生成に深く関与している（石井 1993；鈴木 2018）。牛蛭式の系譜として後続する綱取Ⅰ式の土器の情報の波及とともに牛蛭式や綱取Ⅰ式と関連性が強い「屋外横位埋設」の情報が東関東にも拡散し、千葉県の一部地域で積極的に受容され、屋外横位埋設だけでなく後期初頭から前葉に千葉県域で柄鏡形住居とともに発達する屋内のなかにも転写され定着したと考えられ、土器の情報とともに土器埋設遺構の情報が拡散・受容された可能性が高い。すべての遺構の情報が土器情報とともに拡散するとは限らないが、何らかの要因で選択され発達した「屋外横位埋設」の情報は特定の土器群の展開とともに拡散している可能性が高く、その情報が定着する地域が遠隔地にモザイク状に分布するといった状況も読み取れ、各地域の情報を受容する素地等の要素に基づく情報の選択が反映されている可能性がある⁶⁾。

屋外・屋内の土器埋設遺構をベースに遺構の情報の拡散・受容のひとつのケースを確認した。ここに示した分布や影響関係、情報の拡散・受容の形態はこの時期の何らかの背景に起因する特殊な例かもしれない。しかし、後期初頭における遺物・遺構の情報の拡散・受容のひとつのケースを表している好例であり、今後、他の遺物・遺構の分析を加えながら、このような状況の背景を考えていく必要がある。

6. 対象資料からみる中期後葉～後期前葉の一様相

6-1. 屋外土器埋設遺構にみる空間利用の変化

本稿の分析から後期初頭から前葉に群集出土タイプと住居域外埋設が増加する傾向にあること、後期初頭に配石に近接するⅡ-a-ii類が増加することが示された。この時期の東北地方太平洋側地域、特に宮城県域や北上川流域では、土器資料は豊富に出土するが堅穴住居跡群を伴う遺跡が確認されず、配石遺構群や土器埋設遺構群を主体とする遺跡が増加する傾向にある。しかし、福島県域では後期前葉の堅穴住居も一定数確認され、住居に近接したり居住域の外縁に埋設されたりするⅠ類の屋外土器埋設遺構が確認されている。すべての屋外土器埋設遺構の出土位置が変化したわけではなく、屋外土器埋設遺構の一部が配石遺構や土坑群と結びついて特定の間を形成するようになったと考えられる。同時期の居住域に近接して配石遺構や土器埋設遺構が構築される場合もあり、配石遺構・土器埋設遺構空間が居住域と違う場所に形成されていない遺跡も確認される。群集出土タイプの増加が後期前葉に確認されるが、確実に同時期である群集出土例は多くない。後期以降に東北地方太平洋側地域における各遺跡の土器埋設遺構群も出土土器の検討から一度に形成さ

れたものなのか、時間差をもって形成されたものなのかを再度確認する必要がある。一度に同一地点に広く展開したのか、同一地点を一定の時間幅で繰り返し利用したのかでは「場の利用意識」は異なってくる。

Ⅰ-c類（住居址覆土土器埋設遺構）は居住域とその他の空間の関係を考えるうえで重要である。これは堅穴住居の覆土に堅穴住居の所属時期と同時期か1段階・2段階後の土器埋設遺構が構築された例を分類している。Ⅰ-c類は福島県域において、中期後葉から後期初頭に一定数確認され、中期末葉には2～3基が近接する例も確認される。福島県域では後期第1段階にⅠ-c類の比率が低下するようにみえるが、単純に「配石遺構に伴う土器埋設遺構が増えて住居址覆土土器埋設遺構が減ったことにより居住域とは別の特定空間が形成された」と判断はできない。拙稿では栃木県域において後期に入って「特定空間の形成」「区画機能」といった遺跡内の空間の区分意識が生まれたと推定したが（太田 2019a）、「特定空間」の形成は、屋外土器埋設遺構の出土位置の変化や住居址覆土土器埋設遺構の検討、住居址覆土配石遺構、配石遺構と居住域の関係などをふまえ再度検討していきたい。居住域との関係は、継続的に一定数の堅穴住居が構築されるような拠点的な一部の遺跡（本宮市高木遺跡など）では一定の同時期堅穴住居のまとまりとその住居域の外縁部に埋設される土器埋設遺構が確認されたが、西関東（群馬県長野原町横壁中村遺跡）や中部高地（山梨県北杜市酒呑場遺跡）などで確認される中央広場への埋設や住居域と中央広場の境界への埋設といった明確な遺構配置は認められなかった。今回、検討対象外の郡山市上納豆内遺跡は環状の堅穴住居配置と土器埋設遺構群の関係が読み取れる好例かもしれないが、各遺構の詳細が判然とせず分析は難しい。

本稿における分析の結論としては、後期初頭から後期前葉に住居域外の土器埋設遺構が配石遺構と関連して増加することは確かであるといえる。しかし、これらを「空間利用の変化」と明確に捉えるには前段階の居住域との関係（住居址覆土土器埋設遺構・配石遺構）や同時期の居住域と非居住域の関係（配石遺構・土器埋設遺構と居住域）についてより詳細に検討を重ねる必要がある。

6-2. 屋外土器埋設遺構と特定の土器群の結びつき

中期末葉から後期初頭に阿武隈川流域～那珂川上流域を中心とした地域において、中期後葉から連続する屋外土器埋設遺構のなかから何らかの要因で屋外横位土器埋設遺構が一定期間発達し、阿武隈川流域では屋内土器埋設遺構に転写される。この時期・地域に発達

する屋外横位土器埋設遺構は、他地域で付加される例が少ないマイナーな埋設属性が複数個付加され、特定の土器群（牛蛭式）との関係が強くなる、といった地域的な特徴を有している。このような屋外土器埋設遺構が特定の時期・地域で出現した要因は把握できていないが、特定の土器群と特徴的な土器埋設遺構との関連が専用埋設土器の可能性を示唆する点や同時期に人骨が出土する屋外土器埋設遺構例や土器棺の可能性がある出土例が存在する点、住居域外への埋設例が増加する点などを考慮すると葬制・墓制の変化と関連づけて考えることに意味があり、当該期の社会の変容を考えるうえで重要な資料となる。

短期間に特定の地域で横位土器埋設遺構が屋外・屋内ともに出現・発達する背景を屋外土器埋設遺構・屋内土器埋設遺構間の情報の転写が普遍的に行われることを前提に考えると、横位埋設の遺構の情報は牛蛭式から綱取Ⅰ式の土器の情報とともに阿武隈川流域から周辺地域に拡散していたが、情報を受容する各地の状況（各地域で前段階から系統をたどれる土器埋設遺構が存在し、その土器埋設遺構が情報拡散の時点で出現・展開しているかどうかなど）や各地の人びとの情報の選択の結果から、隣接地域では採用されなかったと考えられる。この各地の受容の選択の要因は、土器埋設遺構のみならず各種の文化要素が関与していると考えられるが、中期末葉から後期初頭に発達する横位土器埋設遺構の影響が後期前葉の東京湾東岸で確認できることは、当該期の土器埋設遺構の情報拡散・受容の複雑な状況を示すとともに土器の情報と土器埋設遺構の情報とが一体化して拡散している可能性を示し、東京湾東岸の市原市域周辺では土器と土器埋設遺構の情報がともに受容されたと考えられる。特定の時期・地域における土器埋設遺構が、土器の情報とともに広域に拡散し、受容の素地がある地域では選択的に受容され、定着するといった情報の拡散・受容が生じていた可能性が明らかとなってきた。このような遺物と遺構が相互に関連して情報が拡散・受容しているケースをもとに、複数の要素から当該期の情報の拡散・受容の状況を検討していくことで、地域間関係や社会の変容に迫ることが可能となると考えている。

本稿では、横位土器埋設遺構のように広域に拡散した情報が地域ごとに選択的に受容された結果、モザイク状に類似する土器埋設遺構が展開する様相や一部の地域で特徴的に選択される様相が生み出されたと推定できる状況を把握することができた。同時に土器埋設遺構は、埋設土器に用いられる土器群との結びつきが強い場合があることも把握された。中期後葉から後期前葉には中心地は比較的限定的であるものの広域に展

開する土器群が本稿で触れた土器群以外にも存在する（曾利式系土器、方形区画文系土器群など）。このような土器群も他の遺物・遺構と何らかの関係を有している場合があるかもしれない。このような視点で地域間関係や各種文化要素の拡散・受容を考える必要がある。また、今回のような土器群と遺構との結びつきが強くなる背景が、当該期の社会の変容を考えるうえでヒントになるだろう。

謝辞

本稿は、2020年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した学位請求論文の内容の一部を含む。ご指導賜った、佐藤宏之先生、設楽博己先生、福田正宏先生、阿部昭典先生、根岸洋先生に感謝申し上げます。

資料調査に際して下記の諸氏・諸機関にお世話になり、ご教示いただきました。感謝申し上げます。

伊東格、稲村晃嗣、井上雅孝、岩田貴之、小川慶一郎、金子佐知子、工藤美樹、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、北上市埋蔵文化財センター、滝沢市埋蔵文化財センター（五十音順・敬称略）

本稿は、公益財団法人高梨学術奨励基金令和2年度若手研究助成、日本科学協会笹川科学研究助成（2020年度）による助成を受けた研究の成果を含んでいる。

註

- 1) 郡山市仁井町遺跡・上納豆内遺跡では大木9b式～綱取Ⅱ式期の複数の屋外土器埋設遺構が報告されている。横位埋設が多く、玉類や骨片が出土した土器埋設遺構も含まれる。上納豆内遺跡では環状の堅穴住居跡の配置に沿って住居近辺や中央広場、中央広場と住居域の境界位置への埋設、住居址覆土土器埋設遺構も確認されている。しかし、全ての住居・土器埋設遺構が図示されておらず、時間的変化を検討することが難しいため、今回は分析対象に含めていない。また、旧月館町（現伊達市）西原遺跡にて後期の堅穴住居跡群と土器埋設遺構群が検出されていることを伊達市保原歴史文化資料館令和4年度第3回企画展の告知で知った。報告書を確認できておらず、これらの資料群の中にも今回分析対象とした時期の資料が含まれていると考えられる。このように、本稿の集成には遺漏が多いことを断っておく。
- 2) 土器型式とは何か、土器型式の設定要件は何かが必要か、型式設定の手続きはどのように行うのか、といった点は、土器の検討を行う際に改めて先行研究をもとに再考し、筆者の見解を提示し、それをふまえて仮設定した「牛蛭式」を型式として認定するか棄却するか判断したい。
- 3) 綱取式は、浜通りで層位的な出土資料も含む良好なまとまりが確認されている。阿武隈川流域を中心に展開した牛蛭式に後続する土器群の分布の中心が浜通りに移るのか、という点も検討課題である。
- 4) 論考に著していないが、福島県域の各地域の主要遺跡の堅穴住居数を集成したところ、大木9b式から大木10式古段

階に堅穴住居数のピークがくる傾向が読み取れた。大木10式中段階にはほとんどの地域・遺跡で堅穴住居数は減少し、以降増加することなく低調となる。再び堅穴住居数が増加に転じるのは後期前葉の後期第3段階である。

- 5) 今回、埋設土器の図面がなく白黒写真でしか確認できなかったため集成に加えていない資料として、会津・猪苗代湖西側に位置する会津若松市下川原遺跡の屋外土器埋設遺構14基がある。大木8b式から後期前葉に断続的に利用された遺跡で、堅穴住居等の遺構の時期比定が難しいが、確実な堅穴住居は大木9b式から大木10式古段階の複式炉付住居が確認されている。屋外土器埋設遺構は、大木9a式から牛蛭2式の時期を主体とするとみられ、群集出土タイプも確認されている。埋設姿勢は正位が主体だが、牛蛭式併行期と考えられる10・14・15号埋設土器で横位が確認され10号には底部穿孔がなされているようである。本遺跡は、中期末葉から後期初頭における阿武隈川上流域を中心とした屋外土器埋設遺構の展開の中に会津がどのように位置づけられるかを評価するうえで重要である。猪苗代湖周辺の資料を精査することで、当該期の会津さらには会津を介した北・西の地域との屋外土器埋設遺構における地域間関係を把握できるだろう。近年調査された南会津郡下郷町栗林遺跡は中期後半から後期前半の拠点的な集落とみられ、喜多方市藤権現遺跡からは後期前半とみられる土器埋設遺構が多量に検出されている。これらの資料の報告をふまえて会津の土器埋設遺構をはじめとする遺構の分析を行っていく必要がある。
- 6) 山形県村山市中村A遺跡EU204では、加曾利E4式後半段階の土器を用いた屋外横位土器埋設遺構が検出されている。この時期に牛蛭式を用いた屋外横位土器埋設遺構が盛行すると同時に網取式の成立にむけて結びつきが強くなる土器群も屋外横位埋設遺構に使用され、横位土器埋設遺構と結びついて周辺地域に拡散している可能性もあるため、このような状況を今後どう解釈していくかが課題である。

引用文献

※土器図版に引用ならびに対象資料集成に用いた発掘調査報告書は紙幅の都合上割愛させていただく。

青木秀雄 1983 「道平遺跡出土の縄文後期初頭の土器について—いわゆる網取式前半の様相—」『道平遺跡の研究—福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査—』福島県大熊町教育委員会, 181-194

相原淳一 1988 「考察 土器」『大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』宮城県文化財調査報告書126: 395-455

阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』アムプロモーション

阿部勝則 1998 「岩手県における縄文時代中期中葉の底部穿孔埋甕について—住居内出土事例を中心に—」『紀要』XVIII: 29-36, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

阿部勝則 2008 「埋甕(東北地方)」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 1116-1121

池谷信之 1988 「東北地方における縄文時代中期末葉の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12: 69-112

石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『研究集録』9: 1-70, 横浜市埋蔵文化財センター

石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』9: 1-70, 財団法人横浜市ふるさと歴史財団

石井 寛 1993 「堀之内I式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告14, 271-289

石井 寛 1995 「原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19: 327-364

石井 寛 2011 「縄文時代後期の住居址内土坑」『縄文時代』22: 43-72, 縄文時代文化研究会

石井 寛 2018 「堀之内1式土器・2式土器の成立を巡る若干の問題」『東海縄文研究会 第7回例会 東海からみた後期前葉土器群』東海縄文研究会, 1-14

石坂圭介 2008 「三十稲場式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 618-625

石坂圭介 2012 「新潟県における縄文時代中期後葉から後期初頭の土器様相」『三十稲場式土器文化の世界—4・3kaイベントに関する考古学現象②—』津南シンポジウムVIII, 21-38

市立市川考古博物館 1982 『シンポジウム堀之内式土器資料集』

稲村晃嗣 1990 「加曾利E系列の土器群」『調査研究集録』7: 9-16, 横浜市埋蔵文化財センター

稲村晃嗣 1994 「両耳壺の研究ノート」『民族考古』2: 23-42, 慶應義塾大学民族学考古学研究室

稲村晃嗣 1997 「IV考察 11号住居跡覆土出土遺物について」『横欠遺跡(本文編)』北上市埋蔵文化財調査報告30: 25-47

稲村晃嗣 2004 「千葉県山武姥山貝塚出土の縄文時代後期初頭土器について」『時空をこえた対話—三田の考古学—』慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集, 85-90

稲村晃嗣 2008 「門前式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 536-543

今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)(下)」『考古学雑誌』63(1)・63(2): 1-29・22-60

岩永祐貴 2019a 「岐阜県における埋甕の系統差と埋設方法」『奈良大学大学院研究年報』24: 9-23

岩永祐貴 2019b 「山梨県における埋甕集成」『山梨考古学論集』VIII: 33-46, 山梨県考古学会

岩永祐貴 2020 「山梨県の埋甕の様相」『研究紀要』36: 27-42, 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

海老原郁雄 1988 「北関東加曾利E式土器様式」『縄文土器大観3中期II』小学館, 279-282

太田 圭 2017 「縄文時代における屋外土器埋設遺構の研究—「埋甕」のこれまでとこれから—」『アーキオ・クレイオ』14: 1-26, 東京学芸大学考古学研究室

太田 圭 2019a 「栃木県における縄文時代の屋外土器埋設遺構」『アーキオ・クレイオ』16: 1-22, 東京学芸大学考古学研究室

太田 圭 2019b 「縄文時代の栃木県域における堅穴住居数の動向とその背景」『東京大学考古学研究室研究紀要』32: 1-33

太田 圭 2019c 「縄文時代屋外土器埋設遺構集成表」『アーキオ・クレイオ』16: 115-128, 東京学芸大学考古学研究室

太田 圭 2020 「縄文時代中期／後期移行期における社会の変容プロセス解明にむけての基礎的研究—中期末葉から後期初頭の関東から東北北部における広域土器編年の整理—」『高梨学術奨励基金年報 令和元年度助成研究成果報

- 告」高梨学術奨励基金, 68-75
- 太田 圭 2021 「東日本における縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての地域間関係の検討—土器の分析を中心として—」『高梨学術奨励基金年報 令和2年度助成研究成果報告』高梨学術奨励基金, 110-117
- 岡本 洋 2014 「青森県の埋設土器・埋設遺構集成」『北日本縄文時代埋設土器・埋設遺構集成』北日本縄文文化研究会叢書2: 143-314
- 押山雄三 2002 「東北地方南部における縄文後期前葉の土器」『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会, 18-31
- 小保内裕之 2008 「陸奥大木系土器(榎林式・最花式・大木10式併行土器)」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 368-375
- 柿沼修平 1975・1976 「堀之内式土器論(1)(2)」『史館』5・6: 26-33・31-38, 史館同人
- 金内 元 2012 「新潟県の後期前葉土器研究の展望—南三十稲場式土器について—」『縄文後期土器研究の現状と課題』第25回縄文セミナー, 縄文セミナーの会, 35-69
- 金内 元 2015 「仙台湾における「南三十稲場式系統」の土器について」『三面川流域の考古学』13: 21-38, 奥三面を考える会
- 金内 元 2018 「「アチャ平3期」を再考する—三十稲場式と南三十稲場式の併行関係を中心に—」『三面川流域の考古学』16: 17-26, 奥三面を考える会
- 金子優子 2002 「第V章2B分(3)」『第七章1A(1)』『元屋敷遺跡Ⅱ(上段)本文編』朝日村文化財調査報告書22: 112-120・429-437
- 加納 実 1989 「千葉県における加曾利E式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』第3回縄文セミナー, 縄文セミナーの会, 217-254
- 加納 実 1994 「加曾利EⅢ・EⅣ式土器の系統分析—配列・編年の前提作業として—」『貝塚博物館紀要』21: 1-41, 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実 2003 「縄文時代後期堀之内1式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』30: 22-64, 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実 2008 「堀之内式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 586-593
- 菅野智則 2007 「東北地方縄文時代中期後半土器の研究—器形変化に関する属性分析—」『考古学談叢 須藤隆先生退任記念論文集』, 265-285
- 菅野智則 2011a 「東北地方における中期後半大木式土器に関する研究基盤の成立過程」『博古研究』41: 21-35, 博古研究会
- 菅野智則 2011b 「中期後半大木式土器に関する学史的検討を通じた方法論的展開」『博古研究』42: 1-16, 博古研究会
- 菅野智則 2017 「大木式土器の地域性に関する学史的検討 東北地方北部における中期後半土器型式編年研究を通じて」『博古研究』53: 34-43, 博古研究会
- 北日本縄文文化研究会 2014 『北日本縄文時代埋設土器・埋設遺構集成』北日本縄文文化研究会叢書2
- 黒尾和久 2016 「基調報告3: 加曾利E式」『新地平編年の再構築』シンポジウム縄文研究の地平2016, 47-65
- 後藤信祐 2009 「栃木県における縄文中期後半～後期前半の「埋甕」の様相」『野洲考古学論巧—中村紀男先生追悼論集—』, 171-192
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)」『勝坂から曾利へ』シンポジウム縄文集落研究の新地平3, 3-30
- 志賀敏行 1990 「網取I式土器編年序説」『史峰』15: 26-35, 新進考古学同人会
- 菅原哲文 1999 「山形県における縄文時代中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—」『山形考古』6: 37-55
- 菅原哲文 2007 「東北地方中期縄文文化における地域性的研究—宮城県登米市浅部貝塚出土土器の分析を中心として—」『考古学談叢 須藤隆先生退任記念論文集刊行会』, 213-237
- 鈴木良一 1982 「遺物について 縄文土器」『馬見塚遺跡』相馬市文化財調査報告書, 123-126
- 鈴木良一 1984 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告V 上ノ台A遺跡(第一次)』福島県文化財調査報告書128
- 鈴木克彦 2000 「東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究(上)—大曲1式などの中期末葉の土器群—」『縄文時代』11: 41-68, 縄文時代文化研究会
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2004 「門前式土器様式の編年学的研究—門前様式の再構築と細分指標—」『考古学雑誌』88(4): 28-59, 日本考古学会
- 鈴木 源 1997 「網取Ⅱ式土器覚書—深鉢形土器を中心として—」『史峰』23: 1-14, 新進考古学同人会
- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式関沢類型の後裔—堀之内1式期における小仙塚類型群の形成—」『縄文土器論集』縄文セミナーの会, 337-370
- 鈴木徳雄 2007 「称名寺式と異系統土器の共存の問題—諸類型の形成過程と土器群の編成(覚書)—」『縄紋社会の変動を読み解く予稿集』縄紋社会をめぐるシンポジウム5, 51-70
- 鈴木徳雄 2013 「称名寺式前後の土器の存在形態と変化—土器系統の存在形態と器種の推移—」『関東甲信越地方における中期/後期変動期4.3ka イベントに関する考古学現象③』, 51-70
- 鈴木徳雄 2018 「縄紋後期前半における土器型式の存立構造—関東信越地域の「型式」と諸「類型」—」『地域考古学』3: 1-51, 地域考古学研究会
- 田中耕作 1999 「第2章 縄文時代 第2項 後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会, 105-113
- 田中耕作 2002 「新潟県における縄文時代後期前葉の土器群」『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会, 50-63
- 田中耕作 2019 「第2章第2節第5項2-1)~6)」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会, 106-109
- 谷井 彪 1977 「称名寺式土器の推移について」『埼玉県立博物館紀要』3: 55-67
- 千葉 毅 2012 「三十稲場式期における「関東系」土器群の様相」『三十稲場式土器文化の世界—4・3ka イベントに関する考古学現象②—』津南シンポジウムⅧ, 101-110
- 千葉 毅 2013 「関東甲信越地方における称名寺式土器と加曾利EⅤ式土器の混在の様相」『関東甲信越地方における中期/後期変動期4.3ka イベントに関する考古学現象③』, 23-34
- 永瀬史人 2015 「北東北における円筒土器文化の変容過程に関する考古学的研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』18:

- 41-56
- 仲田茂司 1992 「考察 土器」『西方前遺跡Ⅳ 本文編』三春町文化財調査報告書16：83-140
- 中野幸大 2008 「大木7a～8b式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 352-359
- 中村良幸 1986 『岩手県稗貫郡大迫町観音堂遺跡—第1次～6次発掘調査報告書—』大迫町埋蔵文化財報告11
- 成田滋彦 1997 「屋内埋設土器考—青森県の事例を中心に—」『史跡三内丸山遺跡年報』2：26-39
- 丹羽 茂 1971 「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』12：1-21, 福島県考古学会
- 丹羽 茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣, 43-60
- 丹羽 茂 1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館, 346-352
- 野坂知広 2022 「縄文時代後晩期屋外土器埋設遺構覚書」『神奈川考古』58：41-48, 神奈川考古同人会
- 早瀬亮介・菅野智則・須藤 隆 2006 「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木罫貝塚出土基準資料 山内清男編年基準資料」『Bulletin of the Tohoku University Museum』5：1-40
- 廣田和徳 2021 「沢尻東原遺跡 北沢東工場適地の開発事業」『長野県埋蔵文化財センター年報』37：25-26
- 福島県教育委員会 1991 「三春ダム関連遺跡発掘調査報告4」福島県文化財調査報告書254
- 福島県教育委員会 1996 「三春ダム関連発掘調査報告8」福島県文化財調査報告書322
- 福島雅儀 1987 「阿武隈川上流域における縄文時代中期後半の土器」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ, 75-88
- 福島雅儀 1989 「柴原A遺跡(第1次)調査の成果と課題」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』2 福島県文化財調査報告書217：213-239
- 福島雅儀 2012 「阿武隈川上流域における縄文中期から後期への集落変化 福島県三春町柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘調査から」『国立歴史民俗博物館研究報告』172：357-414
- 堀越正行 1972 「加曾利E式土器研究史(2)」『信濃』24(3)：65-79, 信濃史学会
- 本間 宏 1990 「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『縄文後期の諸問題』第4回縄文セミナー, 縄文セミナーの会, 215-266
- 本間 宏 1994 「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』10：3-24, しのぶ考古学会
- 本間 宏 2008 「南境式・網取式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 544-551
- 馬目順一 1968 「網取貝塚第四地点発券の堀之内I式土器の考察」『小名浜』いわき市教育委員会, 127-156
- 馬目順一 1970 「いわき市片寄貝塚発見の後期縄文土器について」『考古』16：43-48, 福島県立磐城高等学校史学研究クラブ
- 馬目順一 1977 「いわゆる『網取貝塚C地区』の土器について」『考古』19：35-46, 福島県立磐城高等学校史学研究クラブ
- 馬目順一 1982 「南東北—いわき市愛谷遺跡出土品—」『シンポジウム堀之内式土器』市立市川考古博物館
- 水沢教子 2022 「屋代遺跡群出土の被覆型埋甕とその胎土」『長野県立歴史館研究紀要』28：17-27
- 宮城県教育委員会 1967 「新産業都市指定地区埋蔵文化財緊急発掘調査等報告書」宮城県文化財調査報告書13
- 森 幸彦 1985 「84塩沢上原A遺跡発掘調査概報」福島県立博物館調査報告10
- 森 幸彦 2008 「大木9・10式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション, 360-367
- 八巻一夫 1974 「縄文中期文化の一試論—複式炉埋設土器の面から—」『遮光器』8：72-79, みちのく考古学研究会
- 山崎充浩 1990 「春田遺跡 第四節 縄文時代中期の遺物」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』3 福島県文化財調査報告書235：184-196
- 山田康弘 2015 「土器棺墓(土器埋設遺構)」『季刊考古学』130：56-60, 雄山閣
- 柳澤清一 1977・1978・1979 「称名寺式土器論(前篇)(中篇)(続)」『古代』63：22-60, 65：1-24, 66：1-28, 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 1980 「大木10式土器論」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集』, 55-77
- 柳澤清一 1987・1989 「東北縄文中・後期編年の諸問題 その1・その2」『古代』84：33-80, 88：84-107, 早稲田大学考古学会
- 柳澤清一 2006 「縄文時代中期・後期の編年学的研究 広域詳細別編年体系の達成を目指して」千葉大学考古学叢書3

図版出典

図1：国土地理院地図陰影起伏図をもとに筆者作成、図2：仲田1992に加筆、図3：福島2012をもとに再構成、図4：馬目1982、図5：池谷1988、図6：菅野2007、図7～21：報告書掲載の土器図版をもとに筆者作成、図22～37・表1～3：筆者作成

The Relationship between Pottery Assemblages and Archaeological Features from Final Middle to Early Late Jomon Period: Analysis of “Outdoor Pottery Burying” in the Fukushima Prefecture

Kei OTA

Through the collection and analysis of the “outdoor pottery burying” (hereinafter referred to as the “OPB”) in the Fukushima Prefecture area, I examined the aspects of diffusion and acceptance of information on the archaeological feature and changes in spatial use during Final Middle to Early Late Jomon Period.

As a premise, this paper arranges the pottery assemblages in Final Middle to the beginning of Late Jomon period in the Pacific coast of eastern Japan. In the process of this reorganization, it was recognized that a local pottery group (Ushibirutype) was established in the Abukuma River basin from Final Middle to the beginning of Late Jomon period with the involvement of several pottery groups. Ushibirutype formed the basis for the subsequent formation of Tsunatoritype pottery group.

In analyzing OPB, it was found that there was a strong connection between a specific group of pottery “Ushibirutype” and “horizontal OPB (“hOPB”). In other words, it was found that there was a strong link between specific groups of pottery and pottery burying with specific attributes.

Focusing on hOPB, I examined OPB and the indoor pottery burying in the Pacific area from eastern Kanto to central Tohoku. As a result, it was possible to have a certain perspective on the difference in the diffusion and acceptance of information on the structure of buried pottery in the ground.